毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢

明治三十年一月廿五日發兌



第九拾四號

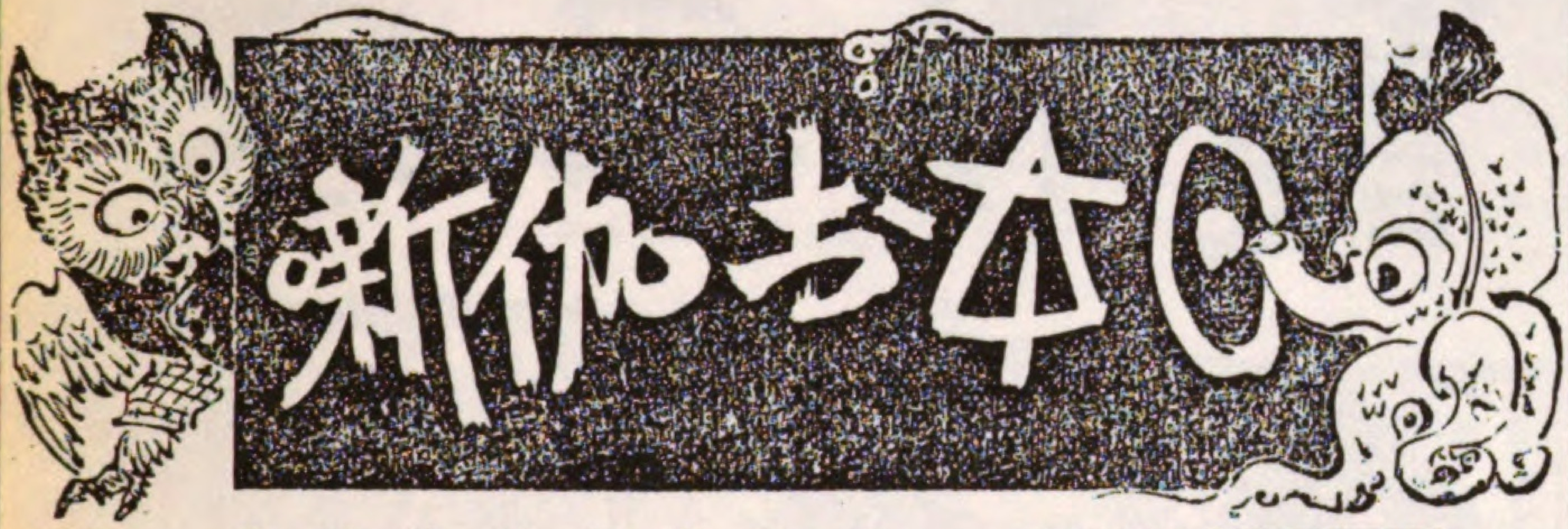
春期大附録

社説＝老者を遇する道
科學＝海の世界、餅の敵
史談＝モルトケ將軍の家庭（櫟川叟）

雛林蹈破 久保田米仙
金魚の盞 二十三階堂
漁師の娘 蘆花生
おなみ 金子春夢

文藝＝雲の上、神かくれ
談叢＝大盃
詳書解題＝古今和歌集
近著紹介＝近刊書
社交一班＝流行案内
家政＝話の種々、料理、庖厨雜俎等
雜録＝小兒の世界、理想的四季生活

巖谷漣山人編



日本お伽噺第五編發刊廣告

筒井年峰畫

正價金六錢
郵税二錢

八幡太郎

苟も源義經を知る者は、又八幡太郎を知らざる可からす。苟も加藤清正を知る者は、又八幡太郎を知らざる可からず。然り而して苟も西郷隆盛を知る者は、又八幡太郎を知らざる可からず。八幡太郎源義家は實に千古の英雄なり。智あり勇あり、仁あり義ある、彼の千古の英雄は、此一小冊子によりて、現世に躍り出たり。吾と思はん輩は來つて其の風采を見よ。來つて其の武勇を見よ。來つて其の功勳を見よ。

日本お伽噺全部目次

第一編 八咫烏
第二編 田村將軍
第三編 玉取
第四編 源三位
第五編 八幡太郎
第六編 武藏坊
第七編 宇治川
第八編 一休和尚
第九編 川中嶋
第十編 東照宮
第十一編 白虎隊
第十二編 玄武門
第十三編 草薙劍
第十四編 野見宿禰
第十五編 養老瀧
第十六編 鎭西八郎
第十七編 鬼童丸
第十八編 朝比奈
第十九編 最明寺
第二十編 櫻井驛
第廿一編 日吉丸
第廿二編 和藤内
第廿三編 熊本城
第廿四編 高千穗

正價 ●一冊金六錢●六冊前金卅四錢●十二冊前金六十五錢●廿四冊前金一圓二十錢●郵税一冊二錢 每月一回發行

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

大和田建樹先生著

日本歴史譚

毎月壹回發行洋裝大判壹冊百頁毎編密畫挿入

全部廿四冊

正價 壹冊金八錢◎六冊前金四拾八錢◎廿四冊前金壹圓六拾錢◎郵稅壹冊貳錢

忠孝の道を勸むるものは歴史なり、愛國心を勵ますものは歴史なり、我皇室の尊崇すべき所以を明にするも歴史なれば、我々祖先の勳功を知るも歴史なり。歴史讀まざるべからず、歴史の譚聞かざるべからず。大和田建樹先生一たび筆を史傳に執らるゝや、快絕にして趣味溢るゝが如きは、少年諸君の已に熟知する處、諸君が慈父母の膝下に此書を披きて、「あゝ面白へ」と叫ばるゝならん。

第貳編

畝傍山

全壹冊六判密畫入美本　正價金八錢郵稅二錢

村田丹陵密畫

日本歴史譚の第二編は、我皇室の御先祖さましますく神武天皇の御傳記なり、一たび之を繙かば、皇軍東征の戰況より、皇都創建の大業に至るまで、口づから其話を聞くが如く、目に其寫眞を觀るが如き感あらん。知るべし國民必讀の書なる事を、

日本歴史譚

全部目次

第壹編……日本開闢
第貳編……畝傍山
第參編……三韓征伐
第四編……聖德太子
第五編……菅丞相
第六編……九郎判官
第七編……惡七兵衛
第八編……曾我兄弟
第九編……相撲太郎
第拾編……日蓮上人
第拾壹編……護良親王
第拾貳編……楠公
第拾參編……豐太閤
第拾四編……七本槍
第拾五編……關ケ原
第拾六編……水戸黃門
第拾七編……四十七士
第拾八編……平田篤胤
第拾九編……櫻田門外
第貳拾編……七卿落
第廿壹編……彰義隊
第廿貳編……城山
第廿參編……平壤
第廿四編……威海衛

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

青年叢書

一冊定價拾貳錢　郵税貳錢

身高峰に起つ眼千里の觀なからんや。新勝は國運を急變し而して國勢の進轉は國民の資格と伴はざるべからず。國民の資格を高くするの道果して如何、連勝國は大陸大洋の主人たり、一大故郷を造るの道果して如何。癒ゆべからざる鎗創を頑清に加へ、新興國として世界の嫉妬と畏懼の中心に立てる大日本は武裝せるスパルタに非らずや。國運は新組織を要す。完美なる國民は完美なる個人也、樹を植て一家十年の計を爲す者一國百年の長計は人を造るに在るを忘るべけん乎、武育的國民にして高義的市民、時務を知り技術を有せる人、一代の人にして世界の人を造るは一等國の國是、今日の急務也、大なる日本人を造るは大なる日本國を形る唯一の道に非らずや。新人物は新事業を産み、新事業は新國運を開く。學窓の下、西天の一方を睥睨し雄心壯圖を控へし新國民たらんとする人よ『青年叢書』を讀め。（發行所　東京民友社）

◉第壹卷　武備教育
◉第二卷　遠征
◉第三卷　市民
◉第四卷　職業論
◉第五卷　技術
◉第六卷　學校
◉號外　征塵餘錄
◉號外　本朝美術

以下逐次發行

雨谷一葉庵著◎永井鳳仙挿畫（外に寫眞銅版○萬松山泉岳寺山門○仝寺内義士墳墓）

豫告

大石良雄

紙數凡三百餘頁

本月下旬發賣

年寒ふして松柏の操を知ると。余大石良雄に於てこれを見る。彼は平日に於て平凡の士たりしなり。否寧一個平凡の士たる而已に非ず。上君公より下彼が同寮諸士に至るまで。實に痴鈍を以て彼を見たりしなり。去れど國難俄になるの日に際して。彼は彼が本領を發揮せり。彼は忠誠なる一士として、勇偉なる傑物として、神算雄略ある巨人として起てり。彼は如何に復仇の大義を絶叫せしか。彼は如何に其方略を運らせしか。彼は如何に之を實行せしか。苦心經營其間實に二星霜。雪夜同志四十六士と共に吉良羽林翁を其邸に斫つて。身は潔く國法に死するに至れる大快活劇は。今見る如く著者が宛轉自在の彩筆に因つて描寫せらる。論評簡明事實周到精細。蓋し近代の好著なるを保す。

東京市京橋區日吉町四番地

發行所 民友社

明治三十年一月廿五日發行
家庭雑誌第九拾四號

目録

口絵
雞林踏破……久保田米仙

社説
老者を遇するの道……一

科學
海の世界(三)……三
燐光の事
餅の黴……五

貧人をば救ふべし

史談
モルトケ将軍の家庭……隈川 翁……七

文藝
雪の句

皇太后陛下の崩御を哭し奉る……一六
雲の上……桐廼舎女史……一六
神がくれ……中野 其村……一七

根岸十二ヶ月

談叢
名人奇話(其一)太田直次郎……三盛子……一八

群馬解題
和歌古今集……欲東 老人……一二

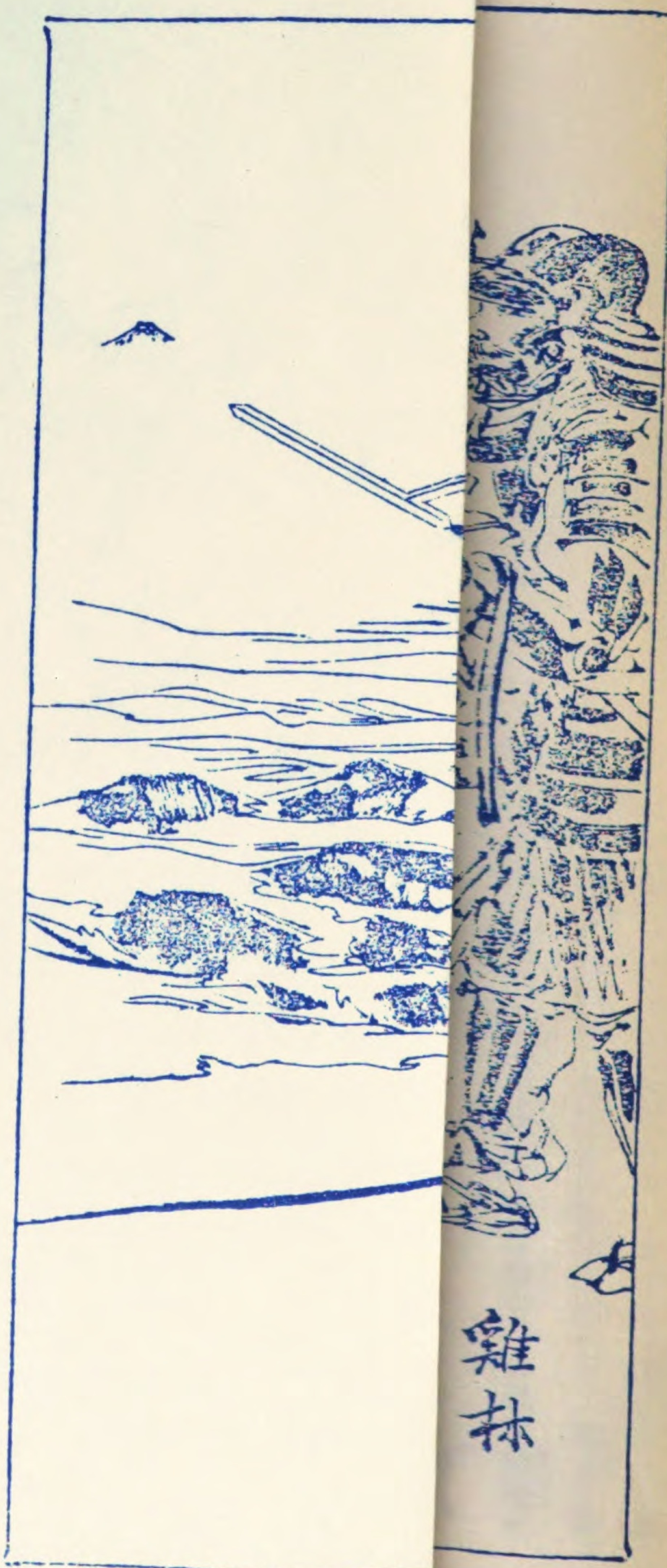
近著紹介
つり的……二四
間一髪……二四
日本女禮式……二四

家政
話のくさ〴〵……黄 花……二四
西洋小兒……二四
細君の心がけ……二七
けんちん、小鳥、堅餅……二七
庖厨雑俎(其一)……恕 哉……二八
(1)雞類肉を軟に煮る法……二九
(2)雞卵新舊の鑑定……二九
(3)松魚節の貯蓄……二九

社交一斑
流行三件……流 行 子……三〇
大島紬の下着……三〇
金下まきの櫛笄……三〇
平民的履物……三〇

雑録
小兒の世界……K M 生……三〇
獨逸の大将デルフリンゲル……三〇
健康は金銀よりも貴し……三一
理想的の四季生活……雨谷一栞庵……三三

春期大附録
金魚の達……二十三階堂……一
漁師の娘……蘆 花 生……一四
少女おなみ……金子 春夢……三三


雞林

消過し得べく設けられたるの日なし。

去れば往時に於て多く見たるが如く、未だ老衰するにも及ばずして所謂隱居なるものをなし、世務を嗣子に讓り、嗣子に奉養せられて、徒手優遊、以て春晝秋晝を度るは、決して人の人たる道にあらずと雖、花も一盛り也、人も一盛り也、心身いつまでも健全なるを得べきにあらず。

力山を拔き氣世を蓋ふの英雄も、世を經る年の數積れば、頭に千秋の雪を戴き、腰に梓の弓を張らざるを得

波は勳業の數を記し、屈める腰は重き職分を負ひにし紀念を留む。

斯る貴とき老人に對するもの、誰か、

わきて見む老木は花も哀れなり　西行
今いくたびか春に逢ふべき。

の感なきを得んや。十分に其心身を養ひ、其世に垂れたる勳に酬ひ、靜に安らけく其天年を終へしむべし。」

古人も心を養ひ身を養ふの說ありき。身を養ふことは勿論なれども、殊に老を養ふものは心を養ふを養ふと

（明治三十年一月廿五日發兌）

社説

老者を遇するの道

人の世に在るそれ〴〵に天職あり、一日として無益に消過し得べく設けられたるの日なし。

去れば往時に於て多く見たるが如く、未だ老衰するにも及ばずして所謂隠居なるものをなし、世務を嗣子に譲り、嗣子に奉養せられて、徒手優遊、以て春晝秋晝を度るは、決して人の人たる道にあらずと雖、花も一盛り也、人も一盛り也、心身いつまでも健全なるを得べきにあらず。

力山を抜き氣世を蓋ふの英雄も、世を經る年の數積れば、頭に千秋の雪を戴き、腰に梓の弓を張らざるを得ず。世の爲め人の爲め何の勳もなくして徒に長生するは耻づべからざるにあらずと雖、子として孝に、父として慈に、夫として情けあり、妻として操正しく、國民の義務を缺かず、世間に不義理をなさず、町人は町人の道を守り、農夫は農夫の業を勤め、正直に勤勉に人間一人前の職分を盡し、以て五十年七十年を過ぎ、身老ひ力衰ふるに至りたるもの、如き、額に疊める年波は勳業の數を記し、屈める腰は重き職分を負ひにし紀念を留む。

斯る貴とき老人に對するもの、誰か、

　わきて見む老木は花も哀れなり　西行
　今いくたびか春に逢ふべき。

の感なきを得んや。十分に其心身を養ひ、其世に垂れたる勳に酬ひ、靜に安らけく其天年を終へしむべし。」

古人も心を養ひ身を養ふの説ありき。身を養ふことは勿論なれども、既に老を養ふものは心を養ふを養ふと

なす。言換れば老者を遇するの道は安心せしむるに在る也。

彼等は過去に於ては已に足る、唯將來に於て兒孫の命運を氣遣ふのみ。人の兒孫たるもの先づ身を立つるより孝なるはなく、一人前の人間として世にも人にも耻る所なきを知らさしむるより老者をして安心せしむるはなし。男女の愛にも猶往々に交換的意義を含む、全たき無慾の愛は父母の愛ぞかし。

子を思ふ親の心の四つ手かご
しばしも休む息杖ぞなき。

是の故に老者を遇するの道は、其大なるものを擧ぐれば、兒孫たるもの自ら身を立て丶、父母をして兒孫をこれ憂ふるに及ばざらしむるを第一とすと雖、老者を敬ひ安んずる所以は、單りこれのみを以て足れりとすべきにあらず。日常起居の間にも常に其心身の平安と愉樂を保たしむるを須要とす。

諺にも年寄小供といふ、人老て心身衰ふれば次第に小供の如くなるが常也。瑣細の事にも悦び、瑣細の事にも悲む。常住家に在りて老者を安慰すべき主婦は、一方に子を育するが爲めに育兒術を知らざるべからざると共に、一方には一種の小供となりつ丶ある老者を安慰するが爲めに、亦養老法を講ぜざるべからず。

父子の際、同居すると別居するとを問はず、育兒が人生の一義務なるが如く、養老も同じく人生の一義務ならずんばあらず。

年老ひ力衰へては、其身の前途に希望なく、從て其愉快の版圖も極めて狹小にして、飲食の如き單純なるもの其快樂の一なれば、衰老したる躰臑口舌に適すべき甘暖のものを擇び、時々珍らしきもの初物等の滋養ありて消化し易きを進むる如き、又は其低き躰温を補ひて寒からぬやうに輕暖なる衣を進め、其居室として極めて靜かに日當りよく眺めよき部屋を擇ぶが如き、或

は其最も愛好し得意とする昔語りなさしめ、或は爲に平易和樂なる喜的物語を讀み聽かせ、或は花卉盆栽に老眼を喜ばしめ、或は滞輪緩歩に輕ろき運動をなさしむる如き、之を安慰する所以は固より一ならざるべしと雖、要は靜安なる起居と温和なる變化とを以て其老軀を愉樂保全するに在るのみ。

若し其の貴とき人生の職分を盡さんが爲めに曾て矢丸を冒して恐れざりし昔を想ひ、紅顔綠髮蝶の如くに舞ひ鳥の如くに踊り、飛び去り飛び來て翩々たりし昔を想ひ、而して其今幾度の春に逢ふべきやを思はゞ、彼等が老顔の一笑は子女の情として千金萬金よりも得難きぞかし。

榮へよと我子を思ふ今の身の
わかれし親のむかしをぞ知る。

縦令別れし親の昔を知ると雖、此時に至らば最早詮なかるべきを思はざるべからず。

科學

海の世界（三）

燐光の事

太陽既に水平線下に沒すれば星の如き無數の光る物、水面に現はれ波浪に動搖す。恰も日中太陽より受けたる光を夜に入りて天に返却せんと欲するものゝ如し。されど此不思議なる光は或物躰ありて燃えて而て輝に非ず。忽ち此處に忽ち彼處に火花の如くに明滅、離合、集散す。

海上靜穩なる時は其水面に星光雲の如くに群れるを見る。彼等は今靜かにして動かずと見れば、忽ち動搖して矢を放つが如く、忽ち炎の閃めくが如し。而して此光炎の中に在りて互に相驅逐す。忽ち一つに集合するかと見れば忽ち離散す。而て遂に燐光一面に海づらを

敷き忽ち靑く忽ち白く、靜かに輝くかと見れば波の如くに動く。此處彼處には周圍の燐光に比して一きは輝く處の圓塊あり、海の太陽ともいふべし。

若し颪起り波たつ時は水は恰も溶金より發する火花の如し。打つて濱に碎くる時は光の條を以て陸に縁どる。

燐火の海を游泳する海豚の群を見るより美しきものはあらじ。彼等跳躍する毎に星光を其周圍に放つ。其他舟子の船を漕ぐ時、楫の周圍より光を發する事は人々の能く知る處ぞかし。これ實に博物學者の面白き考究問題、詩人の好詩題なるかな。

燐を含むことの多少に由りて、或海水は金を溶したるが如く思はれ、或海水はたゞ海水一面に白きを見ることあり。和蘭水夫の所謂ゆる牛乳の海又は雪の海など唱ふるものは後の種類を指して曰ふなり。

此燐光を發する小動物の大さは毛髪程もあらず、三百匹を合せたる長さ僅かに一吋(八分三厘)計なりとぞ。」

千八百五十四年。キャピテンキングマンのベンガル灣に航せし時、此小動物を以て三十哩を充たされし白色の海水を通過せり。又た千八百六十年八月二十日の夜佛國巡洋艦『ラ、カプリシュス』の艦長トレブチー氏アムボイン水道を通過する際、右と同樣の光景を見たりといふ。

『ノクティルカ、ミリアリス』といふが此小動物の名なり。或博物學者はこれを動物の中に數へずして植物界の物とせり。兎も角も其大さ非常に小にして葡萄酒盃中に五萬を游泳せしめ得る程なり。



此の小動物『ノクティルカ』は一見したる處にては透明なる小球に過ず。さ

れど此を顯微鏡の下に置く時は上圖の如き、一種奇妙なる形狀を現はす。小さき林檎を見るが如し。されど海中にてかゝる燐光を發するものは決して此小動物のみにあらずと知るべし。

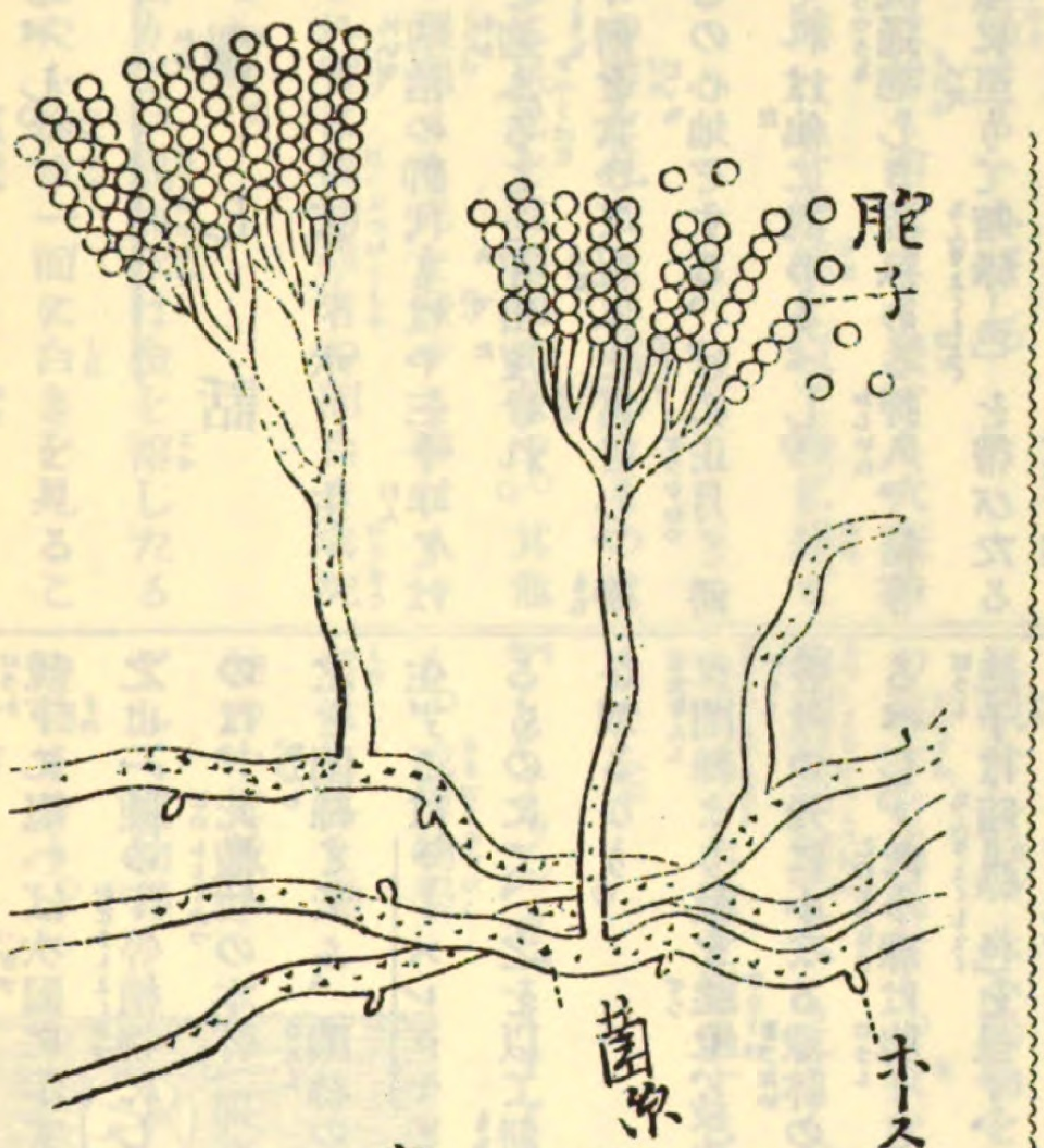
餅の黴し話

天水生

歲月の駒の步は逸早く、明治の御代もはや三十年とはなり、玆に樂しき正月を迎ふることそ芽出度けれ。芽出度き正月には、人々餅を食ひて祝ふを常とし、餅食はざれば年を取らざるの心地ぞする、げに正月と餅と如何なる因緣にや、それは他に說わるべし。食ひ殘りの餅を空氣の流通惡しき濕氣ある押入、箱等の中に蓄へ置けば、此頃に至りて暗綠色を帶びたる白き粉の如きものゝ生ずるを見るべし。これ即ち黴なり。

餅の黴は乾柿の白粉の如く內部よりふき出でしものにやと云ふに、さにはあらずして、外部より附着せしものなり。さらば黴とは如何なるものなりや。之を顯微鏡下に窺へば次圖に示す如きものを見るべし。之は一種の下等植物にして、其細き紐の如く見ゆるものは、此植物の本體、即ち莖とも云ふべき部分にして、之を菌絲と云ふ、菌絲の所々に小なる瘤の如きものを生ずるはホースレクヤと云ひて、此植物の根に相當するものにて、之を以て餅に附着し、餅より滋養分を吸ひ取るなり。又菌絲より枝を生じ、枝の先端は更に數個に分枝して、各枝の先に小なる球躰の念珠の如くに連結し居るを見るべし。此小球は胞子と云ひて、此植物の種子なり。」胞子は暗綠色を呈す、黴の暗綠色を帶ぶるは之が爲めなり。胞子熟すれば一ッ宛離れ落ちて飛散す。此黴は如何にして餅の上に生ずるに至りしやと云ふ

に、其胞子は常に塵埃中に混じて空中に飛散し居るが故に、何時しか餅の上に附着し、空氣の流通悪しくして濕氣あれば、直ちに發芽して蕃殖し、直に餅一面に廣がるなり。」此黴の學名を Penicillium glaucum(ペンソシリウム、グラウクム)と云ふ。黴の種類は甚多く、種々の腐敗物の上に生じ、又五月雨の頃衣服、古靴等の上に生ずるを見るべし。其色にも赤、緑、青、黒、黄等種々あり。



餅の黴

數百倍大部圖　(天水生實寫圖)

又黴類は屢々高等植物の上に生じ、果樹、盆栽等に大害を與ふる事あり。葡萄、林檎、梨子、桑、稻等に大害を與ふる病源は昆蟲類なるとあるも、又黴類の寄生に原因するとも多しとす。佛米等の諸國にては、毎年政府より巨額の費用を支出して、之が原因撲滅法豫防法等を研究せしめ居れども、未だ全く其害を免るゝ能はずと云ふ。稻の「イモチ」病、萎縮病、等は、黴類の寄生に原因するものなり。此餅の黴は普通なる黴の一種にして、唯に餅のみならず、他物へも寄生す。而して又餅には他種類の黴を生ずるとあり。

凡て黴類の如く、他の生物又は有機物の上に寄生して生活する下等植物を菌類と云ふ。

蕈類は高等なる菌類なり。

貧人をば救ふべし

世の中に同じく人とむまれてうゑこごゆる人亦多し、其不幸あはれむべし。我身餘財あらば、かゝる貧人に施しすくひて、みづから樂み、人を樂ましむべし。人間世の樂は、みづから善を樂み、人をすくひて善をするに越たる樂しみはなし、おごりて益なき事に財を多く費すは、浮氣のなすわざ、甚だおしむべし。よく思ひて樂みにはあらざる事をしるべし。富める人の、おごりて、一日一事についやせる財を用ひなば、千萬人の飢を助くるにも、なほ、餘あるべし。然れば、百人のうゑを救ふは、財おほくつひやさずして、すくひやすくて、其益大なり。こゝを以て大富人ならざれども、仁心だにあらば、眼前に、人のうゑこごゑぬるを助くるほどのめぐみは行ひやすかるべし。況んや、富貴厚祿の人は、多くの人の飢をたすくる事、いとやすき事になん侍る、たゞ、志のなきをはぢて財の足らざるに言をよすべからず(貝原益軒)

史談

モルトケ将軍の家庭

礫川翁

今日の獨逸國は歐洲の中央にありて重きをなし一大强國の上に數へらるゝと雖も其玆に至りたるは僅に三四

十年以來のとにして特に現時の盛大を想ふものは十六年以前に始めて現時の獨乙帝國なるもの丶起れるを追懐せずばあらず此の即位式が佛國と戰ひ連戰連勝の陣中に擧行せられたるを回想する者は復た此の連戰連勝の神籌を帷幕の裡に運らしたる將軍モルトケを聯想せずむばあらざるなり

此の人にして始めて此の事ありといふべきのモルトケ將軍の家庭の生活は實に單純高潔熱情其裡に溢れ和樂諧々たるものにして誠に世の人の模範ともなりぬべし乞ふ吾人をして其の一節を語らしめよ



モルトケ將軍の未だ娶らざるや身自らは常に天涯萬里の異域に客たりしを以て撰妻の甚だ困難なるを知りたりけむ當時其末妹アウグステーに寄せたる書中に曰く「結婚は猶ほ富鬮の如し誰も如何なる鬮を引くやを知らず故に予若し結婚するともあらば汝が自ら手を下して敎育せしものを娶らむと欲す」と不思議や此の希望は遂に成りぬ

此の末妹アウグステーは廿六歲にして富豪なる貴族ジョン、ハイサングルブルトに嫁せり(千八百卅四年)ブルトは結婚の後シレス井ヒに又はホルスタインの一少都イチェホエに住しぬ元

と此のブルトは再緣にして先妻は二人の小女を遺して早逝せり其の幼をマリイと稱し千八百廿六年四月五日を以て生れぬアウグステーが繼母となりしは渠が漸く八歳の時なりしが裍育懇切にして慈愛至らざるなく眞の母も如何でか及ぶべくもやあらざりけむマリーは嘗て繼母に對する感謝の意を述べて「母を早く亡ふは極めて酷なる天運なり、されども我々の如くに代りを得る者は之を悲告するの要なし」と云へり以て繼母アウグステーが愛育の程を察するに足らむ

マリーの嬋妍たる天資は自ら備はり黄金色の髮は房々として垂れ眼は藍色を帶びて活動し宛も其性質の快活なるを顯はせり渠は早くよりして寧ろ男兒に似合しき無頓着の氣質を有し決斷力に富みしがされども亦た其心情の優美なる世の常にあらざりき、之を以て其奇才頓智は常に人を驚かし且つ悦ばしめしと雖も亦た時に憂慮せしむるを免れざりき渠はわる時病氣全快の悦にとて驢馬を貰ひたることありしが以來は何よりも此の驢馬を愛で好み渠が赤き敷物を其上に置き黄金色の髮を顏にふり亂して此の驢馬に乘れる樣はさながら人をして天使の降り來れるにはあらずやと疑はしむる計りなりき一日マリーは驢馬に跨りて出でしまゝ夜に至るも歸り來らず大に家人を心配せしめしとありしが是ぞ渠が無頓着なる遠く距りたる祖母を訪ひ不意打して驚かしめむと遠乘を試みたるが爲にてありき

當時モルトケ將軍はトコル地方に滯在したりしが又屢ゝ書をマリーの母即ち其妹に寄せたり土地風俗人情を異にせる異域よりの音信なれば記する所一として奇異ならざるはなく寧ろ小説にやあらむと思はしむる計りなりしがマリーは何時も此の通信を待兼て讀む事を此上なき樂しみとし又或時は將軍の父モルトケが旅行の途次イチエホエに立寄りて鼻高くして其勇悍なる子の事を語る時は悅び勇みて之を聞きぬ

こゝに千八百四十一年のことなりき一日將軍は自ら其妹を訪ひ來りぬ時に渠のいでたちは質朴簡粗なれども身躰魁偉凛々たる威風は自ら備り又久しく熱き異邦の日に洒れたるとて顏は焦げて褐色を帶びたれども眼光烱々として人を射るが如く其齡は既に靑壯を越へたり此時渠の此處に來れるは恰も一種の天職を以てせるに似て其心情の熱と偉大なる精神の光に逢ふて妙齡の小女が裡に眠れる蕾は忽ち光を迎て開かざるを得ざりきマリーは世に稀なる此の偉丈夫が久しく荒冷に堪へざりし心情を温むるを得るの幸福を知や其内心も亦た何となく愕きさわぎ憂ふるが如く悅ぶが如く未だ曾て知らざりし變動をなし恰も蔦草が大木を纏ふて攀ち上る如く依り賴みしが又よく此の大木を飾に幾千百年の美花を以てし得るを知り玆に始めて濃厚篤實なる愛情生れ此の愛は始末毫も變ずるとなき唯一の愛とはなりき

此の時マリーは妙齒尙ほ漸く十六歲を越へざりしを以て果して其愛する者を幸福ならしむるを得るや否やの疑問を制するを得ざりき渠が自らなせる可憐の告白あり「妾は尙ほ年若く從て經驗に富まざれば御身の妻となるも萬事を滿足ならしむるを得るや否やを思ひ憂慮に堪へざれば很戾執拗なるとなく過あれば常に御身に順從ならんとを勉めむ妾は未だ敏活なるを得ず又社交の天性なし故に御身の指導を待つもの多しされば御身も忍堪して妾の爲すらむ失敗を敎へよ又妾は怠らずしてよく語學の練習をつとめ御身と共に訪問をなし得るに至らしむめんと渠は其後も交際塲裡の習慣容儀を悉く習ひ得たりといふにあらず且つ其の虛禮空式を嫌惡したりと雖も其天性の温雅優美なるよく足らざるを補ふて餘りあるを得せしめたりき

マリーの心情の温厚篤實なる年尙ほ若しと雖も能く其熱誠の愛によりて許嫁の夫の憂苦を慰むるをも得たり

「御身は何故に憂鬱に沈むか又憂鬱に沈むもよきやを妾に告げよ——吾等兩人は互の愛によりて優美にして幸福なる平和にして神意に適ふ生活を送り能はざるか如し幸福なる能はざれば是れ妾の罪なり故に神は妾をして吾等の家庭に於て御身をして幸福なるを得せしめ給はんことを神に祈らむ妾は妻たる者の最大なる幸福は其夫が家庭の幸福を眞に有するを確知するにあるを知れり實に御身の功勞は御身をして總ての男子よりも幸福ならしむべき報酬をうくべきものなり故に妾は神が妾を召して御身の妻たらしむるに付ては如何に高く聖き義務を妾に負はしめ玉ふかを告白せむ」と

渠等は千八百四十二年四月廿日をトしイチェホエの「ラウレンチイ」教會に於て結婚の式を擧げモルトクの兄弟姉妹は將軍の願によりて此日皆遠近より來り式に列せり時にモルトクは四十三歳にしてマリーは十七歳なりき祝式全く終りて後新婚者は相携へて伯林に至り茲に初めて家庭をつくりぬ

新婚後の幸福なる數年は夢の如く過ぎて千八百四十五年の秋となりければモルトクはハイレリヒ親王の侍從となりローマに赴くことはなりけりマリーも亦たこゝに同行し名にし負ふイタリーの風景を賞し又は古人の研究する所をば興味と理解とを以て共にし又時に故山を想ふの情切に起らざるにあらざるもかゝる時には其が天性の快活なる諧謔によりて之に勝つを知りき然るに不幸にも翌年七月十二日に親王はローマに永逝し玉ひければモルトケは屍に侍して獨乙に歸ることとなりマリーはこゝに始めて然も萬里の異邦孤客となりて空閨を守ることゝはなりぬ幸にして既に年長けたる從姉のあるありて孤情を慰めしと雖も山海萬里の波濤をしのぎ嶮峻を越へ行くの古人を想ひ其危難に遭ふことなきやを憂慮し日夜安き心もなかりしが其の上モルトクが嘗てマリーの涙もろきを見て「十分の理由なきに泣く者

には神亦悲哀の種を與へ玉はむ」といひけるとありしを思ひ出でゝはかさね〲て平和を破りぬ「妾は此の言葉をよく味ひ心に留たりしが今御身が常よりも多く危嶮に臨めるを知るの外何事も御身に就て知らざるの時妾は此の言葉を想ひ起して止まず」と後モルトケがジブラルタルより送りし書信の達するに至りて始めて安堵の思をなしぬ

同年の冬モルトケは再びローマに赴き其妻を迎へ歸りぬ其後はコブレンツ、マグデーブルグ等に轉住し或は普國のフリードリヒ、ウヰルヘルム親王に從ひ英、佛、露等を巡歷したる此の巡歷の間マリーは復も淋しく孤閨を守りしが千八百五十七年に至りモルトケが參謀本部總督に任せられてより以來はベルリンに永住することとはなりぬ地をかへ職を轉ずると每々起りしと雖もマリーの實務に長し勤勉にして義務心に富むのみならず何事にても爲さでは止まざるの健長さは何時も渠等の生活をして愉快ならしめき渠は唯々家內房厨の事を處理せしのみならず軍馬等萬端によく注意し經濟上の整理に至りても外務に忙殺せらるゝ將軍をして毫も內顧の憂なからしめたりき渠は又幼少より既に騎馬を好みしが時に威氣堂々たる將軍と騎を並べベルリンの街道若くは動物園などを馳するに當りては其嬋姸たる風采は常に衆人の感嘆する所となれり

渠の氣字は剛毅快活にして婦人の通性なる狹量柔懦なる如き弱點を毫も見るとなかりきさればモルトケも亦た渠の憂欝に沈み或は恨戾し或は癇癖を起すなどのとを見たると甚だ稀なりといへり其の事を爲すや毅然として之に從ひ自ら負ふ所は必ず如何なる困難あるも貫行して止まざるを期せり渠も亦人生の快樂を好まざりしにあらずと雖も其快樂の價値を定むるには常に良人の幸福を標準とせり渠の死せし時將軍は云へり「渠は實に稀有なる幸福の生活を送れり」と然れども若し此

の幸福なる生活に毫も缺乏する所なかりしやと問ふに恐らくば欠くる所唯〻一ありしならむされども此の事に付ては渠既に自ら安むずる所ありき渠がある人に寄せたる書中に曰く「神が妾に子なからしめ玉ふは妾をして全く此の世にのみ心を置かざるの御心に出てたるなり此の如く神は各人に何事か少しは缺乏する所あらしめ以て此の世にて余り幸福に過ぎざらしめんと計り玉ふこれ此の求めて得ざる所によりて浮世の不完全なるを知らしめ玉はむとの深き御心なり」と

子なき代りには相愛は彌〻濃厚となり兩者天性の異同相好適して更に幸福を増進せりマリーの性質は極めて快活陽氣にして頓智滑稽に富めり故にマリーの來る所には處として歎聲の洩れざるなく渠來れば復た面白きとあらむとは常に人の待ち望みし所なりき又渠の氣早やなる時には無鐵砲に奔するとなしとせず渠も亦たよく已を知れり故にある時云へり「若し妾にして寛忍にして氣早の所爲を見ては之を面白がる良人に嫁せざりしならば妾は甚だ不幸の生涯を送りしならむ妾は何か工夫の生ずるあれば又た直ちに云はでは安心するを得ず」と將軍も亦た時〻「マリーよ汝の無鐵砲を愼めよ」と云へり

モルトケ將軍は胸中偉大の志を養ひ時には沈默して遠謀を運し熟慮しては知らず〱其躰を前に屈するを常とせりマリーの之を見るや忽ち走り來りて其肩をたゝき「まつ直くにせよ丈夫」と呼ふを例とせり然れども亦此の戲が將軍の不機嫌を引き起すを恐るゝもの〻如く云ひ終りては忽ち飛で室の一隅にかくれ故意に冷淡を裝ふて語をつぎ之を知らざる振して「御身の近眼なるも無理からじ」などと云へり

モルトケ將軍の其妻を指導する効果も亦た見へて渠は天晴なる軍人の賢夫人となり愛國の熱情は滿腔に漲り普國と其王の天職を明かに識認するに至れり是に於て

將軍が普國の陸軍を整理擴張するの事業をも同情と理解を以て傍觀するを得たり

千八百四十年の國亂は渠を感動する極めて深かりき同五十年に出師準備の命下りし時の如きは陸軍部內人員に缺乏を告ぐるに至りたるを以て良人を助けて書記の事務を握掌したることもありき今も尙ほ其手跡は多くの記錄中に存せり千八百六十四年及び六十六年の戰勝に會しては渠も亦た奮起歡躍せざるを得ざりしが千八百六十六年七月十二日に手記する所に曰く「此の如き凱戰は戰史に未だ曾て見ざる所なりヘルムート（將軍の名）は其模範的の參謀によりて不磨の功績を立て軍隊は能く此の謀を實行せり特に吾等を保護せし神は讚むべき哉願くは彼は尙ほも吾等を導て勝利と平和を得せしめ玉へ」と

然れども彼は普佛の大戰爭と將軍の赫々たる功績を見るを得ざりしはいといたましきことなり實に渠は結婚後廿六年即ち千八百六十八年基督降誕祭の夜熱を患へて永眠しぬ渠が曾て母を吊ふて「此の如き完全にして潔白なる人間は唯々暫時地上にあるを得るに似たり何となせば此の如き人間は天に屬する者にして唯に暫し模範たらむが爲めに此の世に置かる」と云ひしは又渠を吊ふるの語となるに至れり渠の病革まるや神の祝福其良人の上にあらむことを祈り又王のために祈り而して後ち靜かに眠りぬ

王と王妃とは此の凶報を得玉ふや直に悲しみ傷める者を慰藉せむとて相伴ふて將軍を訪ひ玉ひぬ王の同情の如何に深かりしやは手書し玉ひし所によりても知るを得べし

只今予は如何にいたましき重き不幸が貴下を襲ひしやを知れり地上には何事も完全ならぬなり

彼（女）の名は歷史上滅ぜざるべし何故に此の功績あるにも關らず美はしき家庭の幸福は破斷せられざる

べからざりしか是れ亦た神の道は吾等の道と異なるの證ならめ神は貴下の故ある悲哀を慰め玉はむ

千八百六十八年十二月廿五日午後十一時

貴下の親愛なる感謝に滿てる王

ウォルヘルム

既に家庭の主婦を失ふ最早語る所なきが如し然れども眞の愛に幽明相隔るの故を以て亡ぶる者にあらず將軍の潔白にして眞實濃厚なる愛は尙ほ滅せざりき故に吾人は尙ほ夫人が沒後の一節を語らむ。嘗てモルトケ將軍はマリーの死せさる前伯林より遠からざるクライサウに地を求めて別莊を起しぬ此の別莊は渠が閑暇の日を得ては常に行くを好み普佛の破裂も此の別業にて報告を受け悠々逼らず賓客をもてなして後靜かに伯林に歸り行きし地なるが此の地に其愛せる妻と滯在せしは僅かに一夜のことなりきマリーの死後渠は此の別業の小高き丘の風色極てよき處を自らトし又自ら圖案を下して小教堂を營み其裡にマリーの屍を葬りぬ將軍が此の別莊に在るの間は毎朝起くれば必ず先づ此の堂に詣で又た毎年春期に當り別莊に來る時には未だ家に入らざるの前必ず先づ此の寂寞なる堂に入り帽を脫して石棺に近づき右手を其頭の眠れる處に置きて祈念を久ふし又た其の途すがら自ら草花をちぎり結むで花束となせるを携へ來りて棺上に置き以て其が愛の標を贈るを例となしぬ渠が此の堂を出づる時には必ず氣色閉ぢ憂欝其面に表はれ烱々たる双眼も內心の感動を洩らす大なるものありきとぞ後廿三年を經て將軍の朽つべき屍も亦其傍に置れて別れなき處に渠等は一となりぬ

雪の句

いさゝらば雪見に轉ぶ處まで　芭蕉

我ものと思へば輕し傘の雪　其角

門の雪うすき盥の姿かな　嵐雪

雪の松折口見れば猶寒し　杉風

からかさの幾つ過行く雪の暮　北枝
初雪や枯木の上に手鞠ほど　曲翠
初雪やまづ草履にて隣まで　路通
雪の朝二の字〱の下駄の跡　捨女
雪どけや都へ出でし下駄の跡　沾徳
初雪や涙のさゝかぬ岩の上　淡々
初雪や人の機嫌は朝の内　桃隣
雪は北雨は南に冬至梅　乙州

文藝

皇太后陛下の崩御を哭し奉る

皇太后陛下には本月初旬より御不例に渡らせられしに、藥石其効なく十一日午後六時、遂に寶算六十有五にて崩御あらせられぬ、吾人臣民哀悼何ぞ堪ん

陛下御諱は夙子、故從一位九條尚忠公の第六御息女、天保四癸巳十二月十四日(陽曆一月廿三日)御誕生、嘉永元年十二月十五日御齡十六にて入内、同六年五月二十日准后宣下、慶應四年三月十八日皇太后宣下、明治三十年一月十一日崩御あらせられぬ

陛下御美德の御逸事擧て數ふべからず、幷は他日に讓り、吾人は次の二文を掲げて玆に哀悼の情を表するのみ

雲の上

桐廼舎女史

九重の雲の上よりいともかしこき御事のもるゝや、天津日の御光りもあふく事なく雨さへ雪さへ降りしきりて、心なき草木もひたとうち志ほれたるに、十三日の夜より雪ふりまさりてあくる四日は、軒端もたはむはかりましろにつもりたるに、黒き御旗の殊更に眼にも心にもふかうとゞまりて、せはき袖のみぬれまさりぬ、いまはと葎の宿さしかためて籠らひ居るに、親しき友

とちもおなしこゝろにや、絶て音つるゝ人もなきに都の内にすめりとも思ほえす、淋しさいやまさるは心よりとこそ知らるれ、たまく文もてとはるゝを披き見れは雲井はるけき御事を、薄墨にしるしまつりあるは大御心をしのひまつりて、なけきあへるそかしこき限りなめりとつゝしみて

わふくさへかしこかりけり雲の上も
猶かりの世のおましなりきと

神がくれ

中野其村

新玉の明治三十といふ年は明けて、萬民君が世の千代を壽ほぎ、歡呼まことに聲高く、かしこに唱へ此處に和し、喜ひば去年の今日の如くなりしを、あゝ思ひきや、思はじや、大宮の御所、御不例殊の外にわたらせたまふと、つたへ承はるにたゞ何となく胸うちさわぎ、日もすがらたゞ恐れみかしこみ、御平癒の御ことをなん、ひとへに偏へに念じまいらせ、心底これを天地に祈る、

唯さへも寒き夜を神見とりませ

さるを悲しきかな、神がれぬたまひぬと、我等それ今にして何とかいふべき、

曉や萬民の涙みなこほる

やがて民皆のふかく愼しみ、滿都沈みがちに見えつるなん、げにさあるべきことゝもなり、

爽に籠る都大路の風さむし

ことに其當夜、雪のしきり雨のふりたるなん、天も爲に感ぜしにや、これさへもいとゞ涙の種なる、

其夕滿都寂として雪のふる

時のいとゞ多かるを、今しもこれ一月のなかば、先帝の御契、かくもかくも、深くわたらせたまふよと、推し量りまいらすもげにかしこし、

一月や今年先帝の三十年

さるにても、全國の蒼生、こゝにまたこの神まつるべき日をぞましつる、

哭せんか記せんか睦月十二日

根岸十二ヶ月　　野　其　村

一月　鶯よ名所の聲は何と啼く
二月　ぶら〳〵と行けば菜の花はや見ゆる
三月　山櫻杉のやみよりもれにけり
四月　我が庵は滊車の夜嵐時鳥
五月　古澤や屋居の中に鳴く水雞
六月　妻よりも妾の多し夕すゞみ
七月　朝顔の入谷豆腐の根ぎしかな
八月　ありく程の庭は持けり今日の月
九月　菊の垣犬くゞりだけ折れにけり
十月　名物の蚊の長生きや神無月
十一月　吳竹の名に音たてゝ霰かな
十二月　掛乞に根岸の道を教へけり

談叢

名人奇話

其一　　三麿子

文政の頃、幕府の士人に、太田直次郎といふ人あり。名は覃、南畝と號す。即ち世に傳ふ蜀山人なり。博學多材、文に通し、詩に達し、尤も滑稽の狂歌をよくす。詞易にして意深く、諧謔縱横、人をあざけり世を罵る、又これ一個の奇人なり。家に一人の老僕あり、其名を逸助といひしと聞く、性甚だおろかしく、然かも誠に正直なり。されば蜀山人、殊の外にも彼れを愛し、何處に行くも常に彼れを從へたり。斯くて數年の後、暇を與へて家を出す時に當り、蜀山人若干の金を彼れに惠ぐみ、汝これを以て相應のことを企て、自活の道

を求むべし、それ人たるもの丶何時までも、奴となりて果てなんは、敢てよろしきことにあらず、勉めて汝忘るなかれと、懇々これを諭して去らしむ。逸助は實におろかしき心にも、主人の恩のいと嬉しく、懐金あつく禮して去る。去るや直ちに、あるさゝやかなる商を營み、一二ヶ月は送りたりしが、性來の愚鈍、忽ち失敗して、盡く其金を失なひ、茫然又蜀山人の許に來りて哀を乞ふ。蜀山人また若干の金を與へて去らしむ。時しもあれ、恰かも七月の初にして、頓て于蘭盆に近き頃なり。さればこの、于蘭盆を當て込みて、必らず一儲けなさんづものと、愚鈍ながらにも工夫を廻らし、即ち其金の凡てを以て、紙或は竹なんど、その材とすべき品を求め、數多く燈籠を作りて、市にもちゆき、路傍にかざりてこれをひさぐ。されども、不器用なる彼れが手細工、不格好殆んど形をなさゞるもの丶、いかでかいかでか、人の心にかなふべき。されば數日の久しきにわたりて、唯一つさへも買ふ人なし。逸助の心さらに心ならず、八方擔きあるひて、戸毎にこれを買はんを求め、終に又、蜀山人の家に到り、其賣れざるの狀を語り、ことごとくこれを買ひ給はれと訴へ請ふ。蜀山人、聲をあげて笑ひ答ふ、汝逸助、物の理を考へ見よ、盆燈龍の如きもの、しかく數多く買ふて何せん、然かも亦、その如き粗末なるもの、我れ亦一つといへどもほしくなし、よろしく他について賣りつくせと。逸助、これを聞きて答へいふ、否とよ主公、八方の家、更にこれを買はんとさへいふものなし、それに又、盆の日もやがて今日明日なり、さるを今にして賣れずんば、これも亦ことごとく損毛なり、如何にか主公、こを賣りつくさんの手段なきにや、願はくは敎へたまはれかしと。泣き出さん許なるに、然ればなりとて、蜀山人、しばし諸手を組んで考がへ、よしよしよし、それには我れ一つの工夫ありとて、逸助をして墨を磨ら

せ、一燈ごとに狂歌一首、腕を揮ふて疾くかきつく。いづれもいづれも、口より出るまゝ、狂を盡し、妙を極め、いづれか愚かなるもの、一つあるべき。盡く題し終りて、逸助にむかひ、汝疾く〳〵こを持ちゆきて試みよ、必ずや賣れざることなし、然かも價高く賣れざることなし、いそぎ行けよと命ぜらるゝまゝ行きてひさぐ。果せるかな、果せるかな、賣れたるもこれ道理なり、名にしあふ、當代の大名人、蜀山人が手筆の狂歌、粗末極まる盃燈籠、實に題詠のため忽ち名高く、甲語り乙傳たへ、我れ後れじと競ふて求め、果ては原價の二倍三倍、逸助は思の外に利を得たり。今の世につたへいふ、蜀山人が盃燈籠とは、即ちこれをこれいふなり。かゝりければ逸助は、又哀を請ひ來ること、あらざるべしと思ひしに、或日晝過の頃又來れり。蜀山人はこれを見て、汝又損をして來りしか、如何なればしか損するぞ、我れに損毛の傳を語れと笑ひながらこれに語る。否々、我れ此度は損して來らず、我が家の壁、ところどころ落ちて醜くし、反古を得てこれを張らんと欲し、今は唯それがために來りたり、何にてもよし、書捨てられし反古紙のあるを少々たまへといふ。さにてありしか、そは誠やすきことよと、折しも机の上に堆くありしもの、ことごとくこれを取て與ふ、逸助いそき持返り、やがて壁を張らんとせし時、蜀山人の狂歌の弟子にて逸助をよく知れる者、偶然入り來りこれを見て、汝そは何ぞやとたづねしに、主公たまひたる反古なりと、答ふをきゝつゝ、取りて見れば、皆これ詩歌文章の、各々奇思を極めたる、日頃多く見ざるものどもなり。その人大ひに打驚ろき、これにて壁を張らんなどゝは、勿躰なきことの限りなり、或は先生の取ちがひたまひたるや、知るべからず、又行きて問たゞし見よといふ。逸助も亦等しく驚き、直ちにそを携へていそぎ行き、一々にこれを問ひたゞす。蜀

山人、これに答へていふ、敢て間違へて與へしならず、さればこれ亦汝が得たる幸ひなり、持ち行きてそを欲するがまゝにせよといふ。逸助即ち又持かへり、即ちこれを壁に張る、かの人又來りてこれを見て、大ひに惜めども今は詮なし、唯何枚にてもよし、殘れるがあれば余に與へよ、重き價を得させんと、皆これを買ふて去る。他の門人のこれをきゝ又馳せ來り、又馳せ來り、我も我もと各々競ひ、其壁に張りたるものを、ことごとく剝き取りて金に代へ、殘らず持去りかへりたり。されば此時に於ても亦、逸助思はざる多くの金を得、先きに得たるものと共にあはせて、立派なる商を初めしと、傳ふれどさて末は如何にや、詳しく傳へざれば知るに由なし。實にこれ、奇人と奇人、此主にして此僕ありともいふべきかな。

群書解題

和歌古今集

欲東老人

先きに、土佐日記を解題せし時、少しくこれを言へりと思へり。王朝の名臣、御書所の預、紀貫之。彼れは實に六面八臂、漢文に通じ、和文に達し、詩をよくし、歌に妙に、又筆蹟にたくみなり。其他政治の上に於ても、如何に充分の伎倆ありしか、そは土佐の守となりて彼所に趣き、邊陲南海の遠きところ、王化いまだ洽ねからざる國を治め、其功ありしによりて知るべし。果せるかな、盛世かの時の如きに於て、大ひに廟堂の重きをなせし、げにさることゝいふべきなり。さればにや、種々樣々の事に於て、功を後に殘せしや、數へ來ればまことに多し。就中その、古今集一部を編し、

遠き今にこれを傳ふ、我等これによりて大ひに和歌の秀を知る、其功やそれ、他に超へて偉なりといふべし。そもそも、王朝の中葉に於て、斯道大ひに盛を極め、所謂王朝風なるものを作れり。されど、其數多き秀吟のいづれもいづれも、皆人々の家にかくれて、公けの世に現るべき、たよりはいまだあらざりき。こゝに於て時の英主、醍醐天皇は、延喜五年四月十八日といふを以て、畏くも、こゝに勅をたれ給ひ、歌集編纂のことをのらせたまふ。

貫之、おほせかしこみて、自から其が棟梁となりて、大内紀紀友則。前の甲斐の守、凡河內躬恒。右衛門府生、壬生忠岑等の數人をひきい、主として其頃の秀をあつめ、又先きつ代の吟にして、かの萬葉集に漏れたるもの、これを集めて、ともに補なひ。即ち和歌古今集と題して、これを奉つる。即ち、古きもの、今のもの、ともに集むといふ意なるべし。そは其序文の中に於て、いにしへの事をも忘れじ、ふりにしことをもおこし給ふとて、今も見そなはし、後の世にもつたはれとて云々、又萬葉集にいらぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなん云々、とあるによりて明からなり、一部すべて二十卷、春夏秋冬、戀、雜、旅、旋頭、俳諧、長歌など、和歌さま〴〵の躰にわたりて、載するところ併せて其數一千首あり。

この書の序文は、いとも名高きものにして、實に美文の摸型なり。卷首には和文もてこれを綴り、卷尾には漢文もてこれをのす、單にこれ等のみによりても、又貫之を知るに足らんか。

殊に又、この歌集に、あはせてともに、傳ふべきは、和歌六歌仙といふことなり。六歌仙とは人夙とにきいてこれを知らん。僧正遍昭。在原業平。文屋康秀。喜撰法師。小野小町。大友黑主の六人なり。これ、數多き歌人の中より僅かにゑり出でし處にして、即ち貫之

が撰びしなり。

又、これ等六歌仙の歌を評じ。僧正遍昭の歌のさまは絵にかける女を見て、徒らに心を動かすが如し。在原業平のは、萎める花の色なくて、香わづかに殘るが如し。文屋の康秀のは、商人のよき衣着たらんが如し。喜撰法師のは、秋の月を見るに、曉の雲に逢へるが如し。小野小町のは、よき女のなやめる所あるに似たり。大友黒主のは、薪負へる山人の、花の蔭に休めるが如しなぞと、さまぐ\のことにたとへて、たくみに是を評判せし、實に我國に於ひて、所謂批評なるもの、最初第一とこそいふべきなり。猶其外にくわしくは、古今の序文について見るべし、親切鄭寧到らざるなく、誠に完全なる一種の歌論、歌に心をよせんものゝ、忘れても讀まずんばあるべからざるところなり。

今、貫之が身について、其小傳をこゝにいはんに、古來多くの名人の如く、甚だ朦々として詳らかに傳はらず、唯彼れは、望之といふ人の子にして、延喜六年二月、初めて越前守に任ぜられ、其後かれに轉じ、これにうつり、様々の官位加冠を經、天慶九年某月某日、從五位上、木工權頭を以て卒せり。

上述、實に古今集こそは、勅して撰ばしめ給ひたる、所謂勅撰集なるもの、初めなり。其後代々の撰集、順を追ふて解題すべし。

註釋の書、甚だ多し。されど早學に尤もよきは、本居翁の遠鏡とす、坊間の書店いづれの所にもあり。其他加茂の翁が打聴といふあり。香川景樹が正義といふあり。契沖が餘材抄あり。されどいづれもむづかしく、遠鏡のいと平易なる如きにあらず。初學の人はこれにつくべし。

近着紹介

つり的

日本橋本町博文館發　饗庭篁村著

これは袖珍小説第一編として世に出でたり、本編に輯集せしものつり的（滑稽劇）小説家の片商賣、都名所圖繪の版元、茸不狩の記、舊作なれども翁が輕妙洒落の筆共に喜ぶべし（定價八錢）

間一髪

日本橋本町博文館　森田思軒譯

由來思軒森田君は、囚人、貧人等の非境遇のものに最も同情多き人なり、此書袖珍小説第二編としてポーの「ヂ、ピット、エンド、ヂ、ペンヂユラム」を譯して間一髪と題し既決囚人なる異教徒の自述に係るもの、國民の友に譯述中の『死刑前の六時間』と其趣を同ふす、外にデフホの「ロビンソン、クルソー」の起りしアレキサンダー、セルカークの冒險譚をも添え、清楚なる挿畫あり、少年諸君の讀物に適す（定價同前）

日本女禮式　全

國分操子著　大倉書店藏版

「心正しければ其容自ら整ひ容整へば動作自ら靜肅なるべしされば本書は先づ其心得を説き次に身たしなみを論じさて後に起居動作より百般の禮儀に及べり」とは著者が凡例に言ふ所にして又誠に本書の梗概たり先づ父母夫等に事ふる心得より、身たしなみ、起居動作に關する心得、交際等を説き、祝賀、吊喪、進物、包結法、饗應、献立、茶の湯等の禮式を細説し尚西洋女禮式、烈女傳など添へられたり文章簡易にして總て平名附なれば了解し易し

家政

話のくさ／＼

西洋小供

黄花

去る頃より相識れる洋人の小供に日本語を授くること

を托せられ、數ヶ月間敎授の暇いろ〱眼をとめて見るに面白き事少なからず。其一二を記し見む。小供は三人なり。兄をウオルタアとよびて十一歳、妹はベルタ十歳、幼妹七歳にして井ニーといふ。共に色白にして茶色の髮房々して、快活にして愛らしき小供なり。彼等は日本に生れ、半ば日本の血を受けたるも、多くの邦語を知らず、邦語を學ぶや、久しきも、未だ十分にいろはを得書かざりき。敎授を賴まれしより、家に來り家を去る迄堅く英語を禁じ、先づいろはを熟知するに到らしめ、一週一回全く會話の日とし、書取讀書習字を重とし、傍ら圖畵を習はしむ。毎日午後一時過籬の外面にパタ〱靴の音すると思へば、玄關にごきげんやうと愛らしき聲していり來る。初めの一二週間は境遇のめづらしきに心散りて、あれはなに、これはなにとさま〱の問をなし、或は物賣の聲音をまね、或は兄妹互に墨をぬりあひ、鼻聲にて書を讀むなどふざけ勝に打過ぎしが、次第に落付きて稽古にも心いりぬ。

習字をするに、墨磨役は常に兄なり。一字を書くに、右よりするものは左より始め、上よりする者は下より書くなどさま〱に面白く、ＡＢＣに似たるいろは書の如き字をかく。よろしといふ迄は幾枚にても習ひ、一度よく、出來し字に○を附して與へしに、其後はよしとおもへば自ら◎をつけぬ。書を讀むに一二度敎ゆれば「私できましよう」といひ自ら試み、書取をなすに怪しき字は「それですかい」とか「どういふふうみたやう」とか問ひ、案じ出せば「オホ私知ります」と手早に筆とる。其所作誠に快活にて、英語の音調にて讀み語るゆゑ一層おかしく愛らし。「私レッグズ(足)が寒い」とか、「チイチヤア(先生)私此れテーキ(取る)する」とか、物を數ふるにも一ッ二ッ‥五ッ‥‥九ッ（Cocoanuts）などいふ。一日午前の生涯につき文を綴らせ

しに
きものをつけてストブをもヤスガコ(學校)スる
ウオーター
6十(六)時をきるそしてかをはわラッてきものをはめてえれさん(妹なり)のきもの(せ)てではんをたべてあり。
ペータア
六ダオキルソシテカオアラウテソシテゴハンタベマスソシテオクイコシマスオシマイ
弁ニー

愛らしき文ならずや。

彼等の最も目に立つ處は、小供ながらも他より犯されぬ超然たる擧止あり。日本の小供と交りあそび居るにも判然と已れの位置をたもてり。遊びて興つきまたは去る時くればずん〳〵拘りなく去る。別に高慢といふにはあらで、自然自尊自重の風あり。

彼等の眼は驚くべく鋭く何にてもよく細かに注視するなり。例へば鏡を書くに、其面の光る部分と影とをかきわくるなどはいふまでもなし。日本の子供はおねさんをかくにも型のうちたやうに主觀的にかけども、彼年は直ちに物を見て眞をうつさんことをつとむ。

彼等は何事にも輕々しき處なし。約束するにも「私ャ、さんにきゝます」といひまた「できるかできないか私知りません」といふ。

彼等は誠に小供らしくして、少しも作り飾る所なし。讀本に「私どもゝかやうなえらい人になりたいではありませんか」とありしに答へて、「私えらい人になつてもならなくてもかまいません」といふ如き誠に天眞爛熳といふの外なし。

彼等は快活にして滑稽の趣味多く、事を不愉快にとらず習字の際筆の毛ぬけし事あり、多くの女兒は悔む處に、アハゝと笑ひ興じ終ぬ。又或日弁ニー黒板をとり

に來し事あり、僅か七歳なるに黒板を頭上に平らにのせ悠々と快よく持ちゆきぬ。

彼等はうそつかず。これは櫻樹をきりしワシントンに限らず。小智慧をまわして細工する事なし。

彼等は獨立有爲の氣象あり。例へば本をならふにも前にもいひし如く、一二度敎ゆれば此方よりいはざるに「私できましよふ」といひて自ら試む。もし重復して敎ゆる事あれば「私知ります」といひ再ひせず。遊戲をなすにも、幾日も〳〵かゝりて自ら工夫して舟を拵へ、或は病床に居りても臥なから南京玉を通しなどして、少しく緒口を與ふれば自らいろ〳〵考へてなすなり。決してじれたり悔みなどする事なし。

家庭の敎育に心を潛むる人は考ふべき事なり。

細君の心かけ

細君の心かけは夫のハンケチをみてしらるゝといふ如く一寸した處にあらはるゝものなり。此頃或西洋婦人の家に年若き婦人の時々來り、前掛たすき甲斐〴〵しく臺所にたちはたらき居るをみる。クックとも見へねば、怪しみ問ひしに、其婦人は或海軍士官の細君にて其良人航海中なるが、船中にては常に西洋料理なれば歸られて後の事を慮りて、斯くは夫の留守に西洋料理を稽古せらるゝなりと、其平素の事へ方も思はれてゆかし。

けんちん、小鳥、堅餅

◎鷄けんちん　けんちんは冬の料理には最も適當せるものにして、原料の安價にあがるのみならず、頗る身體を温むる効あり、牛蒡、人參、里芋、燒豆腐等を油にていため煮汁を鹽梅して之に入るゝは普通の仕方なるが、鷄肉を右の具と共に油にいためて仕立つるは甚だ面白し、銀座の某小料理屋にて名代となりたりとてはやるものはこれなり

◎小鳥　小鳥は肉少けれどなか〳〵味あるものにて、

目下銃獵の好時節、寒雀を獲たらば、やきすゞめの料理面白し、即ち毛をよくむしり、脊より開いて腸を去り能く洗ひて、串に打ちて白焼にて生醤油にて焼きあげ粉山椒をまぶしかけて食し、鶉は叩肉にして適宜にまるめ、これを吸物とし、椋鳥、かけすは羽毛をむしり取り皮を剝き腸を去りて能く水洗にし、串にさして山椒醤油のつけ焼にするは面白し、すべて小鳥は骨ぐるみ俎の上にて能く叩き、之を丸めて吸物の料とするか、雜煮に入れるもよし

◎堅餅　最早正月も二十五日となり餅も堅くなりたる時節なるが、これを水浸にする家もあれど、味に酸氣を帶びて可ならず、空氣のはいらぬ箱などに入れ置き、阿部川にても製する時、一旦焦げつかぬやうに焼き、其上より熱湯をかけて黄粉にまみらば簡易なり、堅餅をつけ焼にするは若い者の口に適するものなるが、これは鏡餅の片々最も可なり、堅餅を好む人は、餅網などに吊して成るべく餅を石の如くなし置くべし

庖厨雜俎

恕　哉

其一

家政なる文字のうちには種々の項目あり、而して庖厨割烹の事は、其重なる項目中の一なるべし、一家の經濟上萬事に付きて注意を要すべきは勿論なれども、殊に庖厨の不經濟は日々のとなれば事小なりとするも、長の日月のうちには知らず識らず家事經濟上少なからぬ不始末を來たすことあり、されば今や女學校などにも裁縫と割烹のことは缺くべからざる課目の一に加へらるゝ所以なり、俗に糠味噌の出來の上手下手は、直に其家の主婦の家政の上手下手を判するに足ると云へるとは至言と謂ふべし、例へは時節柄密柑の皮を放擲することなく乾燥し置けば、夏日に當り都下本所區の

如き蚊の多き場處には、蚊遣香と爲して、別に蚊遣香を買ふの必要もなく、所謂廢物利用の言葉は、一家のとに能くよく注意せば、澤山利用の出來得る廢物あるべし、三年過てば用に立つとの俚諺は、經驗上の妙言なり、予はこの主趣を以て號を逐ひ自己の經驗上及び經驗せる人々の話を記して、家政の衝に當る方々の參考に供せんと欲す

(1) 鷄類の肉を軟かに煮る法

鷄など老衰のものは、其肉硬くして古綿を嚙むが如く、至つてまづきものなり、故にかゝる鷄類を殺して食膳に供せんと欲せば先づこれを殺す前に少許の酢を飲ませ暫時嘴を壓さへて吐き出さぬようにし而して後これを脱毛して適宜の割烹に供せば如何なる老鷄にても軟かくなり決して古綿を嚙むが如きとなしこの事を記臆に存せばかゝる老鷄類を料理する場合に家主及び來客の賞賛を博することある可し、

(2) 鷄卵新舊の鑑定

鷄卵の新舊を鑑定するとは其道の商賣人は經驗上より殆んど誤まる所なしと雖、普通の人にては容易に鑑定し難き故種々の説を爲すもあれど原來此事は餘ほど困難のとにして歐米にて常に肉食する人々さへ久しく苦しみし位、就ては先年米國にて其鑑定法を發明したる人あり其法は食鹽三十二匁を純水四十匁に溶解して其内に卵を投入せば產後一日のものは水底に沈み三日を經過せしものは液中に浮み五日以上のものはその日數に隨ひ次第に液水の上面に浮ぶものなりと云へり冬日は腐敗卵も少なけれども心得置かば利益する所あるべし

(3) 松魚節の貯蓄

歳暮年始には各戸とも能く松魚節を貰ひ一年間用ひても盡きぬ位、澤山なるとありかゝる時には其貯へ法を知ると緊要なり通例風の良く通す所に釣るし置けば虫

の附くを防ぐと言へど梅雨などには能く虫の附く患あり故に松魚節に酒を塗り置き三ヶ月目に一度位づゝ塗り重ねば二年が三年でも虫の入る如き患なし簡單の法なれば實驗して其虚ならざるを知り給へ

社交一斑

流行三件

流行子

大島紬の下着

大島紬の上着及書生羽織の流行は、今日にては平凡となり、本年は禮服(譬へば黒羽二重紋附)の下に大島紬を二枚又は一枚重ぬるもあり、これは上着を脱いで、ちよいと遊戯着にでもなる時、そつくり間に合ふなり、併し市樂などの下にこれを一枚重ねたもの一番多く見當る、此流行は通人、又は凝つた男子社會なり。

金下まきの櫛笄

黒鼈甲の蒔繪なることは敢て珍らしきにあられど、近來貴婦人の髮に注目するに、普通のとは何となく違ふ所あり、違ふも道理、これは金下まきと稱し、普通のは金の下が、炭の粉にて積み上ぐれど、これは純然金粉にて蒔きあけたものなり、價は素より貴し

平民的下駄

これは最も平民的なるものにて、近來諸物價騰貴と共に桐材大に暴騰し、書生下駄すら三十錢以上に達する有様なれば、山桐に柾目をつけて一見本桐と見まがふもの、書生下駄、おさん下駄など拵なし平生用のものにはやる

雜錄

小兒の世界

KM生

獨逸の大將デルフリンゲル

昔獨逸のプロイス國にフレデリック大王と云ふえらい天子樣がありましたが、諸國と戰爭して之に勝ち遂に今日の獨逸帝國の基礎を置かれました。其臣下にデルフリンゲルと云ふ強い大將がありまして、大王を助け

て大軍を指揮し、大王の軍隊が強かつたのは、多くは此大將の力によると云ふ事です。

デルフリンゲルは元は賤しい身分から起つた人で、小供の時から仕立屋に奉公にやられ、行く末は仕立屋になる決心でありました。十六歳の時主人から暇を取つて、仕立職を修業するつもりで國の都なる伯林さして旅立しました。途にエルベと云ふ河がありましたが、其所迄來ました時には僅かばかりの旅費も皆つかいはて、嚢中無一文となりました。故に渡し錢がなくて此河を渡る事が出來ず、河岸に立ちて呆然として途方にくれて居ました。其所に二三人の兵卒がやつて來て、渡錢を拂はずして横柄に舟に乗り込で河を渡りました。」デルフリンゲルは不審に思つて、舟子に其譯を聞きました。舟子は答へて、軍人は全國何處に行くも無賃だと申しました。デルフリンゲルは之を聞きて俄に軍人が羨しくなり、仕立屋を止めて軍人にならんと決心し、背に負て居ました仕立道具を河中に投げ棄てゝ直に志願して軍人となり、騎兵隊に入りました。デリフリンゲルが騎兵の一兵卒でありました時は、粗末な藁の蒲團の上に寝ましたが、始終、寝がへりばかりして充分靜に眠りませなんだ。同輩のものは之を知つて、何故靜かに眠らんかと問いましたら、デルフリンゲルは答へて、私は何時大將になれるかとそればかり考へて眠られぬと申しました。同輩の者は餘の高慢の言にあきれて、大將等には夢にもなれるものかと云つて大層嘲笑しました。然し精神一到何事か成らざらんと申す事がある通りに、デルフリンゲルは遂に大將となり、元帥に迄昇進しました。

健康は金錢よりも貴し

一人の貧しい青年が幼い時教育を受けた教師の元へ行て、自らの貧窮の有樣を訴へて歎きました。教師は之を聞きて「汝は眞に貧乏か、汝は身躰甚壯健の樣に見

受らる、而して充分仕事の出來る逞しき二本の腕を持て居る、さらば今千圓差上るから、右の腕一本私に讓りくれぬか」と申しました。青年は驚いて答へるには「どうかこれだけは御免被下い、此腕は決して金錢に換へられませぬ」と。敎師「されば其眼は幾何程で賣るか」青年「これもどうか御免被下さい」敎師「其耳は如何」青年「これも又金錢で換へられませぬ」と。そこで敎師の申すには「汝は貧乏なりとて差程歎くに及ばず、汝は確に金錢にて換へられぬ貴き寶を持つて居るではないか」と。

又或貧しき商人が旅行して中食せんとて或る旅宿に入り、最下等の料理を食て居ます所へ、一人の富者が立派な馬車に乘つてやつて來まして、最上等の料理を命じて、馬車の中で之を食い且美酒を飲で居ました。商人は之を見て、大層其富者を羨み、どうか一度はかゝる身になり度いものだと思いました。富者商人の心中を知りてか、之に向つて「貴君どうか私の身と換つてくれませぬか」と申しました。商人は深くも考へず答へて申しました「貴君其馬車より下りて、其持物を悉く私に授與し給はゞ、私より又自分の所有品は悉皆御進呈申さん」と。富者は心よく之を承諾して、馬車から下りました。商人は之を見て驚きました。そは何かと云ふに彼の富者は大なる跛者で、杖にすがらずには歩行する事が出來ませなんだ。

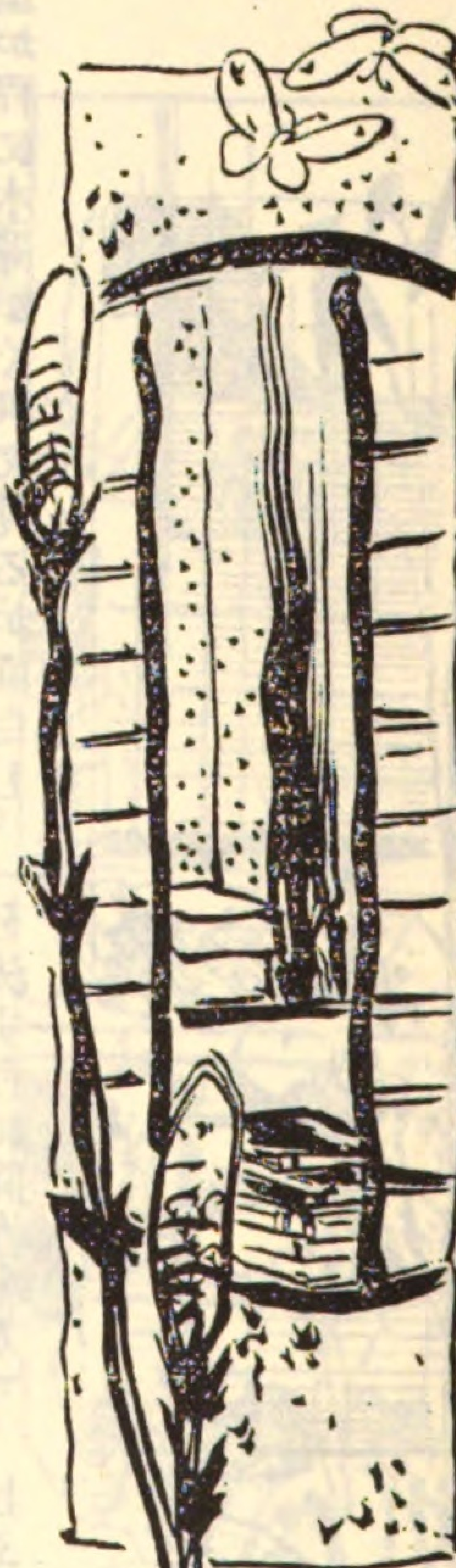
富者は商人の驚けるを見て「これでも貴君は私の身と換つてくれますか」と申しました商人答へて申すには「どうか御免被下い私の足は千の馬足よりは大切であります、私は跛者で美衣を着美食に飽くより、寧ろ粗食に滿足して健足であるを望みます」と。富者は再び申しました「貴君若し私に健脚を授與せらるれば私は此馬車も黄金も財產も凡ての所有物を差上げます」と。富で病めるよりは、貧くても健全の方が餘程幸福であります。

理想的の住居四季

一菜庵主人

春の住居。（一）

春の山はけはしからぬがよし。春の水はゆるやかに流る丶がよし。家は其間に結搆をつくさずとも。清らかにつくりなして住まほしけれ。窓は南をうけて梅の一本老ひたるがのぞけるはうれしく。門扉は竹など疎に編みてつくりなし。松の緑千歳の蔭をつくるが頼母し。菜の畑數項門扉を出づるに細き道を挾みて黄金の波をよせ。後園には竹の一叢靜氣かるべし。梨花など其間に白く咲ける。趣又常ならず。蝶の羽袖一ツ二ツ輕ろらかなるはめでたく。



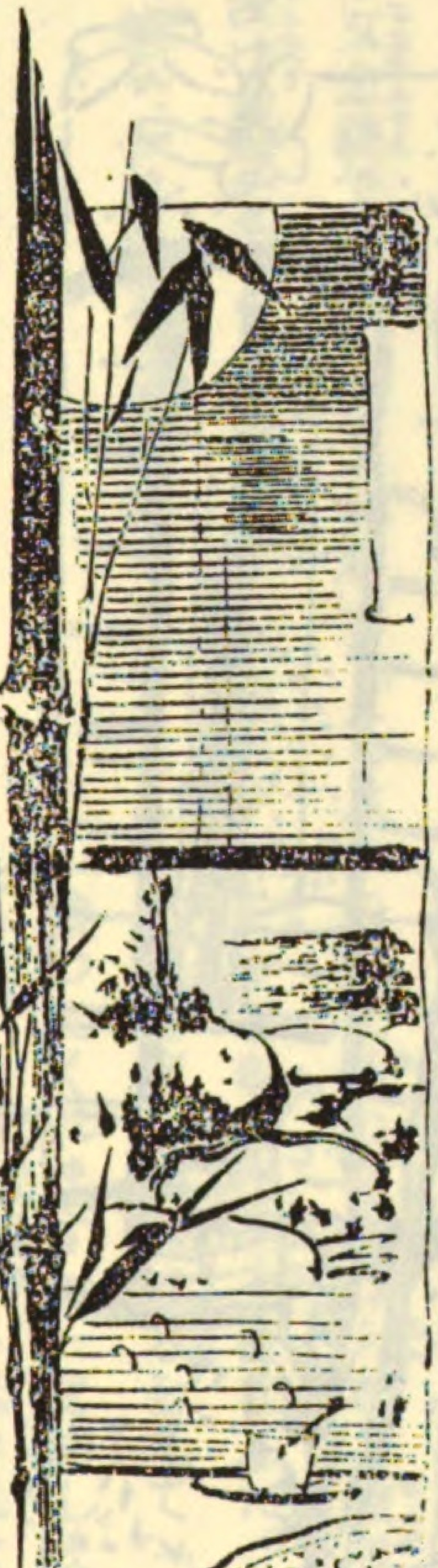
春

飼育ならぬ鶯の日毎に来鳴くこゑ何よりもゆかし。庭には廣らかなる芝生の。花氈の如くなるが。所々に菫花蒲公英の色を織込めたるは美し。清らかなる泉をた丶へて深く廣からぬ泉水の内には。赤からぬ白からぬ魚の勇しく泳ぎ廻れる。葦の芽の水面より僅に角目立たる。たぐふべきものなし。机には和歌などの書五六冊讀むにくどからぬよし。柱鴨居など拭出しの光澤ぬりたるが如く。疊障子の紙は新しきに越すものなし。一鉢は梅よりも水仙うれしく。爐には櫻炭の半ば火となりたる。釜の湯のたぎる音樂しや。友は風流なる。老ひたるが二人稀に訪來かし。家には老僕一人あらば足るべし。寒き風は屋後の岡にへだて。暖き日は庭前の原遊となるこそ願はし

けれ。人里も遙に見へ渡りて。馬など牛など追ふ歌の。されたる聲聞ゆるも煩はしからずよ。』

夏の住居。(二)

深からずとも清くして喧しからず流るゝ溪川のサラ〳〵と音する。雨か風かとも聞ゆる何よりなるべし。山は筑波を四五里が程に木間かくれに見るが面白し。青苔滑にして竹樹叢立てる邊に近く。廣からぬ高臺水に臨みて屋後に突兀たる青山是非あらまほし。庭には形珍らかなる大やかなる岩石など五つ六つありて。數十坪が程なる庭は老ひたる赤松の緑常に滴り。涼意自ら動くなど樂しかるべし。松が根に石もてつくりたる碁盤一面。唐様の陶もて造れる腰掛四つ斗りあらば飽くべし。



夏

前なる溪川には火山石など多く。水のこれに觸れて白く泡立つもよく。腰に魚籃一ツ結びたる男の手に網を持ちて下流より魚を漁りつゝ來れる憎からず。少し上手なる小橋を日暮るゝ頃刻里の童などが。秣草苅りての歸途草笛吹鳴らしつゝ渡る愛らし。雨はドッと車軸を流す程に降り來りて。拭ふが如く忽ちに晴るゝがよし。天地碎くるかと思ふ程轟き渡りて。電火すさまじく閃くは。勇しく覺えて心地すが〳〵しふなるめれど。永くはためきつるはうるさし。

雨後の緑自ら烟りかすみて。日は名殘なく沈みはてぬる頃。彼方の黒みたる山と山との懐より。圓かなる月の自ら浮み出でたる。これ程の景色少かるべし。時鳥

の一壁もかゝる折にこそ待たるを。床には一張の琴一幅の畫。机には白氏文集一帙にて足れり。酒も少しは味よきはほしく。肴は香魚にまさるものなし。』

秋の住居。(三)

秋の山は骨高く枯れて形の嶮しきがよし。水は大きなる方一二里なる沼の深く清きがうれし。岨の中程水に臨みて突出たる岩の上平にして苔深き處に。二間ばかりなる家居あらまほし岨の中程より下には飛瀑玉を碎きて松の風瑟々の音幽に。楓は五株六株早や霜に飽きて二月の花よりも紅なる趣ありや。窓の下には黄菊白菊薫りそめて桂の



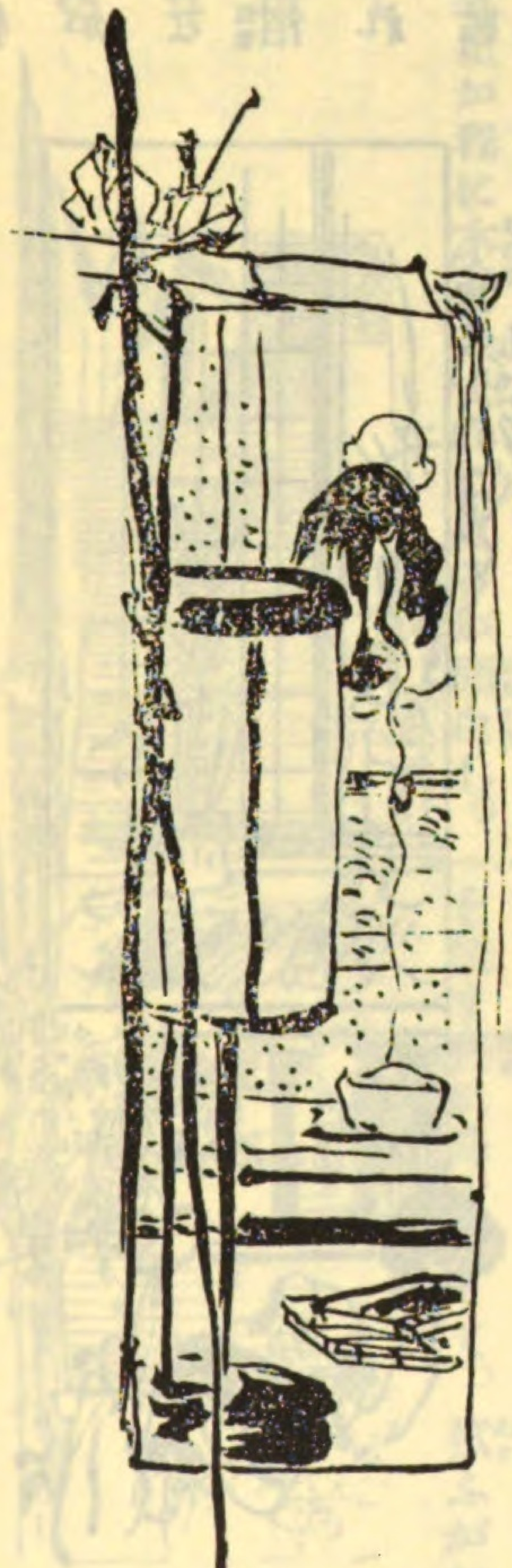
秋

香さへ何處よりか通へるゆかし沼をへだてゝ。漁家數棟。松の木の間に網をさらして。夜は漁火漁笛心あり氣なる心にくし。遙には赤城榛名の山二三里が程に隔てゝ夕日に黒む影見ものならずや。朝に心なくして岫を出づる白雲。夕に漁りうみて塒にかへる白鷺。いづれか畫中の物ならざる。家より崖を下るに細き道あり。道つきて水なり。蕎花白く水著く。茲に一葦の輕舟をつなぐ。以て月を賞すべく魚を網すべし。夜は雨を聞くもいとたのし。雨に渡る雁が音又なく心憐なり。更けゆく夜の鐘の聲龍宮よりや響くと耳をそばだつるに。心地奈落に沈が如く覺へて。自ら道念の動くもとふとしや。

書は禪書一二部。史書五六匱にて足るべし。友を訪ひなどするに小さき蹄よき馬一頭養ひたし。蕈狩する山近くあれかし。老ひたる僕の話好なると。童僕の賢氣なるが二人あらまほし。友は日に二人づゝ世利を語らぬ人の訪ひ來るをよしとす。味よき茶と甘き菓實とはなくならぬ物なり。』

冬の住居(四)

冬の山は餘りに險しからぬが趣なるべし山の木の葉は大方に散れて。松ばかり彼方此方一木二木秀づるは何よりもうれし。廣く靜なる水の邊もよけれど。山深き林の内に勝るべくもなし。登るに疲を覺えざる程の山二ッ二ッ起伏する間に家居は設くべし。井は樋をつたひ來る山下水の常に滿ち溢れて。あふれたるがたゝへて凹く池をなす。池に大なる白鵝一雙を飼ふ。大なる火鉢に火の多かれかし。酒と獸の肉とは第一に得まほしきものなり。暖き寢具と坐蒲團とも無くてならぬものなるべし。



冬

雪は二尺程つめるが興深し。獵銃一挺。獵犬一匹。筋骨逞しく實直なる僕一人あるは願はし。書は種類と共に多きを喜ぶ坐敷の半は書匱にてみてるが何よりも心地よし床。には寒梅の一枝。名香一炷の外は望む物もなし。世俗のたより知らんには新聞の一二種。外に文學雜誌五六種。』

右四季の住居は。主人が隱棲を理想上に畫けるもの。俗間に齷齪して鹽米新炭の乏を憂ふるの今日。聊か記して自ら慰むるものと察し給ふべし。

(中付の一)

雨谷一菜庵著　◎永井鳳仙畫肖像入

再版

藤田東湖

定價金十八錢　郵稅四錢

●●●●日本新聞評　東湖とは如何なる人ぞより起筆し青年時代、景山公と彼、勤王家としての彼、宗教に對する彼、教育家としての彼、撥夷家としての彼等種々の方面より之を叙せり面白き書ぶりなり

●●●讀賣評　（精細なる本紙一段に溢れる評を試み其結末に曰く）本書は材料に於て体裁に於て文字に於て功一番を虧くの憾ありと雖世間未だ東湖の爲めに筆を着くる者なき時に當り先づ其傳を草して先賢の遺德を發揮せし功勞に至りては決して少からず而して篇中「東湖の青年時代」は尤も精彩の在る所にして錢中の錚々たる者と謂はざるべからず余輩固より瑕を以て瑜を掩はざるなり

●●●●教育時論評　藤田東湖は、水戸勤王派の首領か、内外多端議論紛々の間に在りて、悲歌慷慨、勤王攘夷の精神を鼓吹しつゝある偉績を紹介す。桃の如く竹の如し、東湖の面目、躍々として指掌するが如し。

●●●●東京朝日評　東湖先生の性行經歷を縱横自在の筆頭に描出して其人の面目は躍如たり

●●●萬朝評　余輩の數間を以てすれば兎も角も東湖を論評して冊子を爲せるは此篇を嚆矢とするやに覺ゆ文氣俊快頗ぶる主人公の人となりに稱ふも喜ぶべし

●●●●中央新聞評　近代の偉人藤田東湖の生涯を記述評論せる者叙事精密議論明快筆勢亦頗る勁健なり唯其東湖を贊頌するの餘往々誇大に失するは著者の水戸人たるが爲ならんか假評すれば此方社偉記叢書中の好者にして曩に發行せる坂本龍馬に勝ること一等なるが如し

二版

簡易料理

定價金十錢
郵稅金二錢

二版

簡易生活

定價金十錢
郵稅金二錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

●月やくを下ずに胃腸を害せず子宮をいためず苦痛なく必ずおりる不しぎの妙藥御ためしあれ

流經散

三日分金十五錢　送料二錢
七日分金三十錢　送料二錢
特製十五日分六十錢　同四錢
特製四廻分一圓　送料六錢
郵便切手にて宜敷着直送る

●月やく止まるを憂ふる方は毎月一の日此藥を服用せば必止るとなし三ヶ月以上の閉止も特製の分運服せば程く下る妙なり

産後の古血又は血塊及び十七八才にして**血**の道月經なき人にても忽ち下ると請合也

折々**目まひ**立くらみ**づ痛**のぼせ又物事を苦にして氣分あしき**等**に用ひて實によくきく藥にして世けんありふれの月ざらひ等と天地のちがい御試みの上功能の顯著なると知りたまへかし

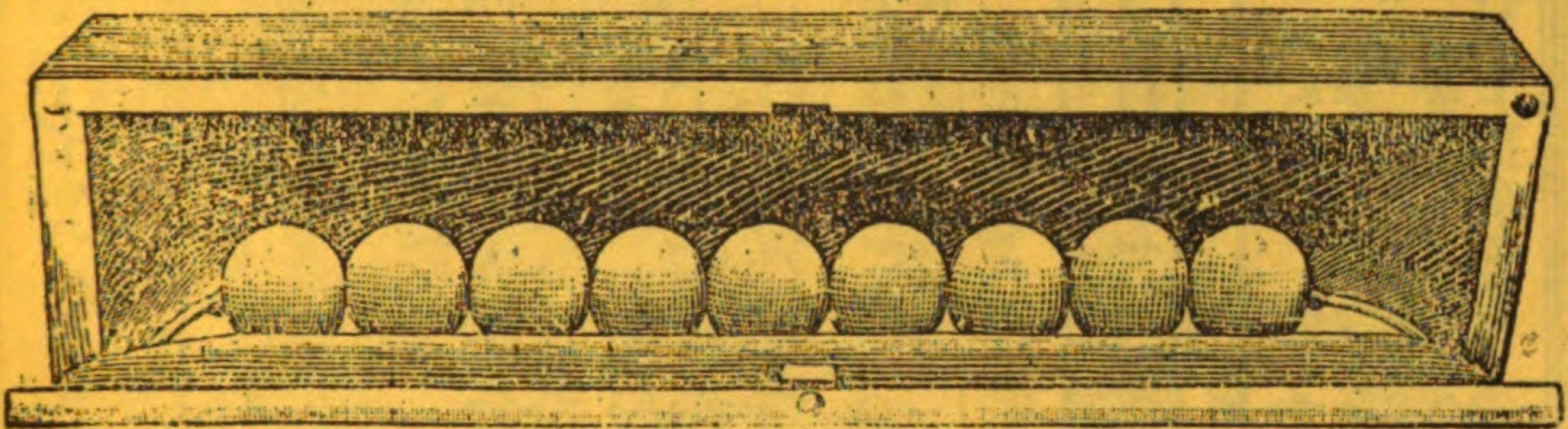
東京神田五軒町一番地（大通り）

藥種賣藥化粧品大勉强御小賣

中川商店

（中付の二）

專賣特許人造珊瑚珠



今般弊舗に於て發賣仕候人造珊瑚珠の儀は製作者多年の研究を以て始めて發明し專賣特許の榮を得たる者にして實に純粹の珊瑚珠と毫も異ならず從來の「ゴム玉」「明石玉」の如く卑しき品に無之古渡珊瑚珠特有の性質に至る迄化學の作用を以て其儘に模造し候へば實に高尙にして貴婦人令孃方の御需用あらせらるゝも決して恥しき品にあらず玉類に鑒識ある人と雖ども決して眞僞を見分る事能はざる程に精巧精美を竭し殊に何年御使用相成とも變色の憂ひ無きのみならず永く御使用相成に從ひ自然光澤を增し恰も古渡り珊瑚珠と識別する事能はざる程にて實に不思議の製作なり且つて變色破損等なきは弊堂誓て保證仕候萬一右樣の缺點有之候節は何時たりとも御引替可申上候

但し取次御望の御方は兩店孰れへなりとも御便利の方へ御申越し被下度候

（注意）弊舗發賣の專賣特許人造珊瑚珠など云ひ紛らし僞物を販賣するやに聞及候へば御購求の節は商標御覽の上御買求の程偏に願上候

爲替は下谷局並に神田局兩所宛郵劵代用一割增

丸玉緒〆類 一個に付		特別製 一個に付		根掛丸の玉 一掛	
○四分玉	十錢	○四分玉	二十錢	○三分玉同	廿三錢
○四分半同	十五錢	○四分半同	三十錢	○三分半同	六十錢
○五分同	廿五錢	○五分同	五十錢	○四分同	九十錢
○五分半同	卅五錢	○五分半同	七十錢	○四分半同	一圓卅五錢
○六分同	五十錢	○六分同	一圓	○五分同	二圓

東京下谷池の端仲町二十九番地 貴金屬美術袋物商 **玉寶堂** 飯塚伊兵衛 謹白

東京市神田區須田町六番地 鼈甲珊瑚珠類小間物商 **長岡商店** 謹白（電話三百五十番）

特約大販賣店

横濱市伊勢崎町 高田五郎
越後國中蒲原郡白根町 富井久平
伊勢國津市立町 寳物商店
富山市大字惣曲輪 保招堂 西田美信
京都市五條通高倉西へ入 北村政七
名古屋市末廣町 近藤太衛
武州川越町 山田屋周次郎
札幌南一條西三丁目 野原昌之
取次所市内各小間物店にて販賣す

家庭雑誌第九拾四號春期大附録
（明治三十年一月二十五日發行）

文藝



金魚の盃　二十三階堂

金魚賣の上

むかし、大和の國山邊の郡丹波市といふ處に古池屋の鮒右衛門とて近郷に隠れもなき金魚賣ありけり。屋敷の園廻りに一と畝ばかりの池を穿ち、四方を漆喰堅めにして山より湧き出づる清水を冷がゝりにして溜水きよく浮藻を遣はせ、爰に數多の川魚を集ひ、大なるは尺に餘れる緋鯉、眞鯉、尾頭の異形なる金魚の種々を養ひ育て、錦鱗溌剌たる朝夕の眺め樂み、京は宮家、堂上方の御籬中、浪花の津にては數多き長者の隠居若子様の御庭の泉水、手水鉢の翫賞物に賣あるきける。

此の金魚賣も元は西國長崎の津に生れ、和唐内といへる唐國の種を雙尾千兩に購い求め、是を種にして大方ならず魚子を飼ひ育て、一とせ大阪の津に渡りて賣鬻ぎけるに莫大なる利潤を獲て、一時に財富み、家榮え、其れより、近くこの丹波市に住ひ、日頃數多の魚子を養ひ育てゝは折節都へ上り、奈良へ出賣いして居たりしが、或る歳池の邊を川獺に狙はれて日頃我が家の寶と貯へ置きたる數多の金魚銀魚を一ひきも殘さず噛殺され、死骸は池の汀に黄金、白銀を蒔き散らしたる如く、浮藻を根ごきにして鯉を泥田に喰ひ斷りたるなど無慘至極の躰爲に鮒右衛門の驚駭一方ならず、齒切を爲して悔い恚りしも元より畜生の仕業なれば、誰に訴へ怨まんやうもなく、且は怒り、且は悔いつゝ詮方なければ再び長崎の地に罷り歸りて新らしく種を仕入るに若はなしと妻子に其趣を告げ置き、有金二千兩ばかりを掻き集め、是を金魚の元資となして西國さして旅ひ立ちにけり。

金魚賣の下

流石に長崎は交易の市場、唐土、紅毛の異國人入交りて珍品奇物の眼に異しきばかり、金魚屋の鮒右衛門も遙る〲志ざしたる甲斐ありて、望みし品物の手に入る早く、二千兩の元資を惜まず仕入たる中には獅子頭と名付られたる一尾の目方三十匁もあるべき錦鱗の照り輝きたるあり、猩々と銘ある總躰眞紅にして三叉尾の長さ五寸ばかりなるあり、曉の明星とて胴中白く尾頭の淡紅色に光りたるあり、布袋と唱へて腹大皷の如く張り膨れたるあり、何れ

も一尾五両十両といふ品物、大凡そ三百ひきばかりを仕込み、是を經一尺五寸ばかりなる眞鍮の輪の篏りたる半切に、棕櫚細を四ッ手に採りて棒先につけ、上より細かなる鐵網を覆せて自から擔ひつゝ海陸百八十里の旅に上りぬ、折節上方へ上る便船のあるを幸ひ、長崎より艤装ひして波路遙かに玄海灘を渡り、潮迅き長門の瀬戸も難なく過ぎて、内海の大島小島を竪に看つ横に看つやがて風光妙なる播磨潟ちぬの浦邊の朝夕の景色を船邊に賞しつゝ浪花の津へと着きけり。

流玉鎔金是れ好賞翫、片鱗細翅價千鎰、實に金魚の物たるや、其の質玉を流すが如く、金を鎔すが如くにして座上盆泉の賞翫此の上なく、一片の細鱗其美なるに至つては價千金猶貴しとせざるなり、是を飼いて高貴縉紳の賞翫を尋ね、權門豪賈の内庭に賚せば、一擔小桶の魚群も饒かに中人以上の產なるべし。金魚賣の紺右衛門長崎にて購ひ求めたる品物を京の縉紳方へ賣り鬻がんとて浪花の津を立ち途すがら商ひの事など考へ、さても去年彼の川瀨の祟だになかりせば、爰に凡そ三千兩が品物はあるべし、さすれば我が家の池に貯い置ける魚族を併せてあらまし五千兩が物のありしならんに憎き畜生の振舞もてあはれ我が日頃の丹精を烏有になしたり、嗚呼惜みても餘りあり、去ながら今更に是を追懷しても詮方なし、其内には又よき商買冥利のありて、天燈樣の果報を授け給はん時もあるべし、兎角は運に任すべしとて且つは悔み、且は慰めつ近村遠落の村々一と眼に見透しの畷手道を一竿の息杖に支へ

つゝ長柄の村へと指かゝりける。

見渡せば向ふ數十町の杜蔭に一と村の建前あり、小高き丘を界にして定かには見えねど何樣大家の屋敷らしく、白壁造りの土藏十五六棟立ち並びて遠くより眺むれば城壁の如く、周圍を繞る黑板塀の中に一と際眼立ちて見ゆる高き棟は表屋なるべく銅瓦の朝日に映りて燦めきかへる結構いふばかりなし、折節春の初めつ方とて、野邊の艸木も芽みかゝりて、朝風そよ〳〵と心地よく、左り武庫山、右、信貴、生駒の諸山霞靉靆て、遠き近き杜の村々薄紗を曳きたらんがごとし、氣もうらゝかに伸渡りて旅する身にも何となく眠りの催ふさるゝ頃なり、野良仕事の休に匡へ煙管して畦の枯草燒く男に彼は何ぞと問へば、如何に旅人知り玉はぬか、彼れは此のあたり音に響きし持丸長者長柄の浮倉とて百性共の申すには日本一の富限者といふなり、屋敷の廣さが二町あまり、中に建て並ぶ米倉、土藏、棟幾つといふことなき表屋孫屋、離れ座敷茶座敷は京、大阪で名譽と言はるゝ人の建てし念入物、大名にも眞似ならぬ榮耀の造作、小庭の泉水築山は東山の金閣寺を摸して禁裏將軍樣の御苑に擬らへ、其身代は何千萬兩とて數は知れねど年々地方より上る米萬石、この邊我れ〳〵が鍬もて穿つ田畑は申すまでもなく向ふに見ゆる一と續きの林山より樵出す毎日の薪代も皆あの長者殿が持物、富限者ものやうになれば中々動かぬものでござりますと問はぬ事まで打語るも鄙人の律義なり。

餅右衛門は道すがらの商いせんとこの長者が館へこゝろざし、數はる儘に畦道を左りへ取り、大うねりの岡の裾部を幾曲まがりて野邊に逢摘む里の童の打群集ふを彼所此所に看つゝやうやくにして長者が館の裏門へ着きぬ、げに此のあたり大名も及ぶまじき家の搆へと聞きしに違はず、四方を繞らす築地の石垣高く、垣に沿ふて壕を穿ち、流るゝ水に閘門を作りて堀に湛へ、石橋を架して通路となし、樫の大門仰ぐばかりなるを俔れば中庭の廣きと方一町もあるべく、兩側に白壁の藏軒を揃へて立ち並び、戸毎に堅固なる錠前掛りて裡には幾萬俵と數限りなき米の收まり居るやも知れぬ有福を示し、五人七人の下僕共の手に〳〵高箒を携へつゝ其處此處の洒掃に立働らく躰なり。

餅右衛門は中門の檐下に荷を卸ろして案内を請ひ、丹波市の金魚賣にて日頃長崎より珍らしき金魚を仕入て罷りぬ、旦那への御目通り叶ふ事なら荷物を具して館の内へ這入らせ給へと音へば壯丁心得て其れと通ぜば、苦しからず此方へといふに中門を俔りて石疊の小塀に添ひ直ぐに内庭の方へと廻りたり。見れば眞珠を並べたるが如き、砂利の一面に敷かれて、土足に掛くるも勿體なき飛石の面鏡の如く黑光りに光り輝きたる、向ふ一帶の泉水築山、蓊欝たる森は蔭深くして天然の山を形造り、所々に巉巖の峙ちたるありて如何にも深山の如く、瓢子形の池は庭一面に擴がりて、苔蘚蒸せる巖の岸に峙ちたる、瀧あつて是にかゝり、飛沫に洗はれたる石の白うなりたる。大小鱗族の喚ぎて此處に群れ集ひたる、橋あつて池の中腰

に亘り、苔に埋れて古色蒼然たる碑の一基、二基、泉水の汀に散點して龍躰なせる松樹の翅の如く枝を伸せる、石菖蒲の巖の罅隙に根を搦みて浮萍の向ふの岸に綾の如く織り出されたる、何れか幽邃の景ならざるはなく、一歩門外に踏み出づれば田、畑の外に見るものもなき此の塵寰に是れだけの勝景を造り出したると、實に一と通りの分限にては出來兼ぬる結構なり、屋上屋を築きて通廊長く、泉水より流るゝ水を檐下に通して廻椽の廣きこと佛堂伽藍に似たり、旦那は奥深く閉ぢこもりて大名の如く、奥様と見ゆる人は殿中の如く數多の侍婢にかしづかれて歌、蹴鞠を遊ばすなど、人と生れて目出たき活計、歡樂のくらし向き、長者には成りたきものなり、と流石に鮒右衛門も端近く進みかねて、中庭の入口に荷を卸ろして須臾踟蹰へば、隱居らしき人椽端より聲をかけ、金魚商ふは其方とな大事ござらぬ、是へ來てまづ其の麗はしきを見せられよとありければ、早速鐵網を解きて半切の器を兩手に擎げ家人の集ひ玉ふ茶座敷の椽頭に運び入れんとしける時、如何にしけん、流るゝ小川の涯石に躓づく機みにあやうく手を滑らせて器を其儘水の中へと覆へしぬ。

鮒右衛門は慌てながらに手を支えしが、最早遲かりき、可惜金魚は一尾も殘さず、電光石火、流れに沿ふて走り下りぬ、立ちなどら地團太踏みつゝ、鮒右衛門は唯川面を見送り茫然と夢見し如く、氣をとり喪ひけり。

家人一同は此の躰爲を見て慌忙ふためきソレ金魚流したりヤレ急け、あの中には隨分直の

知れぬものあるべし若者早く裏の水閘を閉げよ、それ手綱よからん、四手網はなきかと皆々いたづらに周章るばかり盜賊を見かけて繩を綯ふの譬へもまだ遲からず、川に出でゝは自由に働らく魚類の天性、兎角して掬いあげたるは僅かに數尾千金の寶は空しく水に逸せたり。

鮒右衛門は絶望して殆んど活たる心地なく、遙々長崎より購ひ戻り、折角丹精して此處まで運び來りしに、一朝のあやまちより有らん限りの身代を水の泡に歸せしめたることと如何にしても悔しさ耐られず、最早天運に見離されたと見るの外なし、活きて効なし、世に望みなしと悲嘆に暮れしも道理なれ、縡の次第を聞き知りて此の家の主人奥の一間より端近く出で來り、商人の災難如何にも氣の毒なり、可惜財寶水に流せしは殘念ながら今更悔みて詮方なきこと、何は兎もあれ、館内にて出來せし災難なれば、價の何程に限らず半金だけは此方に於て償い進ずべし、最早悔みて歸らぬことを餘り苦にして氣を煩らひ玉ふなよと、流石は富限の世に賴もしき仁德をあらはしける、鮒右衛門打聽て涙を流し、如何に慈悲ある御言葉とは申しながら、元々おのれの過失より出來せし事、露いさゝかも御掛念あるまじく候と言ひつゝ、早退り去んとするを主人呼び返して再び慰め言ふやう、元より此方に於ては通りかゝりの旅人なり、何處如何なる人かは知るよしなけれど、既に商ないのことゝろざしありて態々此の屋敷内に入り給ひしからは多少に限らず利潤を得んとの望にてありしものを、其れが

たとへ過失なりしとは言へ、幾許の財をこの屋敷内にて喪ひ給ひしとありては其方は知らず此方に於て何分にもこゝろ濟まねば、相應の償せでやあるべきと理の當然を言ひければ金魚賣も今更否み兼ねで此度長崎より仕入れ上りし一條より我が身の運命のあらましを說き出しければ浮倉主人いとゞ憫然の思ひを爲し更めて酒肴など調へ一夜こゝろまかせに饗應けり。

通り一遍の旅人に斯ばかりの仁義、肝にも銘して嬉れしさ限りなしと金魚賣も今更何をしてか其好誼に酬ひまつらん、唯、此處にいさゝかながら曩きの日長崎にて異國人より購ひ需めし一個の器あり、形は尋常の盃にて別段珍奇寳とも思はれねど、其の中に彫り浮められたる金魚の形は尾鰭活々として如何にも名工の魂を留めたるものらしく儻多からぬ品と覺えて今日までは所持し來りぬ、烏許がましくはあれど是を御仁德の記にまで參らせん、御笑納あらば滿足に覺え申すべしと懷ろより徑二寸ばかりの盃を拿出し去らば拙者は是れより再び長崎へ罷り越し復た好き異り種の魚子を仕入て上國仕るべし、まづ其れまではこの品確かに預け置き申さん、重ねて見參つかまつるべしと言ひ殘してぞ罷り去たり。其後幾星霜は經しも彼の金魚賣は如何になりけん再び此の長者が館を訪ふとなく、物代り星移りても猶彼の盃は依然長者が館に遺り居りけん、後の條を見るも亦不思議といふべし。

乘合舟の上

西國より大阪へ上り下りの商人、尼が崎に船待して播州舞子ヶ濱まで漕出しぬ、乘合船客の中には身の丈六尺あまり、骨飽まで太く色赭くして眼孔落窪みたる九州侍あり顔遍たくして鬚多く色白ろくして背の伸びたる北國筋の浪人あり、千兩萬兩の黄金を懐ろにして市に走る商人もあれば身を行雲流水に任せて行住自在なる遍歴僧あり、數多の下僕を引率て近國の名所古跡を訪ふ有福の隱居もあれば津の大店の手代のやうなるもあり、浮世樣々の人々春いろ〳〵の思ひ立ち落ち合ふて十七八人一つ船に乘り合けるこそ賑はしけれ、舟子三人櫓を操りて海原遠く漕ぎ出しけるに春の日和のうらゝかにして風なく浪立たねば舟もおのづから眠りを催ふすばかり四方の島々霞棚曳く景色の閑かさ言ふばかりなし。一と眠り覺めて銘々欠伸嚙みまぜ、茶など呑み、頓て船路は小半道も來ぬれどまだ是れより一と退屈はあるべし春の日永のつれ〳〵に何ぞ乘合衆中にて珍らしき話にてもあらば聽かせ給へ、我等も追々國土産なりと話し申さんかと越後の國人の言ひ出せは金比羅詣の旅僧相槌うちて、其れよかんばい、さア乘合衆、どなたももう起きて話しのう一つづゝ奮みなさろ皆んな退屈ぢやさかい、サア私から一つ始めませうか、でもこう改たまつては何やら些と間がわるいなア、とりや御隣りのお侍さまこゝは無禮講の寄合でござるによつて不斷のたしなみは棄さッさりませなア泉州の大將さうぢやおませんかいな、なる程さうでござるわしらは年が年中旅から旅をして通るもの旅宿の飯のもむない事ァいろ〳〵承知のうして居ります

けんぽつ〳〵話しの口さア切ますばい、さア〳〵皆んなの衆廣に居なさろ船頭衆も櫓を上けで茲へ來なさい何よ船は動かずとよろしいとうして沖中に浮んで居るのも亦風流ぢないかいな、さアこうして皆んな揃ふた處で見ど、どなたも懸隔てのない御客樣ぢやが、これでも中には千萬兩も持つた身代の長者殿もあれば儂等がやうな其日暮しの小商人もある矢禮中しても赦さッしやりませ、などゝ客中どよみつくりて今しも話しの緒まんとする時、先刻より船暈ありとて艫の方に呻き居たる一人の男遽かに眩暈酷しくなりて其儘其處に卒倒せしに船中皆々駭き周章一座總立になりて水よ氣付と噪ぎ出し、それこゝに萬金丹があるわい早う〳〵口に含ませて水などを遣らぬか茶呑茶碗はないかといふに水を遣るには屈強な盃があると袂を搜りて取り出したるは、同じ船に乘合せたる十五六才の少年、田舍育ちの朴直なるには似合はぬ氣轉なり、心得たりと受取りて水溜桶の中へ挿し入るゝや否これはと驚きたるは年搆なる大阪の骨董商なり、まづ茲は何事も知らぬ顏して濟さんものと密と病人の口元へ持て行きどうぢや御氣は確か、もう陸へ付くのは間近じや氣をしつかりと持ちませやといふほどに病人闊ッと眼を開き御蔭さまにて一命助かりました、各々方へ御迷惑を相掛何とも申譯なし、何れも最早御安心被下と言ふに皆々安堵の思ひ、一同ほつと息を突て寛ろぐところを見て、さい前の骨董商再び水桶の側にて盃を試し、水を汲みて見て一と思案、これはと益す〳〵不思議の面色、仔細なくては叶はぬ次第なり。

何は迚もあれ彼の持主こそ故あらめと骨董商は密かに彼の少年を舳の方へ小手招きして、顔倩〳〵と打眺め、此度び御身に折入つて頼み度きことあり、仔細は申までもなく彼の盃にあり、扨も御身は如何にして彼の器を手に入れ給ひしか、御身はまだ何事も知り給はぬとよ、然らば我等腹藏なく御眼に掛くべし、これ見られよと彼の盃もて水を掬ひ入るれば不思議なるかな盃中に彫浮められたる金魚の形ちは尾鰭潑々と動きはじめて跳出さんばかり水を翻せば元の儘なる魚の形の盃の底に平たく遺れり、こは奇躰なり、世に不稀議なる器物のあればあるもの、我れ骨董商としてこのたび斯る器物を見る實にもや商賣の冥利とこそいふべけれ、あはれ御身は如何にして斯程な名器を所持いたさるゝにや、して又其の名器を自から知り玉はざりしも怪しき限り、何は兎もあれ御身斯の器を我等に讓り玉へ少くはあれど玆に幸ひ持ち合せの金子十兩あり、何躊躇玉ふに及ぶまじ御身も亦知らざる儘に人より貰ひ玉ひしものならば强ち否み玉ふにも及ぶまじ、なに他人の聰かば却て禍災の種ならん、人知れず我等に讓り玉へと言ふうち、いつしか乘合一同是を聞付けてぞや〳〵と集り來り、一寸見せ玉へ、成程是れは奇躰な名品かなと客の手より手に渡りて賞翫の聲舟中に溢るゝばかり、見れば何れも需め度きこゝろ、我等は玆に持合五十兩あり、思ひ切つて此の品交易せん、イヤ我れこそ眞正この品に見所あり、百兩出さんといふものあれば、イヤ百五十兩までは出して廉いもの、我等是の品確かに購つたりとまだ賣ふといふ者のなきに早直を糶上ぐる

と宛然市に出し品物のごとし乘合中物の分別のあるらしき男の最前より何か心に思ふ事のあるらしく見兼ねて立入り、各々方の所望さるゝところいかにも有理と覺へたり、さりながら此の持主は見らるゝ如くまだ年端もゆかぬ少年なり、斯る少年の身にありながら世に稀有なる寶物を所持したるも爭々に危ふき限りとはいへ、去りとても亦身に持つけぬ大金など懐ろにせば却て身は禍災の基なりまづ此處はよろしく拙者に任せ給へ決して惡しくは謀ふまじとぞ言ひ出しけり。

乘合船の下

さしも稀有なる寶物を持ちて然かも其至寶なるを知らざりし彼の少年こそ丹波の山の山奥に育ち一とせ浪花津の繁花なるさま見んとて故郷を立ち出でし其の道すがら或る日の事暮れて一夜を宿るべき家のなかりしまゝ、偶々ある森蔭の住果したる廣き屋敷の跡の其處に燈明の幽かに覓られしを便りにして行き着き見れば、何かは知らず、大きなる建家の物古て半倒れかゝりし其處に病み衰へたる老翁の一人の小女に扶けられつゝ棲み佗びたる樣なりしに詮すべもなければ幾たび否まれしを樣々に請ひ強りてやう〳〵一夜の宿りを求めしが、晩餐の膳に上るべき品の粟ばかりなる飯に飢へたる腹を滿しつゝ夜具なき家の片隅にうづくまりて睡ろみかゝりし折節、病みたる老翁の痛み遽かに差し起りて小女一人の手に剩しけるを見兼ねて倶々に介抱なしつゝ黎明近くまでにやう〳〵と慰めて眠らせける

が、老爺も小女も斜ならず寂びて、あくる日別れを告ぐる時、紀念の品とて贈りたるがこの盃なりしと少年の言葉も足らず、朧ろ氣に語るを聞きて彼の分別男、思案するまでもなく、开は何様由緒ある家なるべし、我等も此の儘に捨置がたく思ふなればと、少年を励まして再び浪華の津へ上り、元と來し道を戻りて其の家を尋ねければ、如何さま少年の言ひし通り、森蔭に沿ふたる廣き屋敷の跡はむかし數多家藏の建て續きたる面影の今に殘りて、梁とも見ゆる大なる朽木の處ろ〳〵に横たわりて腐りたる筵を覆ひたる上より様々の篁の生へ列りたる、又は柱の下の礎の掘り穿たれたる儘、泥水を溜めて瓦陶器の破片の縦横に放擲られたる、亦此處の森の僻蔭に瓢形の池ありて巖組の間より噴出る泥水は汀を浸して浮き草の木の葉に埋れ、涸れたる川の横さまに水は溢れ出づるなど、屋敷の四面は荒れ果てゝ、艸葎生い茂り、いたづらに狐狸の棲所かと見るばかりなり。



漁師の娘

（一）

蘆花生



霞が浦！名を聞いてさへうら〳〵とした景色が眼に浮ぶ其霞が浦の南に浮島といふは、周圍三里の餘もあらふと云ふ縦長い島で、所謂浮島大根の名所である。東側は唯もう山と畠で持切つて、三百軒の家といふ家は皆西側にずらり列んで居る。此側は、隅田川程の水を隔て、直ぐ對岸に向つて居るが、東の方は波の上一里半もあつて、麻生天王崎の大松も小供が山からこいで來る稚松位にしか見えない。

此浮島の東北の隅に、古くから唯一軒蘆の中に茅屋が立つて居る。此は漁師の萬作が住家だ。夏から秋にかけては、人身よりも高い葭葦茫々と生ひ茂つて、一寸見たところでは何處に家が潜むで居るとも分からぬ。唯此あたりを通つて居ると、蘆の中からだしぬけに刮々家鴨の騒ぐ音が聞えたり、朝夕は一條の青烟が蘆の中から立のぼつたり、たまには蘆の上にぬつと出た柳の梢に赤黒い網がかゝつて居たり、闇の夜は眞黒い蘆の隙から螢ほどの火光がちら〳〵漏るゝので、やつとそれと知られた。

併しそれよりも著しいしるしがある。それは此十數年來蘆の中から湧いて來る歌の聲だ。女の兒の歌ふ聲だ。其聲如何にも淸く限りないあはれを籠めて、聽く者の涙を誘つた。月夜に網曳ひてもどる心ない漁師も、此歌を聽いては棹をとゞめた。况して物思ふ人に聞かしたら如何樣に腸を斷つたであらふ。此歌は實に浮島名物の一であつた。

あゝしかしながら此歌も最早聞かれない。若し浮島の萬作が家と聞いて尋ねたら蘆間隱れの一軒家に白髮の夫婦を見ることは出來やう。併し最早其歌は聞かれない。蘆のあなたに夕日の沈むまで立盡しても。最早其歌は聞かれない。

(二)

十四五年も前の事だ。白髮だらけの萬作其頃はまだ片手で櫓柄あけおろす五十男で、漁もすれば作も少しはする、稼ぐに追付く貧乏もないが、貧乏は唯子のないのが是れ一とつ。若い内は左もなけれど、五十の坂目かけては、是れほど心配はないもので、夫婦寢ざめにも此事を語り合ひ、朝夕筑波さまを拜んで居た或日萬作潮來へ網糸買ひに往つて晩く歸て來たが「それ土産だ」と懷から取り出したのを見ると、當歳の美しい女の子だ。「ドウしたんべい、此孩兒は。」「此か、此は筑波さまのお蔭よ。」

サア其れからと云ふものは、萬作夫婦鹽つけて頭から喰はぬばかりに可愛がる。夜は二人がからだを屛風にして隙もる風にもあてぬ、乳はなし、ドウすべいかと、談合の末、毎日粥を作つ

て上すみをのませる。齒がみを初めると、鯉鮒の肉をむしつてかけかゝつた齒に嚙んでくゝめる。這へば立て、立てば步めと親こゝろ吾身につもる老を忘れて」お光＝娘の名だ＝を愛する這ふ。立つ。步む。獨りで箸を持つ。それは〳〵愛らしい。だがドゥも變だ。萬一啞ぢやあるめへかと萬作夫婦心配した位口をきかない。其かはりよゥ〳〵物を見る、よゥ〳〵聽いて居る。極少さい時分から自在にかけた藥罐の湯氣の立のぼるを不思議そうに目送る。蝶〳〵の飛ぶのを不思議そうに眺める。花でも草でも摘んでやれば、只もう何時までも見とれて居る風、雨、鳥の聲何でも耳引立てゝ眞から聞き惚れる。大きくなつて舟に乘せると、不思議そうに山を見水を見て居たが、頓て楓のやうな手に水を掬つてはこぼし掬つてはこぼして、少しも恐れる樣子がない。萬作が家に龜と云つて恐ろしくむさくろしひ大きな犬が居る。他の小供は恐がつてそれ龜と云へばきやつと魂消て逃げるが、お光は平氣に自分よりも丈の高い犬の頭に手をうちかけて、其冷い鼻へ頰をあてがつて、龜がざら〳〵した舌で其花の樣な頰ぺたを舐ても平氣だ。或時萬作が何處から買つて來たかガラスの小玉に金魚を入れたのを持つて來てやつた。お光は見て居たが、やがて汀に持ち出して水ながら湖にうつして仕舞つて、洋々として泳ひで行く金魚の影を目送つて、手をたゝひた。鳥を非常に愛して、よく諸鳥の鳴聲を覺えて、雀や鴉を見ると、お光は直ぐ兩手を羽の樣にひろげて、舞ふ眞似をする。水鳥の蘆邊を立つて遙かに筑波の方に飛んで行くを目送つては、半

時も一時間も見へなくなつても猶空を眺めて居る。あゝ若しあの様に羽があつたらばと思ふのであらふか、また水鳥の行衛を思ひ煩つて居るのであらふか。

二つ三つの頃からお光は口をきかぬかはりよく歌つた。如何にも清い銀鈴の様な聲をもつて居る。内に居ても、外に居ても、遊んでも、必らず何か歌つて居る。誰か敎へたと云ふでもなく獨りで歌ふのであれば、恐らく神が敎へたのであらふ。其歌は例へば

雀はいゝ見だいゝ見だね、朝から起きてまんまもたべないでちう〳〵、いゝ見だ、いゝ見だねんねしな、ねゝんねしないとね、あたいがたあべてしまうよ。

内のあんもを、ゆうべちう〳〵が半分たべて、半分は高い〳〵持つて行て、のゝさまにあげたら、あたやいや……………

など云ふ意味のある様なないやうなものだが、如何にも美しい聲で節面白ふ歌ふので、聞く者は皆含笑む。また如何にも奇妙な言をいふ。「おつかあ、あたいお蝶々になりたいねーまんまたべないで花を吸つて飛んであるきたいよウ」。とつちやん、あのけむ〳〵はドゥして上つて行くの、天に行くの、あたいも行きたいねー、ヨゥあたいをけむ〳〵にしてヨウ」。また或冬萬作か繩網で鴨をとつて來て毛をひくのを見て「あらとつちやん、トットの衣服をとつてしまふの、トットが寒い〳〵ッて泣くわ。」また或時萬作が鯉を漁て來て料理するのを見て居たが、其右の手にすがつて「あらとつちやん「いや〳〵あたいもうお魚たべるのはいや。」そして其可愛

らしい手で鯉の鰭から流れる血汐を拭つて、其落ちた鱗を一枚〳〵はめだした。あゝ若し此兒を斯る漁師の女にしないで、英國の敎育ある家庭に生れしめたらば、フロレンス、ナイチンゲールとなつたかも知れぬ。若し此兒を平安の宮廷に生れしめたらば紫清兩女の其一となつたかも知れぬ。人も生れ所と育ち樣によつて大した幸不幸の差があるものだ。併し也知造物有深意、故遣佳人在空谷で、却つて其が仕合せであつたかも知れぬ。兎に角萬作夫婦は日々に生いたつお光に慰められて蝶花と愛しみながら「妙な子だのウ」「妙な子だよ」斯く語り合つた。

（三）

文化の澤は此の島村にも及んで、粗末ながら小學校の設けがある。お光八ツにもなると、路が遠いにつれもないからよせと父母の拒むも聞かないで、往來一里の路を日々辨當さげて通ふ。何處の誰の血を承けたか、口數はきかないが學才すぐれて、暫の間に村長の子と威張る十一二の小供までも追ひ越して級第一の位を占めた。先生は可愛がる。嫉妬が起る、女連は同盟して、お光をボイコットする。男兒連は往來毎にお光を窘める。併しお光は避け躱れして取り合はぬ。其内誰かお光坊は拾ひッ子だ、捨てッ子だ、といひ出して、果ては皆なが拾つ子やあい〳〵と囃し立てる、其夕お光は家に歸るといきなり母に向ひ「母ちやん、あたいは拾ひッ兒？エ拾ッ兒？」母はギョッとしたが、取り直し「あに拾ひッ兒なもんか。嘘よッ」。

明夕お光はまた歸つて來るとすぐ「母ちやんあたい拾ひッ見なの、エ拾ひッ見」「あに」と言ひは言つたもの丶、其れから毎晩〳〵思ひ込んでせきかけ〳〵お光が問ふので、母も外で漏れては内で塞ひでも詮ないとでも思つたか、或夜お光を膝にかき抱きて涙ながらに話し聞かした。即ちお光は七年前木がらしの恐ろしく寒い夜、潮來と牛堀の間の蘆の中に棄てられて息も切れる程啼いて居たのを萬作が拾上けて來たので、何のしるしもなかつたから生の父母は誰か何人か一切分からぬ、七年の間夢にもそれと知るつでもないから、今は全く此家の女だと云ふ事をこま〳〵と話した。お光は默然として聞いて居たが、聞き終つて涙ぐんで俯むいてしまつた。其顔をのぞき込んで「光よ。おいらは最早段々年寄つて來た、是から力にするは手前ばかりぞよ」と云つたら、お光はほろ〳〵涙こぼしていきなり婆の願にかぢりついた。それからはモウ如何樣に言つても學校には行かない。始終家で遊んで居る。一度「おつかあ、拾見ッてドウするの」と聞いたが、母が心を傷むる樣子を見てからは、モウ何も聞かぬ。眞の父母のありやなしや、更に聞かぬ。併し口にこそ言はぬが、其小さい心に一點の暗愁立ち去らぬ霧の如く淀むで居るのは、餘所目にも見られる。可愛想にまた八つ七つのお光は始終拾見眞の父母など云ふことを、思ふともなく思つて、獨り解かれぬ疑問に心を苦しめて居る。之を知る者は只天道樣ばかりだ。

(四)

萬作が住家は前にも言つた通り浮島の東北の隅の一軒家で、眺望にかけては恐らく浮島第一の風景を控へて居る。

後は畑から直ぐ山つゞき。左と右は唯もう茫々たる葭葦の何段ともなく生ひ茂つて居て、前の方ばかり少し開けて居る。此開けて居る間から溶々として家の戸口まで這入つて來るのが霞ヶ浦で、此開けて居る間を横一文字に遙に限つて居るのが筑波の連山だ。家の前には水の中に杭打つて板をわたし、朝起きて顔洗ふも、米洗ふのも、洗濯も、膳椀を洗ふのも網わらふのも、たゞしは月夜に泥鰍を洗ふのも皆此處だ。水の中にはイツモ茶碗のかけ飯粒などが落ツこちて、小魚や水馬が群がつて居る、直ぐ向ふの杭には常に一艘の小舟が繋がれて、其あたりには家鴨が始終ボチヤ〱やつて居る其向ふには鰻や鯰を入れた大きな魚籃が半分水に浸つて、もう其向ふは亂れ葦の縱横に生ひ茂つて、雲つく程の伸びたのもあれば、半からほつきと折れたのもあり、葉が浮くやら、根が沈むやら、影が水に映つて、水が影を搖かして、影か形か、形か影か、深ひか淺ひか、一切分らない。右の方は物干竿が立つて其向ふの蘆の少し開けた處に大きな柳の古株があつて、此處に腰をかけると霞浦は一ト眼だ。それ水鳥が飛ぶ、白帆が走る雲が出て筑波が潜む、魚がはねて水に環を書く。イヤモウ言はれぬ。

此絶景を占領して居る萬作が家は主人だけ無風流だ。歌に詠んでこそ海人が家だが内はしきりもない一間に爐を切つて煤だらけな自在をかけ、其處らぢう漁の道具何かで一ばいだ。

家の後は壁一ト重に直ぐ鷄や鵞の小屋があつて、朝夕は中々かしましい。東が白らむと萬作一家三人直ぐと起きて霞が浦の水掬ひあげて顔を洗つて、日輪さまを拜むで、それから鳥屋を明けて鵞を出してやるのがお光の役で、萬作は時節相應鯉鮒鰻などの釣に出掛けることもあれば網曳に雇はれて行くこともあつたり、時々はまた鴨を獵に行くこともあり、さもなければ裏の畑に麥蒔大根作ることもある。薪取り草取り縫針飯炊は婆の役で、お光は時々爺と一處に舟に乘つて行くこともあれば、獨り勝手に遊ぶこともある。夜は萬作は大概寢酒に醉つて、さもない時は草履を作つたり簑を織つたり、母は薄暗い行燈のかげでつゞれをさしたり、網の繕をしたりすると、お光は學校已めて後も矢張手習讀書をせつせと勉強する誰が心をつけるのであらふ。

お光の身軆は萬作夫婦の手で育つたが、お光の心を育て上げたものは筑波と霞浦だ。山は天氣豫報、水は魚類の動靜を見る外には霞が浦か如何あらふと筑波がかおあらふと頓着もない萬作が眼には何も見えぬが、お光の眼には四季刻々うつりかはる景色が如何樣に面白く珍らしく見えたであらふ。背戸の柳緑の糸をかけそめて枯葦の間からぽつ〳〵薄紫の芽がふく頃となれば、それ雪は申さず先づ紫の筑波山霞ゆゑに遠くなつて名詮自稱霞が浦は一面春霞だ。其間に此處に一つ、彼處に二つ掌に載る程の白帆が走るともなく霞の奥にかくれ行く其景色は、如何樣にゆかしくお光の心に覺へたであらふ。それ夏が來る。四面は只もふ眞

青の葦だ、葦だ、葦だ。世間の風と云ふ風は一つになつて此處に吹くと云ふ位。夕月がのぼる。霞が浦は夜ながら東雲だ。それ闇夜は、千萬億數限りもない螢が水の上蘆の間に小さな燈火を掛けて、水も草も螢くさい。お光の心は如何樣に涼しく感じたであらふ。秋になる。萬頃の蘆一齊にそよひで秋風の辭を歌ふ。蘆の花が咲く。時雨が降る。蘆は次第に枯れそめる。頓て限りなき蘆の一葉〳〵に朝霜白く置いて、磨ぎ澄ました霞が浦の鏡一面大空につく息白く立ち上る頃は遠かつた筑波も毛穴の見ふる位近々と歩み寄せて、夕日の頃は其下に當る相見崎觀音の石段の數も殆んどよまれる。お光の心は如何樣に此清い潔い景色を吸い込むだであらふ。冬が來る。景色は寂ひれ行く。鴨の羽音冴かへつて胸にこたへる。それに雪が降り出すと空と湖と一かたまりになつて、筑波處かすぐ先きも見へぬ位ちら〳〵〳〵降つて降つて降りしきり、櫓の音もしなければ鳥の聲もせず唯時々つもる雪の重みに枯葦のぼき〳〵折れる音ばかりだ。此樣な時には、お光の心は如何樣に淋しくあはれに感じたであらふ。

學校に行かなくなつてからなほ〳〵世間と遠かつて、捨兒と聞いてから萬作夫婦の愛は昔にかはらぬが何となく心に欠陷があるらしく何が始終思ひ沈むで居る。それを聊か慰むるは歌と筑波山だ。お光は言はぬさきに先づ歌つたと云つても宜い位だ。何を歌ふのかよく此島で歌も俚歌ではない、文句は薩張分らぬが、如何にも深い思ひがあるらしく、誰かをさして訴ふるらしく銀の樣な聲をあげては延ばし、延ばしては收め誰れ敎ふるともない節奏自然

妙に入つて、吾ながら吾聲に聞きほれてトンと夫れで自から慰めて居る樣だ、仕事をするにも歌ふ。遊ぶにも歌ふ。内に居ても外でも歌ふ。が、其尤も好む所は、夕燒の美しい時分、家の前の柳の古株に腰かけて、遙かに筑波の方を眺めながら歌ふのだ。筑波山は幼ない時からお光の友であつた其筈だ、朝起きて顏を洗つて眼をあげると、につこり笑つて、トント「お光坊、おはよう」といはんばかりに此方を向いて居るのは筑波山だ。夕方飯をしまつてまた柳の古株に來て眺めるとトント「お光坊おやすみ、おやすもね」といはぬばかり此方を向いて居る。何處へ居ても眼をあげさへすれば筑波は始終此方を向いて居る。時々は蘆のかげに「居ない〳〵」をするが、少しでも隙があれば「ばあ、お光坊、此處に居たよ」と云はぬばかりに顏を出す。斯樣に小供の時から始終見馴れて居るので、お光の心には筑波が生きて居るやうに思はれて、幼ない時から筑波を見ては「あらお山が紫の着物着た、そら淺黄の着物きた、あら白い衣物着た、あれ幕の中に入つてしまつた」などゝいふ。冬になつて骨あらはる瘠せて見へると「あらお山が寒そうな」といふ。雪げに見へなくなると、お光は終日悵然として居る。年とる程親しみが深ふなつて、見れば見る程山はいよ〳〵いきて見へる。心に悲しひ思があつて、柳の根株に腰かけてつく〳〵と見て居ると、お光の眼には山が段々近ふなつて微笑むで小手招きするやうに思はれる「お光坊何を案じて居るの、何を考へて居るの、眞正のお父さんお母さんに逢ひたいの、何が悲しひの、お泣きでないよ、わたしたちが見て居る」よといひ顏にちつと此方を眺めて居る、見

れば見るほど嬉しく悲しく、戀しく、なつかしく、霞が浦の水の面をさら／＼と走つてお山に抱きつきたいとお光は思つて飛ぶ鳥の翼を羨むで居ると、「お案じでないよ、今にね、わたし達の傍に來られる、それまでは辛抱して御出で」と慰め顔に此方を眺める。眺め／＼て日は入つて戀しい思の筑波も黃昏の奧に入つてしまつても猶立たないで「お光チョウ、日がくれたに何をしてるヨウ、ヨウ、早ふ來う」とかしましく呼ぶ養母の聲が聞ゆるまでは眺め入つて居る實にお光の眼には、男躰女躰二つ並んで水と空の間にゆつたりと立つた筑波が、宛ながらに人のやうで、またさらに二親のやうに思はれて、其のゆつたりとしてやさしく大きく氣高く淸い姿がもうなつかしく／＼て、其前に歌ふ時は、丁度父母の膝に突伏して餘所での悲しさを思ひ入れ泣くやうな心地がして歌つて果ては泣いて、それが爲めに心は慰められた。

(五)

霞が浦の秋幾たびか立ちかへつて、漁師の娘お光十四の春を迎へた。木綿縞の古布子垢つきて髮は打かぶつて居るが、生みの父母の標緻も思はれて、名に背かず磨かねど光るほどの美しさ。色雪を欺いて、亂れて居れど髮つゝやかに、紅梅の唇愛らしく、眉細くして、第一眼は玉とも露とも秋の水とも譬へかたなく澄んで美しい。それに少しも引きつくろふ容子もなく、何時も袖なしの着物で古手拭打かぶつて、洗濯をしたり、飯を焚いたり、時々は爺と一所に漁に出かけたり、それに櫓も小腕に似合はぬほど達者に漕ぐ。が、天の生せる麗質で、爺と潮來に行

りた時、女郎屋の亭主某お光を見て「これは大したものだ三百兩の代物だ」島の若者どもが時々其姿を見てチヤホヤするがお光は頓と氣もつかぬらしい。

秋も次第に老けて、獵の好時節となつた。或日お光は背戶に居て、大根を乾して居ると「お光チヨウ／＼」と母の聲がするので庭の方に出て見ると、洋服出立で鐵砲をもつた若い男三四人、それに兎だの鴨だの一ぱい入れた網嚢を舁いだ男が一人ドヤ／＼騷いで立つて居る。「お光チヨウ、爺が居ねへからお客さま方を牛堀までお伴して來う」此は東京あたりの獵組で、後の山を越えて來たので渡を賴むのだと思はれる。手ばしこく舟を用意して薄べり敷いて客をのせ、すぐ漕ぎ出す。客の一人が旅は遠慮もなく一人のコートの裾を牽きお光を顋で指し「中々美人だねヱ、此處らにや惜しいもんぢやないかと云ふ。一同に顏見られるのを五月蠅さうにお光は顏をそむけて漕ぎながら、時々見るともなく眼を側てゝ見ると、たちまち眼についた者がある。何樣此は一行の主人とでもいひさうな、たしかに華族の若殿樣だ。年頃は二十四五、眉濃く眼がきりゝとして色白の美男子だ。淺黃天鵞絨の鳥打帽子を被つて、卵色薄羅紗の獵裝束を着て、彈帶をきりゝとしめて薄皮の行縢をはめて、胡坐をかきながら、パイプを輕くつまんでマニラを吹いて居る。うつかり見とれて、居ると、其殿樣がふつと此方を向いたので、お光は狼狽へて此方へ向いて、櫓を押す拍子に、俯むいた顏が水に映つたのを見ると亂髮の姿が見えたので、サツト顏を赤める。水の影も顏を赤める。フツト氣ついて片手は櫓を押しな

がら片手は鬢をなでた。客はがや／＼騷いで居る。吾事ではあるまいかと耳を傾けて見ると何左樣でもないが何か胸騷ぎがして人に聞こへはしまいかと思ふやうに動悸がうつ。兎角して牛堀について一行はドヤ／＼上つて行つた。美人御苦勞だつたね、此は少しだが簪でも買いなさい」と家從でもあるらしい一人が紙に幾干か捻つて渡したのを受取つたまゝ、お光は何か本意なさそうに跡見送つてホツト溜息ついて頓て棹を返へそうとすると、舟の中に白いものが落ちて居る。拾つて見れば白絹のハンクチで緣を紫で縫つたものだ。お光は何思つたかそつと頰を摩でゝ見て、懷にしまつた。

「婆、光あドゥーだんべい、變だのう」、此れは右の事があつて十四五日してから萬作が嚊に話した言だ。何さま變だ。昔しから妙な兒であつたが、近來は殊に變だ。何時となく歌も歌はなくなつた。山も眺めなくなつた。仕事はする。が、氣が入らぬやうす、始終溜息ばかりついて居る。それに今迄に違つて、髮も氣にする。水鑑も見る。兩親に對しては前よりも一入言はぬ。何處をあてともなく茫然として溜息をつく。好人の萬作も年寄つては愚痴ッぽく、また邪氣もちつとは出てるかして光の阿魔め、實の親が戀しいので己等を疎略にするのぢやあるめへかと思へたと見へ、時々は今迄になく叱つたりすることもあるが、お光は唯默つて聽いて、一言もあらかはぬので、萬作の方から氣の毒になつてやめて仕舞ふ。光にかぎつて其樣な事はありやしねいよ」、是は婆が萬作を宥める言だ。

左右する内、二三ヶ月立つて、お光十五の二月‖即ち去年の二月だ‖となつた。お光は爺と舟に乘つて加藤津に行つてそれから潮來に寄つて要を達して歸りかゝつて居ると、隣に人待顔に立派な毛氈敷いて烟草盆茶盆まで揃へた舟があつて、頓て一人の男が鐵砲三四挺一所にかつゝでやつて來たが其跡からドヤ〱人の足音して男女づれが大勢やつて來た。舟の方へ下りて來ると莚と酒の臭がして、眞先に女しかも女郎の肩に手をかけてぐでん〱に醉つて赤い眼をとろ〱させて、千鳥足に下りて來るのを見ると、此は驚いた、去の秋の頃吾舟に乘せたことのあるあの美男子の若殿様だ。其若殿様が正躰なく醉つにて、舟のるといきなり大の字に倒れてしまふ。お光ははつと驚いて、如何にも不思議相に、それから哀しそうに、無念そうに眺めて居たが爺を催促して、跡の騒ぎや女郎などの「ドゥぞまたオホ、、、、」など蓮葉ないやらしひ笑聲を聞き捨てゝ舟を出してしまつた。「何だよ光、何してるのだ。其白いものあ。ウン、ハンケチか。何する」。お光は答へない。默つてしまつた。

其日歸つてから幾月ぶり思ひ出したやうにお光の歌ふのをきいて、萬作は「のう媼、お光チヨゥは變な見だのう、久しう歌はねへからドゥしたんべいと思つたら、ヒョックラ歌へ出したのう」と言つた。成程お光は久し振りに歌い出して。また久しぶりに柳の根株に腰をかけた。そして久しぶりに筑波の方を眺めた。すると筑波は「久しう逢はなんだのう光ちやん何様したんだエ、よう歸つてお出だ」と云ひそうに依然ゆつたりとして氣高く清く眺められた。

(六)

お光今迄にもまして人中に出るを厭がり、男などが戯れ言いかけてもふいと側を向いてしまふ。其かはり兩親には今迄にもまして孝行をする。口數はきかないが、それは〱細かに心をつける。生みの親の事は忘れたのであらふか。否々萬作夫婦の前では左もないが、獨り居る時は深く〱思案に沈むことがある。其時は直ぐ歌ふ。如何にも悲しさうに歌ふ。歌ふと泣く。泣くと直ぐ柳の古株に行つて筑波を眺める。やゝしばし眺める。筑波は常にお光の心を慰めた。

萬作夫婦も今日は六十の上越して、段ゝ躰は不自由になつて來るし、分けて萬作は此頃僂麻質で右の腕をいためて時ゝは久しく仕事を休むこともあり、それに不漁が續くやら網を破くやらで活計も段々困難になつて來るので、果ては今迄になく大酒をのみ出して、酔ては罪もないお光を叱り飛ばすこともあるが、お光は一言もあらがはぬ。やつと十五になるならぬの小腕で、鰻をとつたり、網を張つたり、せつせと働いて居る。其上夜るも少し暇さへあると、先生に書いて貰つた手本を出して、習字をする。萬作も時々は叱りとばすものゝ、斯やうにやさしくするのを見ては、めそ〱泣き出してお光を抱きしめ、お光も萬作にすがりつきて何とはなしに親子差向いて泣くこともある。

其内萬作は僂麻質が段々かうじて果ては床につくやうになる。貧はます〱募る。八月の中旬となつた。或日萬作が識人で同じ島の人勘太郎といふ男尋ね來て斯いふ話をした。其は潮

來一の豪家の子息某何時かお光を見染め是非妾に世話し呉れよ、支度金として五十圓外に萬作夫婦には月々十圓と綢一具やらふとの話だ。萬作一々頷き、勘太郎を返して、直ぐお光を呼んで斯々と話して見ると、お光は情なさそうにぢつと爺の顏を見つめて居たが、頭を掉つて外へ出てしまつた。萬作は腹を立てる。勘太郎は三日あげず來て催促する。婆は中に居て萬作には「情無ね事をしなさんな」と諫める。お光には「爺さんもあゝではなかつたが、のうお光チョゥ、あの年でのうお光チョゥ、それにあの病氣でのう、お光チョゥ、氣にかけなさんなよのうお光チョゥ」と慰める。お光は人の見る所でこそ泣きもせぬが、少し暇さへあればすぐ柳の古株に行つて小聲に歌ひながら天外遙かに筑波の双峰を眺めて思ひに沈む。

其內九月となつた。月のはじめから暑いやうな寒いやうないやな天氣であつたが、日を逐ふて空の模樣怪しく、月の中旬に入ると、それは〳〵天の戸一時に破れたかと思ふばかり大雨大風となつて、それからといふものは毎日〳〵降り明し降りくらし、降つて〳〵降りぬく程降りつゞける。「湖の水まさりけり五月雨で」、諸處方々の水はドン〳〵霞が浦に流れ込む。霞が浦の水は段々南に押し出して來る。浮島は其の正面に當るからドゥもたまらぬ。水は萬作が家の戸口を越した。やがて床につかへる。樽を並べて戸板を敷いて居ても、モゥ其の內水はドン〳〵押して來て、家の內では堪え切れぬ。萬作も少しは鹽梅も宜いから强めて起きて、親子三人大骨折して後の山にやう〳〵雨露を凌ぐばかりの假小屋を建て其處に住む。斯樣から

だをつかつたせいか、其晩から萬作が腕は非常に痛み出して、少し熱さへ出て渇を覺ふると見え、頻りに燒酎が飮みたい／＼とくりかへしていふ譫言のやうにいふ。燒酎！燒酎！此水に燒酎！島には到底ない。一里半の水を押切つて麻生まで行かなければない。お光は藁の上に坐つて爺の腕を靜かに摩りながら熱に浮かされて赤みばしつた爺の眼を見、其白髮頭から其皺だらけの額から大粒の汗の湧くを見、其唇のいら／＼乾くを見て居たが、そつと腕を置いて、そこへあつた一升德利をとつて、外へ出た。

雨は已むで、空は星だらけだ。月も出て居る。下の方を見ると、吾家も半ば水に浸つて、繫ひだ舟は背戸の柳の幹の半に浮て居る。手を翳して向ふを見ると、水漫々として飛ぶ鳥の影もなく濁浪渦まいて流れ行くのが月下に見える。麻生の方は眼に見へぬほど沈むで、大海を隔てたやうだ。遙に北の方を眺むれば、常見る霞が浦俄かに浮き上つたやうに水淼々として遙に天腹を浸し、見ふる限りの陸影皆小さく沈むで、唯遙に筑波山の月影に靑く見へるばかりだ。更に南の方を見ると、北利根、横利根、新利根の水一處に落ち合つて、十六島は何處に行つたか影も見えぬ、唯水勢浩々渺々として凄じく南の方に押して行くのが荒海のやうに聞へる。

「婆さん、お光あ何してる」。「オ、ホンに、お光あ何してるだんべい」、飯焚ひて居た嫗はフット氣づいて其まゝ聲を立て「お光チョウ／＼と」呼んだが返事がない。假屋のむしろ戶明けて半分頸を出し見まわしながら「お光チョウ／＼」と叫んで見ても返事がない。俄かに狼狽へて走り出で

下を見まはすと、繋ひであつた舟の影もない。若しやと思つて伸びあがつて手をかざし、月の明にすかし見ると、成程一艘の小舟が荒波を押切つて麻生の方へ向つて居る。耳をすますとゴオ〳〵鳴りどよむ水音の間々にかすかに櫓の音も聞へる。爺さんお光ーお光チョウ、お光チョウイ」のび上つて叫べば、萬作もころげ出てゝ木にすがり泣聲あげて「お光チョウイ、おー光ヨウイ」と叫んで見ても、舟は次第〳〵に陸を離れて果ては櫓の音も聞へぬ。お光チョウイ、内のお光ヨウイ」老夫婦が力の限り根限り叫ぶ聲は徒らに空明に散つてしまつて、あとはたゞ森々たる霞が湘の水渦まいて流れるばかり。

（七）

大水は久しく湛へて終に落ちた。萬作夫婦も假小屋を出て、水餘の家に歸つた。併しお光は歸つて來ない。歸らぬ、歸らぬ、今日までもまだ歸らぬ。萬作夫婦は朝夕涙に暮れて、茶斷ち鹽斷ちして、いつもお光が腰かけた柳の古株にしめなわかけて筑波さまあらふる神さまに願をかけても、一向に歸つて來ぬ。歸て來たのは、唯萬作が見覺えある德利の如何して流れついたか浮島の南端に流れよつたばかりだ。

島の者はさま〳〵に評を凝した。一人が言ふには、お光坊があまり美しひ娘だから湘の水神樣が御嫁に貰はつしやつたのでかなあらふ。他の一人がいふには、いや〳〵お光坊は平生筑波さまと大の中よしであつたから、筑波さまの不便と思つて養いつ子にさつしやつたので

あらふ。

或はさうかも知れぬ。併し此は秘密だ。霞が浦に千日水垢離とつて、筑波さまに百度踏んでも、恐らく此秘密を知ることは出來ない。





少女おなみ

金子春夢

（一）

少女おなみは母の胎内にあつた時から今歳十四歳の秋まで、一種異つた境遇に在る不幸者、母は七月の懐胎の身ながら故あつて父の家から離縁せられて實家に歸つたが、無事におなみを產み落して間もなく、緣あつて他へ嫁き、赤兒は外戚の祖父祖母に育てられた。

祖父祖母の家は、青山北町三丁目に、越前屋といふ酒屋をして、また此町が和泉町であつた頃から兎に角名が知られて、町內で財產家の數にも入り、小僧二人に若者一人つかひ、祖母は三年前亡くなつたが、祖父は隱居して世事にはたづさわらない、店の商買は姉娘の養子、今では其苗字を名乘る佐野太兵衛が車輪となつて立ち働き、店は益々繁昌し財產は益々殖える。

養子は最早二十幾年前、他家から來たといふではなく、此家で永らく奉行人につかつて居たが商買に精が出で誠に賴母しい性質がある處を見込んで、遠い越後產ではあるが、直接に本人と相談して姉娘の婿とした、それから三人の小兒は生れ、總領の孫娘はおなみより一つ長年で、其下に十一の男の子と九歲の娘の兒まで出來て、隱居は別に不自由もない身に、死後の

がら片手は鬢をなでた。客はがや〳〵騷いで居る。吾事ではあるまいかと耳を傾けて見ると何左樣でもないが何か胸騷ぎがして人に聞こへはしまいかと思ふやうに動悸がうつ。兎角して牛堀について一行はドヤ〳〵上つて行つた。美人御苦勞だつたね、此は少しだが簪でも買いなさい」と家從でもあるらしい一人が紙に幾干か捻つて渡したのを受取つたまゝ、お光は何か本意なさそうに跡見送つてホッと溜息ついて頓て棹を返へそうとすると、舟の中に白いものが落ちて居る。拾つて見れば白絹のハンケチで緣を紫で縫つたものだ。お光は何思つたかそつと頰を摩でゝ見て、懷にしまつた。

「婆、光あドゥーだんべい、變だのう」、此れは右の事があつて十四五日してから萬作が嬶に話した言だ。何さま變だ。昔しから妙な兒であつたが、近來は殊に變だ。何時となく歌も歌はなくなつた。山も眺めなくなつた。仕事はする。が、氣が入らぬやうす、始終溜息ばかりついて居る。それに今迄に違つて、髮も氣にする。水鑑も見る。兩親に對しては前よりも一入言はぬ。何處をあてともなく茫然として溜息をつく。好人の萬作も年寄つては愚痴ッぽく、また邪氣もちつとは出てるかして光の阿魔め、實の親が戀しいので己等を疎略にするのぢやあるめへかと思へたと見へ、時々は今迄になく叱つたりすることもあるが、お光は唯默つて聽いて、一言もあらかはぬので、萬作の方から氣の毒になつてやめて仕舞ふ。光にかぎつて其樣な事はありやしねへよ、是は婆が萬作を宥める言だ。

だ於する内、二三ヶ月立りて、お光十五の二月―即ち去年の二月だ―となりた、お光は爺と舟
に乘りて加藤津に行つてそれから潮來に寄つて妻を達して歸りかゝつて居ると、隣に入舟
顏に立派な毛氈敷いて烟草盆茶盃まで揃へた舟があつて、頓て一人の男が鰻竜三四艇一斤
にわりかぞやりて來たが其跡からドナ〳〵人の足音して男女づれが大勢やりて來た、舟の
方へ下りて來ると拙を酒の臭がして、眞先に女しかも女郎の肩に手をかけてそせふ〳〵に
醉つて赤い眼をぎろ〳〵させて千鳥足に下りて來るのを見ると、

（六）

お光今迄にもまして人中に出るを厭がり、男などが戯れ言いかけてもふいと側を向いてしまふ。其かはり兩親には今迄にもまして孝行をする。口數はきかないが、それは〳〵細かに心をつける。生みの親の事は忘れたのであらふか。否々萬作夫婦の前では左もないが、獨り居る時は深く〳〵思案に沈むとがある。其時は直ぐ歌ふ。如何にも悲しさうに歌ふ。歌ふと泣く。泣くと直ぐ柳の古株に行つて筑波を眺める。やゝしばし眺める。筑波は常にお光の心を慰めた。

萬作夫婦も今日は六十の上越して、段々躰は不自由になつて來るし、分けて萬作は此頃僂麻質で右の腕をいためて時々は久しく仕事を休むこともあり、それに不漁が續くやら網を破くやらで活計も段々困難になつて來るので、果ては今迄になく大酒をのみ出して、醉ては罪もないお光を叱り飛ばすこともあるが、お光は一言もあらがはぬ。やつと十五になるならぬの小腕で、鰻をとつたり、網を張つたり、せつせと働いて居る。其上夜るも少し暇さへあると、先生に書いて貰つた手本を出して、習字をする。萬作も時々は叱りとばすものゝ、斯やうにやさしくするのを見ては、めそ〳〵泣き出してお光を抱きしめ、お光も萬作にすがりつきて何とはなしに親子差向いて泣くこともある。

其内萬作は僂麻質が段々かうじて果ては床につくやうになる。貧はます〳〵募る。八月の中旬となつた。或日萬作が識人で同じ島の人勘太郎といふ男尋ね來て斯いふ話をした。其は潮

來一の豪家の子息某何時かお光を見染め是非妾に世話し呉れよ、支度金として五十圓外に萬作夫婦には月々十圓と絹一具やらふとの話だ。萬作一々頷き、勘太郎を返して、直ぐお光を呼んで斯々と話して見ると、お光は情なさそうにぢつと爺の顏を見つめて居たが、頭を掉つて外へ出てしまつた。萬作は腹を立てる。勘太郎は三日あげず來て催促する。婆は中に居て萬作には「情無ね事をしなさんな」と諫める。お光には「爺さんもあゝではなかつたが、のうお光チヨゥ、あの年でのうお光チヨゥ、それにあの病氣でのう、お光チヨゥ、氣にかけなさんなよのうお光チヨゥ」と慰める。お光は人の見る所でこそ泣きもせぬが、少し暇さへあればすぐ柳の古株に行つて小聲に歌ひながら天外遙かに筑波の双峰を眺めて思ひに沈む。

其内九月となつた。月のはじめから暑いやうな寒いやうないやな天氣であつたが、日を逐ふて空の模樣怪しく、月の中旬に入ると、それは〳〵天の戸一時に破れたかと思ふばかり大雨大風となつて、それからといふものは毎日〳〵降り明し降りくらし、降つて〳〵降りぬく程降りつゞける。「湖の水まさりけり五月雨で」、諸處方々の水はドン〳〵霞が浦に流れ込む。霞が浦の水は段々南に押し出して來る。浮島は其の正面に當るからドゥもたまらぬ。水は萬作が家の戸口を越した。やがて床につかへる。榻を並べて戸板を敷いて居ても、モゥ其の内水はドン〳〵押して來て、家の内では堪え切れぬ。萬作も少しは鹽梅も宜いから強めて起きて、親子三人大骨折して後の山にやう〳〵雨露を凌ぐばかりの假小屋を建て其處に住む。斯樣から

だをつかつたせいか、其晩から萬作が腕は非常に痛み出して、少し熱さへ出て渇を覺ふると見え、頻りに燒酎が飲みたい〳〵とくりかへしていふ譫言のやうにいふ。燒酎！此水に燒酎！島には到底ない。一里半の水を押切つて麻生まで行かなければない。お光は藁の上に坐つて、爺の腕を靜かに摩りながら熱に浮かされて赤みばしつた爺の眼を見、其白髮頭から其皺だらけの額から大粒の汗の湧くを見、其唇のいら〳〵乾くを見て居たが、そつと腕を置いて、そこへあつた一升德利をとつて、外へ出た。

雨は已むで、空は星だらけだ。月も出て居る。下の方を見ると、吾家も半ば水に浸つて、繋ひだ舟は背戶の柳の幹の半に浮て居る。手を翳して向ふを見ると、水漫々として飛ぶ鳥の影もなく濁浪渦まいて流れ行くのが月下に見える。麻生の方は眼に見へぬほど沈むで、大海を隔てたやうだ。遙に北の方を眺むれば、常見る霞が浦俄かに浮き上つたやうに水淼々として遙に天腹を浸し、見ふる限りの陸影皆小さく沈むで、唯遙に筑波山の月影に靑く見へるばかりだ。更に南の方を見ると、北利根、横利根、新利根の水一處に落ち合つて、十六島は何處に行つたか影も見えぬ、唯水勢浩々渺々として凄じく南の方に押して行くのが荒海のやうに聞へる。

「婆さん、お光お何してる」「オ、ホンに、お光お何してるだんべい」、飯焚ひて居た媼はフット氣づいて其まゝ聲を立て「お光チョウ〳〵」と呼んだが返事がない。假屋のむしろ戶明けて半分頸を出し見まわしながら「お光チョウ〳〵」と叫んで見ても返事がない。俄かに狼狽へて走り出で

下を見まはすと、繋ひであつた舟の影もない。若しやと思つて伸びあがつて手をかざし、月の明にすかし見ると、成程一艘の小舟が荒波を押切つて麻生の方へ向つて居る。耳をすますとゴオ〳〵鳴りどよむ水音の間々にかすかに櫓の音も聞へる。爺さんお光ーお光チヨウ、お光チヨウイ」のび上つて叫べば、萬作もころげ出てゝ木にすがり泣聲あげて「お光チヨウイ、おー光ヨウイ」と叫んで見ても、舟は次第〳〵に陸を離れて果ては櫓の音も聞へぬ。お光チヨウイ、内のお光ヨゥイ」老夫婦が力の限り根限り叫ぶ聲は徒らに空明に散つてしまつて、あとはたゝ森々たる霞が浦の水渦まいて流れるばかり。

（七）

大水は久しく湛へて終に落ちた。萬作夫婦も假小屋を出て、水餘の家に歸つた。併しお光は歸つて來ない。歸らぬ、歸らぬ、今日までもまだ歸らぬ。萬作夫婦は朝夕涙に暮れて、茶斷ち鹽斷して、いつもお光が腰かけた柳の古株にしめなわかけて筑波さまあらふる神さまに願をかけても、一向に歸つて來ぬ。歸て來たのは、唯萬作が見覺えある德利の如何して流れついたか浮島の南端に流れよつたばかりだ。

島の者はさま〴〵に評を凝した。一人が言ふには、お光坊があまり美しひ娘だから浦の水神様が御嫁に貰はつしやつたのでかなあらふ。他の一人がいふには、いや〳〵お光坊は平生筑波さまと大の中よしであつたから、筑波さまの不便と思つて襲いつ子にさつしやつたので

あらふ。

或はさうかも知れぬ。併し此は秘密だ。霞が浦に千日水垢離とつて、筑波さまに百度踏んでも、

恐らく此秘密を知ることは出來ない。



少女おなみ

（一）

金子春夢



少女おなみは母の胎内にあつた時から今歳十四歳の秋まで、一種異つた境遇に在る不幸者、母は七月の懐胎の身ながら故あつて父の家から離縁せられて實家に歸つたが、無事におなみを産み落して間もなく、緣あつて他へ嫁き、赤兒は外戚の祖父祖母に育てられた。

祖父祖母の家は、青山北町三丁目に、越前屋といふ酒屋をして、まだ此町が和泉町であつた頃から兎に角名が知られて、町内で財産家の數にも入り、小僧二人に若者一人つかひ、祖母は三年前亡くなつたが、祖父は隱居して世事にはたづさわらない、店の商買は姉娘の養子、今では其苗字を名乘る佐野太兵衛が車輪となつて立ち働き、店は益々繁昌し財産は益々殖える。

養子は最早二十幾年前、他家から來たといふではなく、此家で永らく奉行人につかつて居たが商買に精が出で誠に賴母しい性質がある處を見込んで、遠い越後産ではあるが、直接に本人と相談して姉娘の婿とした、それから三人の小兒は生れ、總領の孫娘はおなみより一つ長年で、其下に十一の男の子と九歳の娘の兒まで出來て、隱居は別に不自由もない身に、死後の

安心もついて居ることとゆゑ、念佛三昧に他念がない、青山善光寺がつい近所であるから、これへ參詣をするのと、孫娘の手を引いて四季折々遊樂に出かくるのが、老後の樂事にして居る。隱居は何不自由もないけれどもおなみの身の上のみが氣にかゝつて人知れず老眼に泪を浮ぶることもある、姉娘の小兒等は花のやうに榮ゆれど、妹娘の兒おなみは父もあり、母もありながら、稚兒の時から暖い父母の添寢の夢も結んだこともない、勿論おなみに食ふことにも、着ることにも事缺かしはせぬ、他の孫と同じやうに學校へ通はしてあるが、同じ孫で、養子太兵衛のためには義理ある姪、姉娘のためには現在の姪でありながら、おなみの肩身が狹いのは、本人よりも隱居の身に深く感じられ、對に晴の衣物をこしらへてやるも、何となく養子と我姉娘に對して氣がひける家にて小兒喧嘩をしても、いつもおなみの方が理が惡くなるゆゑ、おなみは自然と遊ぶ内にも從弟に一目置くやうになる、祖父祖母はこれを見るのが氣の毒で耐らないが、置くものでないおなみを此家に置く弱點があれば、默つていつも他の孫共に花を持たする、祖母は平生から戀ひ慕ふ西方淨土へ旅行したれば、今は殘る祖父一人で孤兒のやうなおなみの世話をして居る。

おなみは小兒の事で萬につけ祖父ほどに心配をする事はないけれども從弟に數歩を讓つて、たゞ何となくいぢけてをれど、祖父祖母養育の故か、但しは性質なのか、大樣な所がある、十二三になつてからも大樣な所があつて、萬事に氣がつかない仕打があるから、伯母からも義

理の叔父から酷く叱られて、それが家内の風波の種となつたことが幾度か數知れない、おなみは從弟のやうに父と母があるのを羨まぬ、おなみは父母と賴むは、たゞ〳〵祖父と祖母である、實の父は目黒の火藥庫の側の廣尾に住んで居れど、生れて一度も遇つたこともない、母は世田ケ谷の農家に居れど、これは祖父に連れられ一年に三四度は往くことがあるが、母からも、おなみからも、母子の情が薄いので、此兒も自から進んで母の家へ行きたくない、おなみが杖柱とたよるは、もう祖父一人で、十四歳になつたが、何點か不足な所があると見え、人並に肥りきれず、花車といふよりもひねこけて、小柄といふよりも瘦躰で、外見は十一二ぐらゐ、だが容貌は尋常人に優れて目元の涼しさ、口元の可愛らしさ、今に町内の評判娘となるらしい。

(二)

隱居重兵衛は相應の貯金あり、それは銀行へ預けてあるではなく、遞信省にでもなく、人の知れぬやうに秘し置き、おなみ生長して嫁に行く時、持參金にやるとの評判、近所から起つてもう誰彼に知れ渡るやうになつた。

貯金があるか、ないか、太兵衛も姉娘も知らない、それとなしに隱居に尋ねて見ても貯蓄はないといふことなれど、折々孫四人に物品や着物まで買つてやる隱居の懷中は、何樣一通ではない、と養子の太兵衛は、疾に眼をつけ、貯蓄の有無は兎も角假にも父子となりて一家に居な

がら、秘し立をする隱居の氣心が面白からぬ、と酷く感情を惡くしてから、これまでは左程ではなかつたが、おなみが家に居るは餘計な事、出て行けがしにあしらふ、それを見聞く隱居は心痛で心痛で老の心を傷むれど、どうすることもならぬ、おなみを此家から出して了へば、家內波風なけれど、今となつて何處へおなみを遣る場所もないから、隱居は途方に暮れて本人は小兒のこと、誰にも相談をするものもない。

實の父大澤和太郎は、おなみの母を離緣してから十四年間に、五人の妻を更め、四十に近い年齡なれど、まだ一人の子もなく最後の妻と、夫婦生活で、自分は火藥庫に輕い勤務をして、其近所の少さな借家に住んでをる。

これまでおなみを引取らうと言つたこともない實父和太郎、唐突に人を越前屋へ派り、おなみ永々お世話樣であつたが、今度是非に引取りたいと申し込んだ、これは和太郎の家が不如意から、おなみを引取らば、世間の噂の通り、必らず隱居の貯蓄の持參金と衣服諸道具がついてくるだらうと計つてしたことである。

この申込に太兵衛は酷く喜んだ、娘の子、此前途、種々の費用は見えてある、こゝでおなみを出して了へば、輕く惡魔拂が出來て、願つたり、叶つたり、先方の意は持參金にあることは知れてあるが、僅少の金物を持たせてやれば、それで濟むこと、さうすれば隱居の貯蓄は此方の所有と、早くも算盤を立て、隱居重兵衛に相談すれば、胴欲非道、義理知らず、道理知らずの、和太郎に

おなみを渡すは、他人へ呉れてやるかた、まだしも安心と、隱居は甚だ氣が進まねど、太兵衛が實父へ渡す方に氣乘があると姉娘の勸むるに、飽くまで不承知を立て通しもされず、それでは宜しく計ひくれとて、おなみの處分を養子に一任した。

委細承知の旨と以來はおなみの身には一切關係なしとの條件を以つて先方に知らせ、愈々實父はおなみを引取るやうになつた、大澤和太郎は我子を引取るについては、衣服道具も相應、持參金は百圓以下ではあるまいとの希望を持つてゐたが、おなみは簞笥一荷と葛籠一個の外、二十圓を持參して來たのみ、其二十圓といふは、隱居が養子太兵衛からも世間からも、大した貯蓄があると噂せられた手箱の底をはたいて出したもの、始めて太兵衛の疑心も漸く解けかゝつただけ、餘りの少額に、實父和太郎案の相違に驚いたが、物品が尠いとて、今更となつて、娘を引取らぬと言はれた義理にもあらず、據なくおなみを、我家に引き取つた。

妙齢まで我家に居て今から嫁に行くは、誰しも何となく厭な心地がするものなれど、それは先には望も樂もある乙女の情、これは十四年間、父にも母にも優る祖父に別るゝおなみ、行く先は實の父なれど、いざ住み馴れた越前屋の門を出る際は、今でもおなみ自身覺えてをる五歳の時或る農家へ此娘を養女にやる約束になり、先方から男が連れに來たれば、庭で跣足で遊んで居たおなみは、泥のついた足のまゝに祖母の脊に飛びつき、厭だ厭だと泣いて泣いて到頭遣ることが中止になつた、それにも彌增して悲しく、昨夜から泣き腫した眼を袖に押し

あて、祖父の顔さへ見上げ得なかつた。

（三）

如何なる理由のあつて實父の家へ行く事か、叔父の太兵衛から、一人前とならぬ其内は、越前屋の閾を跨ぐことはならぬ、と嚴しく申し渡され、祖父重兵衛からも今暫の間は我家へはどうぞ來ないやうにしてくれと暮々も言はれても、どんな譯のあつての事か、小兒心のおなみには分らねど、尚更他所へ行くのが厭になつて、悲しくなつて、出立の前夜は祖父と一つ寢床に入つて名殘を惜んだ。

迎に來た男に連れられて廣尾へ行つて、實父和太郎と始めて遇つて見ると、これまで他人のやうにして居たが、それは少く都合のあつての事、お前の實家は此家であるから遠慮をせずに居てくれと初對面で半分は我子に詫びるやうに言ふ實父和太郎、顔の色の生白い、身體が弱さうに見えて如何にも柔和であるらしい、おなみの爲には義理の母、和太郎の妻おきんも物を考へ込むといふやうなちと內氣らしい矢張生白い顔で和太郎よりも尚又柔和であるらしい、外に誰もない、下女もない眞の對向の夫婦生活。

おなみが行つた當日から父もおきんも優しくしてくれて、叔母太兵衛が恐しい眼玉もなけれど、今迄大勢の家內に居た事ゆゑ何だか急に寂しくなつたも無理もない、青山の通街と言へば隨分人往來も多く町も繁昌するに引きかへ、此家は昔は畠であつたのが、火藥庫が出來

て以來、これに勤むる便利のためにぽつ〳〵人家が建てられたので、夜間は一入寂しく小川の流るゝ音と狐の泣聲が聞ゆるのがおなみの耳に珍らしい外に、汽車が家の近くをば通行するのが目新しく、轟々の響を聞いて最初の間はあはてゝ障子を開けたこともあつたが、それも五日六日と經つほどに珍らしくなくなつた。

父和太郎日曜大祭日の外は、朝九時より暮五時まで火藥庫に勤め、月に二回宿直はあれど、夜間は宅へ歸るので、別に酷く寂しいといふほどでもないが、晝間は義母のおきんと對向、義母が裁縫をする間は、おなみも別段家の仕事もなければ、傍に座つて雜巾でも拭ふ、父も優しいが、義母も優しい父が歸ればおなみ、おなみと他人の見る目も羨しいほど優しく詞を懸け、おきんは默然した性質で詞數は尠いが、亭主の不在には、おなみの前途利益になりさうな話をして聞かせる、それでおなみは詞數の多い父よりも詞數の尠いおきんの方が段々親くなつて、漸次に此家に居るのが樂しくなつて來た。

或日おきんはおなみに向ひ、此家に居るなら油斷をしてはいけない、阿父さんはあんな優しい風をしてゐ、なか〳〵恐い人である、お前が來てから優しい詞をかけるのは欺すので、お前を金錢にする所存なので、二三日前聞いても恐ろしい目黑不動前の淫賣料理人に奉行に出す樣子だから、私は內々此事表の家主の爺さんにどうぞそんな事にならないやうに賴んで置いたから大丈夫だけれど、決してそんな所に行かないやうに、お前も此家へ居たらどんな

事にならうもしれない、寧東京へでも出て手堅い家に奉行したが得策、私も近い内此家から暇を貰ふ所存、とおきんは眼に一ぱい涙を浮べてこれだけ言つてあとは默つて了つた。

おなみは義母の話を聞いてぎよつとしたが、まさかあんなに優しい阿父さんがそんな事もあるまいと思つても、亦義母の言ふことも虚言とも思はれないで、其時は其まゝ聞き流しにして居た。

果して實父和太郎はおきんの話の通り、無殘にもまだ人心もつかぬおなみをば、明日目黒の淫賣料理屋へ、少し普通の奉行給銀よりも割の好いゆゑ、ちよと淫賣見習といつたやうなものになさうと、おなみを呼んで、いろ／＼欺し賺しする少女を承知させやうとするは、和太郎が本性が追々現れたので、おなみを引取る第一の目的が持參金で、第二の目的がおなみの身の處分で、此事は始から此男の胸中に疊んであつた目算である。

尤も和太郎は僅かな月給であるから、ほんの夫婦生計もやつとの事、おなみを家に養ふ餘地がないから、孰れにせよ、此兒は遊ばして置く譯にもいかないが、まだ一月も經たぬ内に、左樣な恐しい塲所に少女を沈むるとは、二年越連れ添ふて、和太郎の平生の氣質を能く知つて居るおきんも意外である。

淫賣料理屋とはどんな塲所か、能くも知らないが、何しろ恐しい所だと思つたおなみは、義母から其話を聞いた時は、まさかと半分は安心をして居たのが、眞實であつたから、敎へられた

通り厭だと返事をする事も興奮に取りまぎれて何事も得言はず、父の顔を凝視めて、そして俯向いて了つた。

其夜竊におきん、愈々明日おなみを目黒不動へ連れて行く事を家主の彦右衛門へ告げた、彦右衛門は其夜遅くなつてから裏の家を敲き起して和太郎に遇ひ、おなみを不動へ遣るのは本人の利益になると思ふか、娘を奉行に出すなら堅氣の家に住み込ましたがいゝのだ、と口を極めて諫めたので和太郎は脆くも老爺の詞に挫けた、それには此方に弱點があるといふは、和太郎世間並に書も讀み字も書けど、三月前から家賃を滯らして、而も時々利息のない金を借り倒すやうな、無學文盲のものにも劣つた不義理な男で、是迄家主へ厄介をかけたことは數知れない。

それのみならず、和太郎大の好色で、懶惰ゆゑこれが瑕瑾で出世の道が開けずいつまでも意氣地がない、今こそ仕方なさに官の勤務に身を縛られをれど、餘暇には其道に賢く、近所の菓子屋の二階を借りてをる女と通じて、今の女房のおきんをば追ひ出さうと、女房の欠點を發見しそれを口實に實行しやうと考へ居る所であつた。

おなみは目黒へ行く沙汰は中止となり、それからおきんの周旋で某といふ日本橋の木綿問屋に奉行することゝなつたが、おきんが其夜の事を家主に知らせたのが、和太郎の耳へ入り、亭主の爲す事を妨げたとて、蹈打擲の上、離縁をして直ぐに何處の馬の骨やら、首に二個所も

凹んだ腫物らしい傷痕のある女を引入れた。

(四)

越前屋から此家へ來る時、今度引取らるゝ家は兎に角實家で、大澤和太郎は實の父であるのだから、心一ぱいに孝行を盡くして、決して粗忽にしてはならない、邪慳の人には相違ない義母もそれに連れさうやうな女だから大概は知れてあるが、何事も阿父さん、阿母さんと言つて、親の言葉に從つて從順しくしてさへ居れば、いかな親でも心の角の折れるやうになるものだ、と繰り返し繰り返し祖父からおなみは教訓を受けたので、はい〳〵と兩親の言葉に從つて居た。

若し家主の邪魔がなかつたなら、おなみは父の言葉に從つて目黒の淫賣料理屋へ行くかも知れなかつた、何故ならば、いくら厭だと言つても、青山へ逃げて歸る譯には行かない、どんな事があつても歸ることはならぬぞよと言つた祖父の前は兎も角義理の叔父太兵衛へ對して出來かぬる、此義理は少女おなみの心に判然してをる。

日本橋の木綿問屋へ奉行に住み込むといふ事、將來の利益になる事だと、優しい言葉の義母のおきんから勸められて、小娘の心に深く考ゆる分別もなく直ぐに承知して、愈〻其家の兒守奉行に住み込んだ。

住み込んでから十日程も經つておなみぞつと枕に就いた、熱も想應に發して食は勿論進ま

ないから、何も食はずに臺所の次の間へ寢込んで了つた、其家の内儀は、食はずに居れば寢て居らるゝと思ふ下女根情の可笑さ、惰性な奉行人はみなこれだよ、と笑つて居たが、熱氣追々進み、身躰も次第に衰弱に赴く景色なので、此家の出入の醫者を呼んで、おなみの病氣を診て貰ふと、これは由々しき病症にて終には一命にも及ぶ恐るべき胃癌の發生期なりと。

おなみを口入したは、元此家と緣ある和太郎の女房おきんなれば、早速同人へ此旨を知らせ、急に出て來るやうにと、書面二通に及びたれど、おきんは已に離緣せられた後で、和太郎は其書面を受け取つて病氣の事を承知しても、知らぬ顏で娘を引取に出かくる處ではない、端書一枚の返事もしない。

餘りの仕打に木綿問屋も呆れ返り、此娘は病氣中で可愛想だが、一人で送りかへすより外に仕方なし、と腕車に乘せて返して了つた。

病身のおなみ車に搖られて苦痛を增し、やう／＼の事で我家へ歸れば、其日は十一月第三の日曜日、父和太郎鐵槌を手にして火鉢の破損を直して居た、おなみが庭口から力のない有樣で上つたのを見て胡亂氣に、おなみ手前何しに歸つた、と娘が病氣なのは知つて居る父の挨拶に酷い人だとは少女心に思つたが、阿父さん、私、身躰が惡くて暇を貰らつて歸りました、とおなみ柔順しく手をついた。

さうか、手前が我儘だから、先方から出されたのだらう、勝手にしろ、と和太郎鐵槌を投げ捨て

次の間へ行つて了つた。

おなみ日本橋から此地までの間、腕車の上で苦しいにも堪えられぬほど苦しく、家へ着いたら早速寝床を暢べて貰はんとやつと我慢をした甲斐もなく、父の不機嫌に悄々起ち上つて、ふと箪笥の上を見ると、これまで見慣れぬ新しい鏡臺がある、さては優しい阿母さんは、過日の話の通り此家を出てしまつたか、どうしてそんな事になつたのか、あとの阿母さんはどんな人か、と何だか腹も立つてまだ十四でも種々考え込んで茫然立つて居ると、次の間からおなみ〳〵と父の聲がかゝつた。

はいと言つておなみ恐る〳〵唐紙を明けて三疊の間へ入ると、父は先刻よりも言葉柔に、病氣なら仕方がない、緩り此家で養生をしろ、と言つて側につんと澄した顔で座つて居る三十二三の婦人の方へ顔を向けて、おきんは不都合があつて追ひ出した、これから手前の母は、このおみのだ、能く頼んだが好いぞ、と差圖をされておなみ兩手をついて、これからどうぞお頼み申しますと詞少に挨拶をした。

顔色も悪い早く寝たが好い、と今母子の言誓をしたおみのの發言で、おなみは其間を病室として床に就いた、和太郎夫婦は、おなみの箪笥の座つてある六疊の間へ長火鉢を移した。

おみのといふ女は首の周圍に二個所の傷こそあれ、此邊の田舎には珍らしい別品で、もう盛を過ぎた年増だが、四五年前まで赤坂で下等藝妓をして居ただけ、垢拔がしてちよつと目に

つく客觀、それゆゑ菓子屋の二階に獨身で居た時分は、隨分此邊の若者を惱した、大澤和太郎も惱されて一人、而も一番熱心であつた末が、柔順しい女房を叩き出して此女を宿の妻とした、併し此村の乾物屋の息子とまだ乳操り合つてをることは、鼻下長の和太郎には分らないから、毎日留守をさせて安心して役所の事務を執つて何も疑はない。

おなみが病氣で歸つてから、おみの息子と密會が仕難くなつて、おなみの我家に居るのが、邪魔で、煙たくて、うるさくてならない、おなみは三疊の間に寢込んで、起きて出しやばるといふこともなく、まだ男女の情に就いては理解力のないおなみ、若い男が來ておみのと何を話し、何を爲すか、一切無頓着であるが、おみのの方から見ると中々油斷はならない、小躰でも十四の女、横に切れた兩の眼があるからは、若し此事亭主の耳へ入らんとも限らず、とおなみが邪魔だと思ふと、寧我家に居るのが憎らしくなつて來た。

（五）

演劇でする石川五右衛門の女房おたきは可愛さの餘り五郎一をば繼子苛して家より追ひ出さんとした、それとは反對で、和太郎の女房おみのは、己が不義の淫慾を恣にせんと、おなみを追ひ出さうと種々と手段を廻らす。

おなみが歸つた當座こそ、土鍋で粥も炊いて枕頭へ持つて、尋常の看病もして見たが、五日六日と經つに從ひ、もう食事の面倒を見てやらぬのみか怫々不平を言ふおなみは病人でも生

命は繋がねばならぬ、而も一滴一粒の藥劑さへ與えず食物をも斷しやうとする。

こんな風に義母の氣色がむづかしいので、おなみは遠慮して用を頼みかねて、果は寢床から這ひ出で、臺所へ行つて、米櫃から病人殊に胃病に大毒な堅飯を、お菜なしに喰つて、火鉢は義母の室にあるから、水瓶から冷水を呑んで辛ふじて饑渴を凌ぐ。

父が歸つて來ても不在の間の始末を告ぐる譯にもいかぬのに、却つておみの口を極めて、おなみは病氣でも何でもない惰眠であること不貞寢であること、臺所で盜食をすること、此頃頻りに小遣錢の紛失することなど種々と並べ立てば其聲は唐紙一重越におなみにも聞える、父は妻のおみのから聞くたび、おなみの病室に來て、右の箇條を詰問して、病人が何の分疏もなく泣き沈むのを引ずり起して拳の雨を降らすこと、二度や三度でない、おなみはたゞひい〳〵と泣き叫ぶのみである。

辛い悲しい目に遇ふのが、殆ど毎日のやうだから、娘は懼々してゐる、寢て居るのが義母の氣に障はるのだらう、と起きんとしても病氣の故でなか〳〵起き得られない、臺所で一人で御飯を喫べるのが不可のだらう、面倒でも矢張阿母さんに厄介になつたが好いのだらう、と阿母さん〳〵と聲をかけてもおみのは次の間に居ながら、何とも返事をせぬので、つい或一日は晩まで一粒の食事もしなかつた。

其夜父和太郎は何處で飮んだか、微醉機嫌で歸つて來て、まだ座るか座らぬのに、おみの又も

や虚言を搆へて、何か頻りに媚つる様子、おなみは縮こまつて、又阿父さんが酷いことをするだらう、と蒼青な顔して慓へて居る。

案の如く父和太郎は、荒々しく唐紙を開け飛ばし、片手に洋燈を持ち、づか／＼と寢床の側へ來て、蒲團にかぢりついてゐるおなみの手をぐいとひつ摑んで引ずり起した。

あれえ、御免なさい、御免なさい、阿父さん、と覺えず父の膝にかぢりついた。

何だ御免なさい、手前は己の不在の内己の惡口を利いたさうだ、さ、己の前で言つて見ろい、何を怨んでるのだ。

と和太郎酒氣が廻れば一入青くなる顏に、憤怒の相を帶び、力を極めて少女の細腕を握り〆めた。

阿父さん御免なさいよ、之から致しませんから、御免なさいよう。

とおなみは何も惡い事もしないのに、詫言して泣き入る。

何だ、な、何が悲いんだ、何で己の事を惡く言つた。

阿父さん、私、何も言やあしませんから免してくださいよう、と身躰をぶる／＼慓るはして泣く。

何も言はないと、今さう言つたぢやないか、此の虛言者奴、と膝に押つけたおなみの横面をばかりと拳固で一擊。

其機に父が握つた手が緩んだから、おなみは一聲悲鳴をあげながら、立つて逃げやうとするのを、和太郎は飛びかゝつて、後から襟頭を引掴んで引ずり倒し、潰れさうな花車な少女の脊上に乗りかゝつた。

何處へ逃ぐるのだ、逃げて見ろい、手前此家が厭か、厭なら出てうせろ、さ、今から出て行け。

と膝の力で脊骨の邊をぐつと一つ衝く。

私あ行く所がありません、便るのは阿父さんばかりだから、堪忍してください、御免なすつて、

と下でおなみは蚊のやうな悲哀な聲でいふ。

手前の親仁は他にあるんだ、己は手前の親ではないぞ、親仁の名が聞きたきやあ、阿母に聞いて見ろい、て、手前は、ま、姦夫の兒だぞ、己もな、手前の阿母が不心得があつてから、放蕩出して今にこんな容躰で居るんだ、手前は己の仇敵の片割だ。

と父も何だか泣聲で又も膝頭で續樣に蹂りつける、下に壓しつけられてをるおなみは、ひい〳〵と泣きつゞけて、上で言ふ事、聲は聞えても何だか譯は分らぬ。

さ、今から手前の親仁を尋ねてうせろ、と身動もしないで泣き入るおなみの手を荒々しく引掴んで、臺所まで引ずり出し、小さい力で板敷に蹈ん張り御免なすつて〳〵と詫び入るおなみの詞を耳にもかけず、ちつとも躊躇はず、水口から突き出して半障子をぴたりと〆め切つた。

突き飛ばされて少女は、彩に腰を打ちやう〳〵に起き上つても、腦の內は糸のやうに亂れて馬鹿のやうになつて、卽座に何と言ふ了見もつかないで、家主の土藏の羽目板に寄りかゝつて潜々泣いて居た。

（六）

裏に誰かは知らず泣聲がするので、今他所から戻つた家主の彦右衛門、手燭を點けて臺所から出て見ると、少女が土藏の羽目板に顔を押つけて泣いてをる。

はゝあまた極道奴が娘を苛めたのだな、と早くも合點して其側に進み寄つて、おなみを我家に連れ來て、其夜の次第を聞いたら、おなみは泪ながら途切々々に其夜の始末を話した、每時の通り病身の少女を苛めたので、殊に其夜は酷かつたのである。

彦右衛門はもう和太郎夫婦には愛想をつかして居たので、それは先妻おきんが和太郎の家へ來る時には、媒介人でこそなけれ、彦右衛門は種々周旋したのだが、先日おきんを離緣する時に、一言の沙汰もなかつた、それゆゑ此方では酷く怒つて、裏表に居て而も地主と家主を兼ねた關係はあれど、それから一切交際をしないで、月末にでもなつたら店立を實行してやらうといふ腹であつた。

おなみが來てから每夜のやうに和太郎夫婦が酷待をするのを、蔭で聞いて少女が可愛想だと家內で話し合つて居た、それでも一度も仲裁に行つたことはない。

おなみから其のことのみならず、是れまでの待遇を聞いて、彦右衛門は他人の事情ながらいとゞ腹立しく、そんな邪慳な親の家に居るにも當らない、青山へ歸つたらどうだと問はれて、おなみは此場合になつても、いかなる事があつても歸つてならぬとあつた祖父の言葉を守つて青山へ歸ることは厭だといふ。

それでは外に親類はないかと、彦右衛門夫婦に問はれて、世田ヶ谷に實の母があると少女は答へた。

それでは其所へ行くが宜しい、此家へ居たら、また和太馬鹿がどんな事をするかも知れない、今から己が其母親の家へ連れて行かう、と彦右衛門老躰をも厭はず、それからおなみと同道して薄ら淋しい澁谷の野道を通つて世田ヶ谷へ行つた。

此事を聞いて母親おたまは泪を流して驚いた、其の亭主といふ人も驚いた、おなみには直ぐに寢床を暢べてやつて、何は兎も角少女を實母の側に置く事にした。

其翌日實母おたまは青山の越前屋へ赴き、隱居重兵衛に遇つて、時移るまで熟談をしたが、此事は養子太兵衛に知らせない方が宜しからう、厄介でもあらうが、少し病氣の癒るまで世田ヶ谷に置いて貰いたいとの隱居の委頼に、我實子でもありおなみの可愛さは隱居の心と同じく、快く承知して母は歸つた。

此近所に昔から評判のよい、漢法から出た蘭法醫某といふ醫師におなみを診察して貰つた

ら、矢張胃病といふ診斷で服藥をさせ、おたまが精神の籠つた看病で、おなみの病氣は漸次に快方に赴いて、十二月中旬には顏の色も常に復して、氣分も冴々するやうになつた。

おたまの亭主は農業の內職に蕞再な荒物店を出してゐるが、正直で柔順しいが、酒をかぶると種々愚痴をいふ癖がある、此頃の愚痴といふは、おなみに係る事で、悉皆病氣の癒るまでおなみを我家に置いても好いが、越前屋の亭主が邪推の深い剛欲な人間だによつて、此娘を我家に養つて置くのは、隱居からでも金圓を貰つては居ないかと、ないい腹を探らるゝのが殘念だ、と醉つた上での談話だが、眞面目のやうに言はれて見ると、おたまも身を切らるゝほど辛い。」

此上はおなみの身軀をどうしたら宜らうと、おたま一人で思案に暮れ、早速越前屋へ行つて、隱居へ右の話をすると、重兵衛首肯いて、病氣の事は仕方がない、外へ遣る所はなし、我家へ引取る外はない、と直ぐにおたまと同道して、久振おなみに遇ひ二人乘の腕車に共乘して、越前屋へ歸つた。

隱居が養子に相談なしにおなみを連れ込んだから、太兵衛は河豚のやうに膨れかへつた隱居がこれ〳〵の理由で病氣の癒るまで此家で養生をさせたい、と挨拶をしても、碌な返事もしないで、其夕方ふいと出て行つて了つた。

其夜晩く養子太兵衛は原宿に住で居る隱居重兵衛の弟同道にて、隱居と太兵衛妻おきしがおなみの談話を聞いて打濕つてある隱居の居間に這入つて來た。

大人二人が改つて這入つて來た談判の要領は、此家におなみを置くなら、太兵衛はこれから此家を出る所存だ、といふおなみを置かば又夫だけの入費もかゝり、隱居がまだ秘してある貯蓄が、我所有とならないだらうとの心配から出た養子の示威である。

隱居重兵衛默つて聞いて居たが、徐に兩眼に泪を溢えた顏をあげて、さうか、宜しい、それでは今からおなみを追ひ出したら申分はあるまい、と起ち上り、誰も彼も情ない人だと呆れてゐるおなみの手を把つて、おなみ手前は餘程不孝者だ、六十九になる此の己にこんな、苦痛を見するのか情ない奴だ、今から實家へ歸つて、親仁に責殺されろ、と引立てやうとする、此場を外づして唐紙の外に窺聽をして居た女房のおきし、忙て、駈入り隱居とおなみの間に這入り、今夜は遲いから何事も明朝になさいまし、と握り合つて接いた兩人の手を放さうと同時に左右の手で握つて見ると、隱居はぶる〳〵娘はわな〳〵震へてをる。

（七）

隱居重兵衛何もおなみを突き出したくはない、たゞ養子太兵衛の仕打に激したのである、おきしの止むるに從ひ、おなみを越前屋の外へ出すは明朝に延し、其夜隱居は痛風で脚が痛むのも打忘れ、用事があると言つて我家を出て、知邊々々の家を敲き起して、おなみを暫時預かつて貰ふ事を賴んで見たが、置く所がなかつたり、太兵衛を憚かつて皆都合が惡かつた。もう他に頁策がないので、隱居は泪を飮んで翌朝早くおなみを世田ヶ谷へ車腕に乘せて送

り返した、其心は煮えかへるやうで、訣別の際は兩方で泪も翻れなかつたが、祖父も孫も無言であつたけが、傍で見る妻おきし氣の毒であつた。

おなみ歸つて昨夜の次第を話して聞かせたら、母親は泣き出して顏を上げ得られない、併しおたまの了見に餘ることで、おなみの身をどうしてやらうやうもない、地獄のやうな父親の側に置くよりも、奉行をさした方が、餘程安心であるが、實母でも今では他人であるから、無斷でそんな譯にも行かない、また自家に置く義理でもないので愈々父和太郎へ送り返すことになつた。

病氣も餘程癒つたらしい、これなら實家に歸つても寢込んで居なくて好いから双親の不機嫌も直るだらう、行つたら能託言をして柔順しくしておいで、いかな無理な事でも堪忍か大事ぞよ、と暮々も言い聞かせ、阿父さんは不在だらう、阿母さんへ持つておいでよ、と笹折に餅菓子を詰めさせ、おたまは火藥庫の近所まで、おなみを見送つたが、さすがに和太郎の家には入り得ない。

おなみ實母の詞を覺えて恐々ながら父の家の閾を跨いて、別段案内もなく、唐突に六疊の間の唐紙をおり〳〵開けたら、長火鉢に倚りかゝつて片手で頬杖をついて、何か頻に考へ込んで居た義母のおみの、周章の躰で、猫板の上に載せてあつた文のやうなものを袂に押込んで、誰だい、と聲をかけた。

躰と首を少し唐紙の開いた方へ捩つて打見やると、思もかけぬおなみなので酷く驚いた。

おなみか、さうだつたの、兎も角、此方へ這入んなと言はれて、少女はやう〳〵の事で其間へいざり込んで、實母から道々でも教へられた通り、今迄は惡うござんした、どうぞ勘忍してと可愛氣な聲を顫はして顔も上げ得ないで笹折の土産物を默つて差し出した。

ふん、土産かまさか毒饅頭も詰めてはあるまいねえ、私わ知らないよ、阿父さんが歸つたら能うく詫をおしよ、今まで何處へ居てた、お前も親仁に似て困りもんだ。

と長羅宇の雁鉢から吸殘の煙をふつと吸き出し、ぽんと煙管を疊へ投げ捨て、表へ立つて行つて了つた。

座敷に居殘りおなみ茫然して居たが、ふと四邊を見廻せば日本橋の木綿問屋へ取殘して來た行李がある、自分の物だから覺えず起つて行李の蓋を取つて見たら、內は空蟬の殼なので、着替や其他の品物はどうなつたのか、と胸の動悸が烈しくなつたほど驚いた。

實は此家に引取られる時、金圓は仕方がない、親仁の手に渡しても、衣服は無くされるから、油斷をするな、簞笥の鍵は肌身を放すなよ、と暮々も祖父の重兵衛から注意をされたばかりでなく、おなみは二十圓の金圓よりも、簞笥の中の品物が大事で、祖母さんからや、祖父さんからや拵へて貰らつた衣物や駒下駄までが秘つてある、それで生命から二番目と言つても宜しい。

行李の中の物が無くなつたので、箪笥の中が氣遣しく、直ぐに帶の下〆に括りつけてある巾着から鍵を取り出し、我所有ながら胸中戰々として箪笥に立ち寄つて、一番大事な晴衣が收めてある三番目の抽斗を音のせぬやう引き出し、品の數を撿べやうとする處へ、先刻から椽側に立つて障子の破目から、おなみの樣子を覗つて居たおみの、泥棒と一聲叫んで矢庭に飛びかゝつて少女の手に持つ箪笥の鍵を振ぢ取らうとする。

驚きながら、これを取られては、とおなみ繊弱い力一ぱい出して、鍵を持つ手の指を握り固めてもがくので、おみのは惡鬼の如く、少女の握り固めた掌を口に當て、がり〳〵と嚙みついた、嚙まれた指がびり〳〵と伸びた機に鍵をば奪ひ取りおなみの弱腰を抱えて椽端から突き轉ばした。

鍵をもぎ取られ、庭口に突き飛ばされたおなみ、地盤に平たくなつたまゝ泣きもしないでゐたが、急に身を起して跣足のまゝ一散に駈け出した、青山の方角へ向いて。

青山三丁目を半分過ぎると、いつも見慣れた軒端の井戸と酒樽を浮べた大桶と通行の馬士一ぱいあをつて行く腰かけの椅子が見ゆる、嬉しい、とおなみは前後を考ゆる遑がなく越前屋に飛び込んだ。

居合せた若者も樽拾の小僧も喫驚したが、恰度炭俵に小細工をして居た太兵衛、これは亦倘更驚いて目を圓くしたが、やがてそれも憤怒の相となつた。

おなみ、手前性懲もなく、また來たんだな馬鹿奴。と怒鳴つたが、おなみは他事に逆上せてさほど感しない、大變です、叔父さん、大變です、と太兵衛の側へ進んだ。

何が大變だ。

叔父さん、私の衣服は、私の簞笥は取られてしまつた、叔父さん取返へしておくんなさい、後生だから叔父さん、とおなみ泣聲になる。

親仁から衣服を取られたのか、さうか、なに兒の物を親が取るに何も不思議はねへのだ、もう此處とは關係はねへのだから己は知らねへよ、うるせへ、叔父さんと言つてくれるな、一寸でも内へ這入つたら酷い目に遇はずぞ、と恐ろしく脅されておなみ落膽しながら、急に身を軒端に退いて、叔父さんそんなことと言はないで、取返しておくんなさい、そして叔父さんに衣服は預けて置きますからよう、取返して、と泪を翻して、又も内へ進み寄らうとする。

まだ行かねへか、此の馬鹿と、太兵衛は走りかゝつて、大桶の水を手でしやくい、おなみを見かけてさつと浴びせかけた、あ〻つとおなみ切られたやうな悲鳴をあげて、五六間表の方へ逃げ除いた、全然此娘は飼主のない犬と同前。

（八）

おなみ越前屋から追ひかへされて、どこへ行くでもなくふら〳〵と澁谷橋まで立ち戻つて、

それから左へ折れて火藥庫の方へ足を向けた、これでは矢張實父の家へ行くのであらう。
少女は果して實父和太郎の家の側まで來たが、逡巡して直ぐとは入られないで、稍一時間もうろ〳〵して居た、其所へ其日は早退の和太郎が紫めれんすの風呂敷に包んだ行厨箱を提げて我家の門口へ來て、眼早くおなみの姿を見つけ、凄い眼光で睨みつけ、默つて內へ入つて了つた。
內では何だか密々話が始つた、おなみは恐々ながら庭口の木戸から顏だけ突き出して阿父さん、衣服を返して頂戴ようと聲をかけた。
何だ、衣服だ、と和太郎椽側の障子がらりと開けて身を現し、馬鹿を言ふない、衣服は他所へ預けて了つてあるのだ、手前を引取るにやあどのくらゐ入費が要つたかしれねへぞ其代にしたのだ、衣服が欲しいか、欲しいなら十圓も耳を揃えて持つて來い、さうしたら渡したやらうよ、おいまだ逡巡してるのか、擲り殺すぞ、と大聲をあげとんと一つ足蹈をして傘棚にあつた樫の棒をおつ取つた。
此の權幕に、おなみ後をも見ずして逃げ出し、一方は廣尾道、一方は靑山道、一方は世田ヶ谷道に分るゝ坂の上まで逃げのび、始めてふるへる足を踏み止めたが後から追かけらるゝやうな氣がして、心が落着かないで、またも一散に坂を降り切つて世田ヶ谷の母の家へ向つた。
日は、とつぷり暮れた時分世田ヶ谷に着いてこれ〳〵と少女は泣ながら話した、母も泣きな

がら聽き終つた。

併し猶豫する時ではない、強慾非道な親仁だから、簞笥のものを賣飛ばされでもしたら回復のならぬ事、十圓の金を才覺して、其衣服を取戻したい、取戻したなら、質に置いても十圓其位は何でもない、此方に曲げて置いたなら、流るゝ氣遣はなし、其の内にどうでもなるだらうと母おたまは、鍵をねぢ取られ衣服を自由にさるゝ事が、娘おなみよりも氣にかゝつて、どうにかして十圓の金をこしらへん、と先づ亭主に事情を話して相談をすると、亭主もおなみの境遇が氣の毒にも可愛想にも思はれ、よし、即今現金はないが、二人が着てるものを叩つ返んだら、其位の金は出來さうなものだ、とおなみの目前で、亭主の外出着の小袖二領と外に布子三枚、おたまは先月物の要ることで曲げて了ひ、たゞ衣替を持つて居るのみ、亭主のばかりでは覺束ないので、無くては外出に困る襦袢と縮緬の二布まで取添え、おたま風呂敷を抱えて其夜近所の質屋へ行つた。

漸との事で番頭を口説きおとし、おたまは金十圓纒めて來た。

一時も猶豫する時でないから、明日早々に行く事にして寢に就いたが、おなみは氣にかゝる事はあり、これまで老人と同臥をしたので、早起の癖があつて、三時頃にはぱちり眼が覺めてそれから眠られない、夜の明けるのが待ち遠しく、やがて軒端に雀の音が勇しく、青物を大根河岸へ運ぶ荷車がぼつ〱其前を通り始めたので、おなみは寢床を離れた。

明けた日は十二月二十日、一天掻曇つて雪模樣、北風肌を削るやうに吹き廻る、早朝から出かくる積であつたが、馬士の都合で、早晝飯をつかつて、おなみは村で樽柿の卯八と綽名を取つた四十面の馬士と一緒に世田ヶ谷を出かけた。

空は薄墨のやうに掻き曇つて、怪氣な雲が飛び歩いて、やがてちらほら其の破目から青空が見え、少し風が凪だ頃、白雲が蛇腹になつて、弱い日の光が洩れて來たが、それも少時の間で氣味の惡い元の薄墨色の天幕を引き延ばした。

上目黒村へ來かゝつた頃は、綿のやうな雪片が、ぼてり／＼と落ち初めて、馬の髮が斑白になると直ぐに消えて、又斑と見る間に、野路の枯草の上には、白砂の花が咲いて、四五本深く凹んだ車輪の跡には、白い條が明白に附いた。

卯八はおゝ寒い、寒いと言ひながら少女を相手に談話も爲盡し、手綱を、肩からかけて三尺帶に結びつけ、腕を拱んで鼻唄を謡つて馬を引張り行く、おなみは頰も耳も手も針尖でさわつても、黒い血が迸しりさうな紫色を帶びて、握り固めた拳に吐氣を吹つかけ、寒さうに馬の尾に從いて歩いた。

午後の二時頃、和太郎の宅に着き、門口へ馬を繫いで、おなみ今度は正面から格子戸を開けて御免なさいまし、と音づれた。

和太郎はまだ勤務から歸らない、おみのはぬつと顏を出したら、おなみなので、忽ち顏の色が

變つた。

おなみは阿父さんが金十圓持つて來さへすれば、衣服を渡してやるとお言ひだから、金子を持つて、馬も連れて參りました、と飽まで柔順しく來意を明した。

さうかい、それは御苦勞だねえ、だが私お知らない、今に阿父さんが歸るから、さう言つて見るが好いのさ、とおみの唐紙を立て切つて内へ遷入つて姿を見せない。

勿論火鉢も澁茶一杯も出さない、それから一時間も經つても、二時間經つても、もう來てから彼是三時間にもなるのに、和太郎は歸らぬ、おみのは引込んだまゝ音沙汰はなし、寒さは寒し、雪は段々降り積る、おなみは上口に腰をかけ、馬士の卯八は軒下に降雪を避けて縮こまる、寒晒の馬は寒氣に堪えかねてか頻に嘶く。

卯八はおなみにまだか〳〵とせつけども、おなみは何と詮方もない、それではちよつと火藥庫へ行つて旦那を呼んで參りませう、と玉の塵を蹴立てゝ駈け出した。

二十分間も經つて和太郎、馬士と諸共歸つて、入口の土間に少さくなつて居るおなみを尻目にかけ、また來やあがつた、と一喝して奥へ入らうとすると、おみの出て、お前さん、歸らないでも好かつたに、衣服を取りに來たんだよ、こましやくれて、と言ふ語からが憎々しい。

さうか、己あ亦大した用でもあるのかと思つた、此奴に一ぱい食はされた、と言つゝづかづかとおなみの側へ近寄り、一蹶に蹲んでゐる少女を蹶飛ばした、外に内の樣子を見てゐる卯八

は呆れ返つた。

蹶飛ばして實父の和太郎眼から火の走りさうな凄じい血相で、痛けれやさつさと出て行け、と捨臺詞を殘しておみのと共に、次の間へ入ると、直ぐに高笑の聲が聞ゆる。

おなみは倒れたまゝ、格子戸にかぢりついて絶入るばかりに泣いてゐる、馬士は寒氣と腹中の欲食のに堪え兼ねて、坂下の茶屋で一杯やりながら待つて居ますぜ、と言ひ捨て馬を牽いて立ち去つた、おなみは片手で紅入唐縮緬の前垂で顔を蔽ひ泣き沈んでゐる。

（九）

火藥庫から程遠からず、三方へ岐道で、西は世田ヶ谷へ通ずる坂を降り切れば『うどん』『そば』と書した軒行燈がかゝつた茶小屋がある、元は青竹であつたが年經るまゝに煤色となつた簾の上に、海苔卷と稻荷鮨と鮪の握鮨を二つ三つ交えて並べ、其傍には小形の小判形の風呂があつて、此中で酒の燗もするし、饂飩も蕎麥も暖める、向の棚には大小不揃の德利が並んで、ちつとばかりの蒸籠と蕎麥皿が同居して、同じく不揃の小皿や小鉢も交つて、地震でもあつたら一番に瓦落離と參りさうで、篠皮を挿んである下には、内は空洞らしい拭被の酒樽が座つて其上に醤油樽が載せてある、六十に近い齒糞一ぱいの老爺、頻りに澁團扇で風呂の下を煽つてをる。

一方には床の低い三疊ばかり丈長な客の腰を卸す所があつて、天井の煤を避くる爲めか其

上には眞黒な色をした葭簾を張つて、荒壁には四分板を押つけて繩で縛り、其傍に柄の折れた岡持、其上に軒行燈の骸骨、其上に小兒の濕れた着物が引かけてある。

樽柿の卯八は最早五六本の德利を平げ、もう醉が十分廻つただけ呂律も廻はらぬやうになつて躰軀がぐら〱なつて了つた。

おい、聞ねへ、かう、己あ腹が立つて耐んねへよ、腹も立つも無理もあるめへなあ、無理はねへ、ねへなら聞きねへよ、もう聞いた、聞いたなら好いが、聞きねへといふ事よ、彼娘の家でやつとの事で十兩拵へてよ、受取に行つたら、どつこい、衣服を渡さねへと來やあがつたんだ、酷いの酷くないのと、聞いてくんねへ、己ら腹が立つ、好いか、其上な、足で彼娘を蹶りやがつたんだ、蹶たよ、ひいとお前泣き出したらうぢやねへか、死にさうな聲で己も泣きたくなつたぜ、おい、爺さん、酷からう、どうだい、え、おい、若者、どうだいこう一つ威勢の好いことを打始めちやあ、はゝはゝゝゝ、好い心地だ。

と譯の分るやうな分からぬやうな事を酒が言はする、老爺は水鼻汁を擦りあげ〱さうだなあ〱と聞流し、土間に衝立ち燃殘の焚火に尻を焙ぶつてをる三十恰好、温袍を着た此村の遊人らしい見るから物騷な人物、顋髯を爪で引拔ながら、冷笑つて醉漢のくだを聞いてをる。

折からおなみは衣服を取返し得ず遂に實父和太郎につまみ出されて、雪のつまつた駒下駄

を重さうに引ずり、軒頭に繫ぎ放の馬を目標に此屋へ還入つた、卯八は少時前ばたりと其所へ倒れて寢て了つた。

何程搖起しても馬士は動かないので、おなみも老爺もほと〳〵困り果てた末、少女は草鞋に穿き代へ駒下駄を手に提げて茶小屋を出かけた、出て來る時和太郎の家で八時は鳴つたが、まだ雪は止まない、晝から寸時も止まない。

股火をして居た男、何思つたか老爺に挨拶もせず急に此屋を出て行つた、卯八はぐう〳〵と高鼾聲で寢込んで了つた、表には馬が鬣の雪を拂ふ外、六花飛舞の音が靜に聞ゆる。

* * * *

人往來の尠い田舍道、雪の積むこと四五寸、おなみはぱくり〳〵と草鞋を蹈み込み、片側は人家續の藪疊、片側は枯草の蔽ひかぶさつた田川の流雪折竹が道に倒れかゝつてある下をば潛つて行く、氣味の悪さ、木の葉木の枝から吹き落された雪の塊、眼前に落つるたび慄として、魂身に添はず、恐々ながら小脚を運んで巾狹の雪路を辿り行き、西鄕別莊の西洋門の前に來てほつと一息して眼を放つて見れば、野も丘も眞白で、遙の森蔭に一軒屋の燈が、銀簾を卸したやうな降雪の間からちら〳〵見えて、氷のくさびもないのか、水車は晝夜を分たず轉々動く音が止む、間もなく聞え、晝までは田澁で濁つて居た水田、灰色となつて、稻の切株のみが頭を出して、縱橫に跨つた畔道の處々、立ち並んだ稻塚は、白狐が座つて居るやうで、おなみこれに

も太くも膽を潰した。

雨具はなし、脚は雪に冷え凍えて飛び上るほど苦痛を覺え、草鞋と足袋の間に雪の塊がめり込んで、足裏は刺さるゝやうで、刄物の上を踏むやうにも、熱銅の上を渡るやうにもあつて熱いのか冷いのか、果は兩足全く知覺を失つて了つたが、割に腰から上は暖である。

氣が立つた勢でおなみ、世田ヶ谷の方へ覺束なくも急ぎ行く後から、誰とも知れず、温袍を着て淺黃紋羽の襟巻で面部を包んだ大男、駈け來つておなみにどんと衝き當り、驚いて前へ滑る隙を狙つて、少女の内懷にある財布を引切つて、やらじと爭ひ起きんとするおなみをば、傍を雪に淀み流るゝ田川へ突き落し、何處ともなく逃げ去つた。

おなみは全躰惣濡となつて漸と這ひ上つた、雪はます〳〵降り頻る、母から折角才覺して貰つた金子を取られたので、暫時茫然して雪中に立つて居た、泥に踏み込んで片足の草鞋は脱げて、濡れた衣服は見る間にしやちこ張つて躰軀は次第に冷え渡る。

衣服も取返されず、金子は盜られて、此まゝ歸つたら何と申譯をしたらばよいものかとおなみいろ〳〵と少さき心に考へ餘り、忽ちかつぱと積雪に倒れて泣き出した。

再び起き上つておなみ、青山の祖父さんに賴んで詫言して貰ふと、心を決して例の坂まで立ち戻つた、青山の方へ二三町も凍え足を運んだが、叔父の太兵衛の事を思ひ出し、引返して例の坂まで戻つて世田ヶ谷の方へ足を向けたが、また坂を上つた、また坂を下つた、おなみどう

したら能いかと思案に暮れて坂を上下すること六七度、雪は巴に舞ひ狂ふ、茶小屋も戸を閉ぢ、萬籟寂として時々木の枝の折るゝ音のみ、犬の吠聲も聞えない、行衛にためらふ少女おなみ全身氷のやうに冷え渡つた。

* * * * *

夜は明けた、繼子の洗濯といふ雪の旦の好天氣、古川の水上、澁谷氷川神社前の小川に、近年にない大雪、來年は豐作ぢやと噂をして行く此邊の百姓二人が發見したのは、十二三とも覺しき少女の死骸、肩と髮の少さな銀杏返とに昨夜の名殘を留めて雪をかぶつた若菜、天女のやうな無邪氣な顏を仰げて今にさし込む日の光を待ち乳から下水に浸され、兩手で河緣から下つた名もない蔓の絲をたよつたまゝ眠つたやうに死んでゐた。

あゝおなみは思案に暮れた末、心を決して青山へ行かんとこゝまで來て此小川へ滑り落ちて凍え死んだのか。

馬子の卯八は其筋の嫌疑を受けて拘引せられたが、其夜は茶小屋で朝まで寢込んでゐた事實が明でやがて無罪放免となつた。

今後の家庭雜誌

〔挿畫〕久保田米僊畫伯、靈妙の筆により口繪倍々光彩煥發、挿畫は新意匠新面目〔社説〕我社の主張する處を發揮し、家庭の善良、個人の幸福及社會の進步改善を企圖す〔論說〕社會教育、婦人及家庭に關する警拔の觀察、公平の論評を載せて一世の問題たらんを期す〔科學〕最も愉快なる方法により最も實用なる物質的新文明を說明し科學の智識を發達せしむ〔史談〕古今東西洋の偉人豪傑烈女才媛、輕快靈秀の筆端に活潑す〔文藝〕艶麗春花の如く、清爽夏夕の如く、高明秋月の如く、靜肅冬雪の如き斷篇小品の類〔小說〕莊重或は高潔或は悲慘の社會的歷史的家庭的小說を精撰す〔談叢〕古今の實話、東西の奇譚、寢物語、諷刺物語、寓意物語等殊に少年少女の智識娛樂に供す〔群書解題〕古今東西の各著最も平明最も簡潔に解釋せらる〔近著紹介〕家庭及婦人小兒に有益なる近刊書を紹介す〔家政〕は益々擴張し家事經濟、育兒、衞生、看病、料理、交際、家庭整理、奴婢使用、園藝、家畜、裁縫、編物、等凡て實用の諸事を網羅し懇切且つ叮嚀を期す〔職業案內〕我社の持論を實行せしむ〔社交一班〕率先して新流行を報じ且つ物品購買に便す〔雜錄〕他欄に入らざる種々なる問題、種々なる事柄を臚列す〔歌苑〕汎く江湖より募集したる名什佳品を掲載す〔文章〕以上の文章は平明、勁直、典雅、嶄新、讀み易く又解し易からしむ